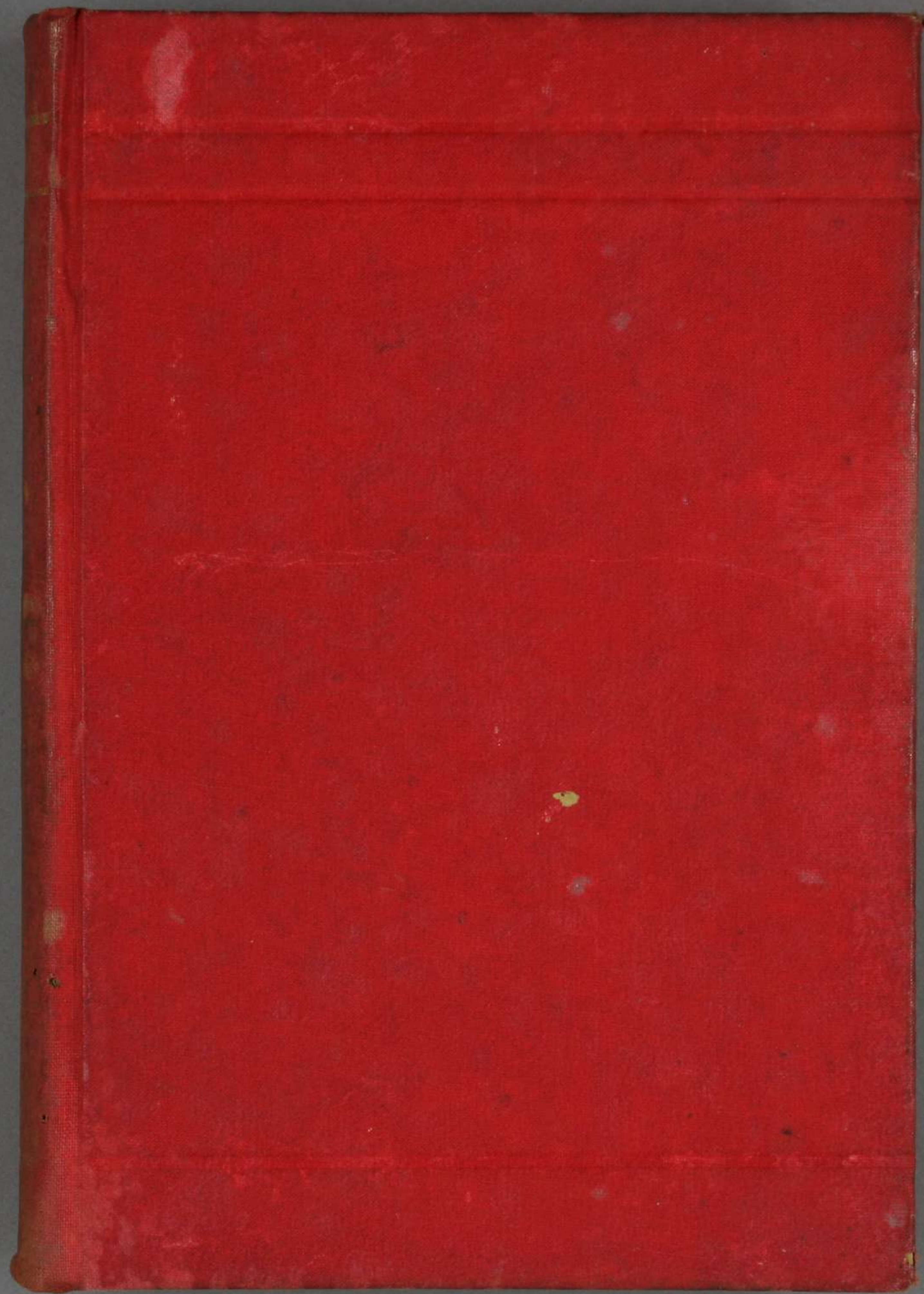
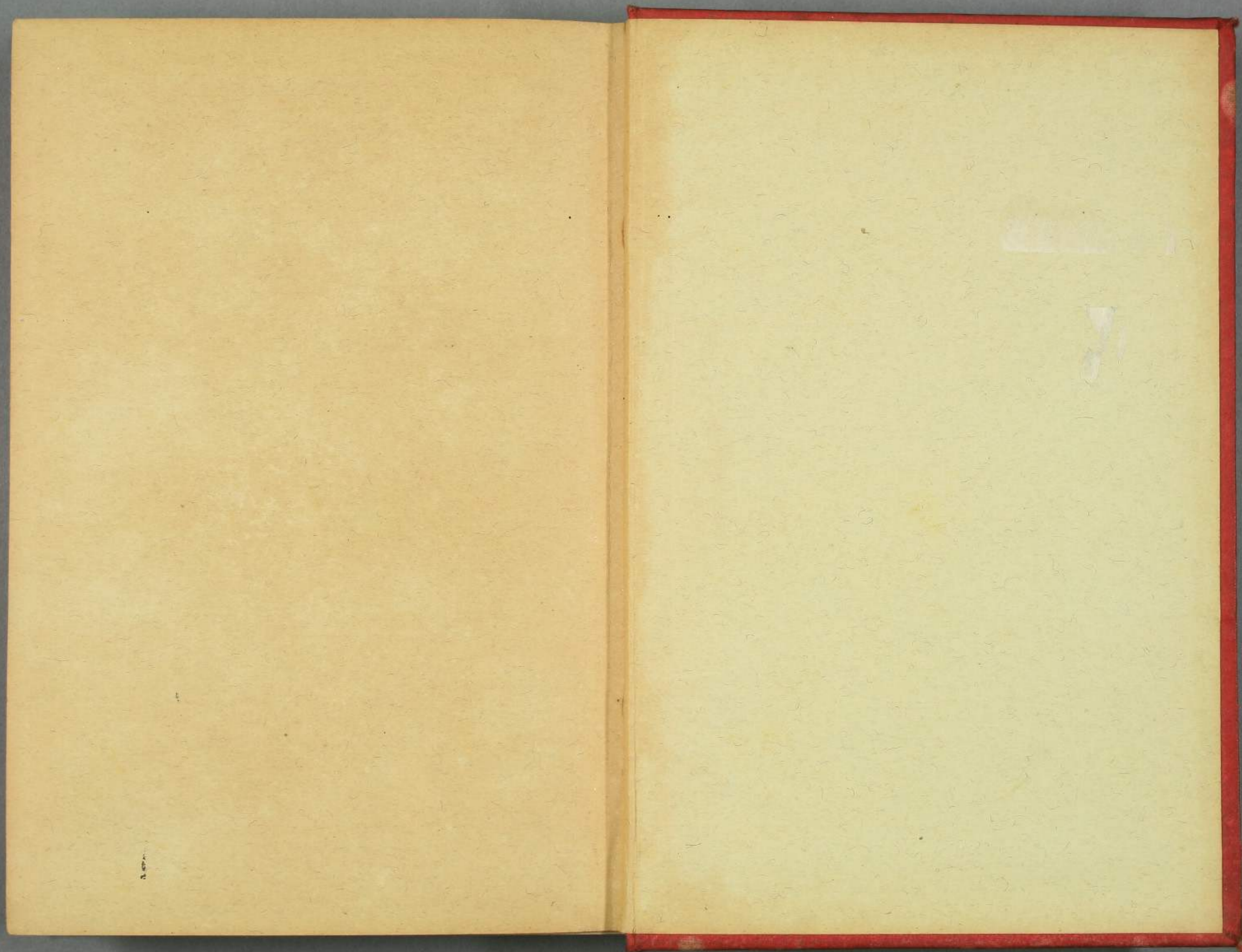


今様
長歌
湖上
の
美人
全

スロウ
塩井正男
撰





吳國詩人又云
西江釣士
墟井正
蘇州述

今樣
湖上
美人
長歌

東意
開新
常
是
國
圖

英國詩人スコット氏著
雨江釣士塩井正男譯述

今様
長歌
湖上の美人
全

東京
開新堂發兌



白序

あゝいづれの故郷に美人はまの親しいたスコットと
あじく歌おれ惜むる美吉村とくも國の人より世ふ
は家こゝれ又人やはわらひききふくわらひ美人
をそよ人の秘苑の世思少くほくくをほくられ
志若はふあつた様とぞた思ふぞスコット氏の詩は
あつたもくもつあつたくもあの人をある海乃けそ
あつたも海乃陽をわがスコットとくも人言ふは
あつたもいづれの故郷に美人はまの親しいた

うき世の美世の福をば
自學の意をスコット氏
遊んで舞入るは人の
らも舞入るは人の
うき世の美世の福をば
自學の意をスコット氏
遊んで舞入るは人の
らも舞入るは人の

うき世の美世の福をば
自學の意をスコット氏
遊んで舞入るは人の
らも舞入るは人の
うき世の美世の福をば
自學の意をスコット氏
遊んで舞入るは人の
らも舞入るは人の

の感冒に犯され、病床に在りて、筆取る事の叶はねば、わかき妹に託して校正せしめたり。されば、思ふやうならで、假字を餘りに用ひて、讀みにくき所も多しとおぼゆ。且つ疏漏の點少からず。卷末に附したる正誤の條りを、よく見玉ひて、解せられむ事を乞ふ。殊になどいふ事多くあり。此は汝といふ詞なれば、か思ひてよ。

○此を譯する、随分苦心を盡くしたり。されど、おのれ淺學なり、無才なり、殊に原書は西洋、譯するは東洋、風俗も變り、事柄も等しからず、言語も同じからず、志想も異れり。彼れは薔薇と云はむ所は、おのれは櫻と云はまほしく、彼れにては面白く思ふ所も、我目にては拙く、彼は綿密周着をよるこび、おのれは粗疎おぼろげなるをよしとす。おあじく嬉しき事、悲しき事、勇ましき事、いはむと思ふにも、いひ方を異にせり。かゝる有様なれば、まゝ彼の意を取りて、我が國風に歌ひたる事もあり。また彼の句のまゝ譯したる所もあり。されど意味ばかりは、誤解はなしと思ふなり。

○原書には、卷頭卷末に、琴を誘ひ琴を送りたる一段あり。されど、此の湖上の美人の物語りには、深き關係あらず。殊に幾度か苦心したれど、面白き譯出來ず、餘りに書肆の催促せば、熟稿の隙なく、されど、わけのわからぬ句を置かむも本意ならねば、こは再版の節に、載する事として、此度は省きぬ。

○長篇なれば、句の折り節は、變動もなくて、はなかく面白からず。又歌とて、字數を限るものから、句の都合、文字の工合にて、主となる句、客となる句など、殊更に轉倒したる所あり。又形容の句を、二對三對ならべて、一句にて結びたる所あり。よくの注意して讀まれたし。

○假字の側に、二本の線を引きたるは、人名或は黨名にて、一線を引きたるは、地名或は山川都城の名なり。

○エレンといふは、此長歌の主人公なる湖上の美人の名にて、ダグラスといふは、湖上の美人の父なり。ゼームスといふは、スコット國の王にて、

初め狩野の路に迷ひて、エレンの山家に宿り、ヒッセームスと偽名し、又
エレンの岩屋に退きし時、難路を凌ぎ來りて、指輪を遺し行く人なり。ア
ランといふは、エレンの父子に仕へる俗人の名なり。ロデリックといふは、
エレンの従弟にて此の湖邊の郷の會長にて、ダグラスとエレンの落人
となりし時、此の湖上に迎へて、共に住みたる人なり。マルコムといふは、
エレンの親しき友にて、互に戀ひ戀はるゝ人なり。其外に二線ひきたる
は、國王の近臣、又は諸侯、又ロデリックの黨の人々なり。

スコット氏の傳

層々と描ぎ出づれば、筆端に峻嶺聳えて、綠樹まげり、清流みなざりて、玉
藻ながれ、舒々と説き來れば、文詞には霞たなびき、花さきにはひ、月すみ
わたり、露ちりまどひ、奮然と振ひ立てば、筆端に大刀輝き、劍鳴り、三軍を
も叱咤する聲ありて、げにも優く、けだかく、勇ましく、はなやかなる文章
家詩人なるスコット氏。氏は英國スコットランドの人にて、千七百七十
一年といふ年、八月といふ月、十五日といふ日に、エジンバークといふ所
に生れたり。幼きよりいたつきに苦しむ事多く、二歳といふ歳の春、いか
にやしけむ、右の足ゆゑなくて、俄に立すなりぬ。八歳に成りぬ。やゝ健康
に成りぬ。それより近きわたりの高等小學に入りぬ。されど、幾日もあ
らで、病は又烈しくなりて、言葉もえいはず、ものもえくはず、月幾月、日幾日、
ひたなやみて過ぎぬ。病は癒へたれど、紅顔の健康は又かへらず。それよ

り七歳の春秋、我窓の月、我軒の花、垂れこもりてのみ暮らしぬ。さういへ世界を動かし、人心を靡かしたる氏の文學の種子は、誠に此の窓の月、此の軒の花蔭に蒔かれたりといはなむ。そは、氏は面白からぬ病窓つれづれを慰めむものとしては、唯古今の小説、今古の物語りのみなりけり。氏は實に、詩にまれ、歌にまれ、淨瑠璃にまれ、小説にまれ、實傳にまれ、さらむ類は、ありといふ限り讀みあかし、讀み暮らしたり。殊に英雄の物語、武士の小説を好みて讀みぬ。

あはれ氏の文、氏の筆、武を描き、士氣を寫すに秀てたるは、決して偶然にあらず。又垂れこめて、よその天唯思ふのみなれば、文學者詩人の骨髓ともいはむ想像は、唯積みと積て、散りゆく隙はなかりけるらむ。誠に氏の文詩の種子は、此の年月に蒔かれしといはなむ。

氏の父は法律家なりけり。氏も十五歳の春より、父に従ひて、おなじ道を踏まむとせり。されど、氏の愛するは文學の書。氏の思ふ所は文詩の趣向

にして、詩歌に痛く心を傾けぬ。又折りあれば山川に杖を引き駒を踏ましたり。あはれ此の湖上の美人、山家の風景、湖邊の朝夕、寫し盡くし、書き得て、讀めば誠に其處わたりに住む心地するばかりの氏か妙筆は、げに故なきにあらぬなり。

氏が初めて書きたる文は、北歐人民の風俗習慣といふ論文なりけり。さはいへ、氏が初めて詩家といふ名を世に知られむと思ひ立ちしは、ウイリヨム、ドヘン、といふ詩にて、千七百九十六年に出版されたり。獨逸の詩を譯したるものにて、其後千八百一年に、獨逸のレ、ホ、の奇談といふ詩を譯して出版したり。其後三年ばかりありて、故俗人の歌といふ詩を作りてより、あはれスコットあはれ詩人といふ聲高くなりぬ。マ、イ、ミ、オ、湖上の美人、ドン、ロ、テ、リ、ク、ロ、ク、バ、イ、ア、イル、侯などいふ詩、皆清く美しきが中に、一種卓絶の氣節を含み、益出で、益妙なりしかば、詩家てふ名は、尾上の奥海原の外にも響きわたりぬ。豪傑、ハ、ロ、ド、といふを作り

たるに、世評思ふやうならざりしかば、氏は痛くおもしろからず思ひぬ。それより韻文を捨て、散文を心懸け、小説あまた作りぬ。皆一種の氣節あり、品格ありて、世の濁りたる文人、世の穢き小説家に似ざりければ、二なき小説とてはやされ、氏の詩、氏の小説は、世人の愛讀、唯ならずありぬ。

氏は又、其の文のごと、其の筆のごと、心も優にやさしく、道にいさぎよく、あつばれ世の男兒なりければ、多かる友には、此上なくあはれの者にせられぬ。この文人、この詩家、かなしき事は、人ゆるゑにゆくりなく、十四萬弗に餘りたる負債を受け、いかにもしてこれを償はむと、終年終日筆をどぎ文を磨き、僅に返へしつくさむ時となれば、悲しいかな、魂は故土に歸へりて、空しき世の人となりにけり。げに千八百三十二年といふ年、九月といふ月、菊の白露消えがてに見ゆる頃なりき。

湖上の美人

鹽井正男譯述

第一章

その一

モナンの小川	風のさえて	光りいざよふ	夕月夜
かげのながるゝ	谷の水を	のみてあきたる	さをしかの
床はかなたの	森の蔭	まげるはしばみ	その下に
妻をこひつゝ	ねぶるなる	夢路の末や	いかあらむ。
あからひく日の	朝日かげ	ポイルの峯の	山の端に
かゝやき初めし	ほどもなく	さけびくゝて	狩犬の
山路をのぼる	聲すなり。	峯のあらしの	末遠く

駒のひづめの

おどすごく

吹く笛の音も

きこゆなり。

その二

いでやものども
敵の旗手は
その兵者の
うちおどろける
あれたる野邊の
草のまどねを
枝なす角に
甲かざし、
角をよろへる
まばし谷間を

いそぎどれ
程近ま
さけびたる
その如く
主とモ
したゝかに
置く露を
弓取りの
かしらをば
見おろしつ。

剣に弓に
おくれとるなど
聲をばさゝて
角をかざせる
見ゆるをじかは
けたてながらに
心まづかに
われはといはむ
雲井に高く
もみにもみつゝ

はた鎗に。
木戸守る
城の長の
毛のあらもの
わがねたる
踊り出で
うちはらひ
風情にて
ふりかざし
ふきあぐる

追手の風に
さけびをまばし
見えぬと思ふ
さしてにげけり

うそぶきて
きゝ居たり。
時しあれ
おひしげる

いやましすごき
先手にすゝめる
かたへの若木
ホラが高峯の

狩犬の
わたのかげ
踊り越え
草村を。

その三

いでや落武者
あなきたなしと
いはほにひゝき
その後へより
つゝみの聲に
木だまの限り
朽木のうちなる

まてまばし
狩犬の
谷にまた
千の萬の
どきの聲
ひゝくなり。
野狐も

などうしろをば
群をみだして
こたへくゝて
駒うちつれて
ポイルの峰の
思はぬさわぎに
出て、野末に

見せつらむ
ほゆる聲
さわがしき。
ふきならず
峰ふかく
おどろきて
うちまよふ。

塚の邊りの
かひゆく犬の
そのかけ遠く
よわりゆきつゝ
森のあらしも
山鳥の聲

荒たかは
一むらを
見えぬまで
いはをうち
をさまりて
えづかなり。

木ずるのまげみに
まきはなたず
音もひいきも
いづみうつ聲
八重なす山の

身をよせて
見送りぬ
いや遠く
きえがてに
山かげの

その四

八重の山なす
とよさかのぼる
ささをあらそふ
疲れし駒も
さしもをしき

ホラが峰
朝日子の
さつをらも
うれしげに
かり犬も

のぼりもはてぬ
そのかけ高く
手綱ひかへて
朝の風に
つゝくはわづか

そのうちに
ありにけり
たゝすめば
いなゝきぬ
半のみに

神のまします
鬼の住むてふ
共にたえけり

たかねをも
いはやをも
うせにけり

崩さむ音は
くだかむ力は
あはれその音

今いづこ
今いづこ
その力

その五

心やさしき
まばしいきをば
きよきながれの
をじかは遠く
きづかはしげに
いかなるかげや
湖ちかくや
かのアレイの

さをしかは
やすむなり
こゝかしこ
山のかた
うちまもり
たのまなむ
落ちのびむ
湖の

山の南の
見れば麓は
里かけ遠く
あるは牧場に
いづくの方か
はるかに見ゆる
いぢまでまばし
水に波かく

いたゝきに
マイス川
かすかなり
あるは野べ
落ちやすき
ロハードの
それならで
川やなぎ

まどりてたてる
さなりくど
かけりくくて

松 林
梓 弓
かけりゆく

そのまげみをば
よわりし心
すがる追手を

たよらまし
ひきなほし
あどにして

その六

よせによせたる
よわりし駒や
山の細路
乗りたるまゝに
はてしもあらぬ
わけもはたさず
みぢぎりわたす
わたりもえせず

狩びどの
おほからむ
わけし時
その駒を
ボハストル
駒とめて
タイヌ川
あはれとて

カンパス澤を
空にそびゆる
どるや手づなの
ひかへし手づな
おひしげりたる
なげきしものも
波いとはやき
うめきしものも

こえし時
レギ山の
望たえ
おほからむ
葦原を
おほからむ
淵瀬をば
おほからむ

おなじタイヌの
岸を岸へと
追手はいかに
つゝさしものは
タルンの橋を
あはれやあはれ

おなじ水
わたりしを
よわからむ
わづかにて
ゆくころは
た、一騎

一日に二たび
わたりかねたる
ベンナカ湖の
むかしかたりに
さきにすゝめる

さをまかは
さつ人の
ほとりまで
名もたかき
騎馬一騎

その七

騎馬の武士
こまをけたて
さすがの鹿も
姿たしかに
中にすぐれし

唯一人
むちをふり
つかれけむ
見えそめぬ
犬二疋

猶もころを
いづくまでと
うちあへぎつゝ
たけきものでふ
すかさずあどに

はげまして
逐ひかけぬ
にげまよふ
狩犬の
逐ひすがる

しまやさいごと
間はわづか
をじかも遠くは
木の根いのかど
はどりを遠く

かけるなる
鎗いどつ。
にげもえず。
嫌ひなく
かけりゆく。

をじか目かけて
犬もちかくは
いばらからたち
まけずおどらす

どびかゝる。
逐ひつかず。
問ひやらす
湖の

その八

えたりくど
岸の高根を
いかでこゝをば
最期の覺悟
えたりやものと
胸に數へつ

かり人は
うちあふぎ
のがれえむ。
まほらしく
既にはや
ほゝゑみつ。

さびしき湖の
いかにをゝしき
死出の一戦
かれはわが手に
枝なす角の
最期の手きづ

さかひなす
さをしかも
花々しく
落つならむ。
價をば
死出のはえ

すいこそ來れど
ねらひはいかに
向ひの岩より
あやめもわかず
草の深みに
まげけきこやの
花にうもれて
尾上の谷を
あはれかひなく

かり刀
まどはいかに。
身をかはし
うば玉の
まのびたり。
露さむく
さをしかは
うちやぶり
なきさけぶ

さをばらひて
をじかははやく
谷をけたてゝ
あどをかくして
くさのまどねも
千草八千草
耳をすまして
底のいはほに
犬の聲のみ

まちかけぬ。
まどを反れ
一むきに
トロザ一の
あし原の
さきみだる
きゝをれば
くだけつゝ
きこゆなり。

その九

やをらさつをは
なだめむと思ふ

立ちよりて
をりしもあれ

力なげある
のりたる駒の

狩犬を
こはいかに

くぼみに足を
 仆れていきは
 ひきゆるかせと
 起たすなり鳥
 力のこゝにや
 再び起たす
 かへるすべなき
 くやしき事を
 そゝくもあはれ
 セインの川の
 練りし時には
 汝をスコットの
 わしのゑどきと

ふみいれて
 たえにけり。
 かひもなく
 あはれ駒。
 つきにけむ
 ありにけり。
 悲みに
 去てけりと
 血の涙
 堤にて
 いかでわれ
 山深く
 あさんとは

一 聲 高く
 あせりくゝて
 よきけづめをば
 さしもすぐれし
 かたきあしをば
 手なれの駒は
 さすがあはれの
 むなしき駒の
 思はざりけり
 初めて汝の
 取りし時には
 かゝる尾上に
 思ひがけきや

なきしまゝ
 手づなをば
 さしたれど
 一 物 も
 うちのばし
 よべとく
 いやまして
 なきがらに
 われこそは
 手綱をば
 いかでわれ
 汝をわれ
 汝をわれ

かくならむとは
 汝が命を
 けふの恨みの

その十

今
 のまも
 かけたりし
 限りなり。

思はざりけり
 狩りは恨みの
 あはれすぐれし

わが駒よ。
 かぎりなり。
 あをどまよ。

さつをもちすが
 なほあざりゆく
 一 聲 二 聲
 あしもおもげに
 ふきやみにたる
 梢のふくろふ
 すきゆく聲の
 さつをは一人

力 なく
 かり犬を
 ならししに
 主ちかく
 角の音の
 森の鶯
 山行末
 山路を

甲斐なき手づな
 うち戻さんと
 いかにかの
 あゆみくるこそ
 なほ谷がくれ
 いくその夢を
 高根にきこゆる
 遅れし伴に

手にとりて
 角とりて
 よわりけむ
 あはれあれ。
 ひゝきあひ
 やぶりつゝ
 松の風
 あはむとて

すゝむとすれど
足とゝめつゝ
山のけしきの

幾度か
こゝかして
あやしさに

ふみこそまよへ
山のかげぢの

こゝかして
けばしさに

その十一

高きたかねを
波なす雲に
きらめきたてる
しづみつうきつ
玄かはあれども
木々の梢の
たゝみあげたる
はつかに見ゆる

見あぐれい
てりわたり
石の上
その雲に
おのがをる
しけりあひ
石角に
ばかりにて

しづむ日かげは
紫にほふ
うきつまづみつ
光りをあらそふ
麓の谷の
日かけはたえて
てりてかゝやく
よもにそびゆる

山のはの
岩の角
その波に
さま清し
細路は
もりも来ず
そのかけの
その岩は

おのづからなる
はかあき業の
シナの平野に
いはをつらねし
高きところは
つくるにいたり
たてし白旗
かぎりもしらぬ
そのかたへなる
枝もたわゝに
みだれをれふす
なびくに似たり

とりてにて
工らか
積みしてふ
いたゝきの
やぐらにて
こゝかして
赤旗の
頂に
松ヶ枝に
おく露の
そのさまは
こゝかして

遠きむかしに
天にとゝかす
たかきうてなの
低きところは
おのづからなる
とりての上は
なびくにいたり
さけるは何の
かゝるは何の
西ふく風に
にしきの旗の

数ならぬ
思ひにて
心地せり
やざまにて
とりてをば
風ふきて
こゝかして
花ならむ
鶯ならむ
みだされて
こゝかして

その十二

天と地との 神々々の
 薔薇の花の ふく風に
 かしこにうづき こなたには
 老ろくにはへり 櫻草
 谷のほそ道 右左
 かばの木すゑは たよくと
 身をふるはして 下にあき
 岩のはざまに 根をやどし
 なほいや高く 山松の
 風のしらべも おもしろく
 天のかけはし いつの世に

めぐみは草木に
 いとゆかしく
 はしばみかをり
 すみれの花も
 にははぬどころ
 柳の糸は
 つよさえのきに
 見るもあやうき
 老木は幹も
 枝は雲井に
 たれかかけゝむ

およぶらむ
 さきにはひ
 かなたには
 やさしげに
 なかりけり
 なよくと
 どねりこは
 そが上に
 わらはにて
 うちおほひ
 その枝を

その十三

白き岩根に 夕日てり
 袂ゆららに うちあびく
 みどりあすてふ 大空の
 あはれあやしき ながめよな
 夢の中なる

露のきらめく
 尾の上のはてを
 青くはつかに
 夢の中なる

八千草の
 見あぐれば
 見ゆるのみ
 けしきよな

つゝく松原 かくふかく
 たえまゝに みどりなす
 見えつと思へば やかてまた
 思へばまたも あらはれて
 みどりにすめる 水の面に
 うつりて立てる 遠かたは
 なほ行きゆけば

たどりくゝて
 せまき入江は
 かくれたりけり
 見ゆるけしきも
 うかびて立てる
 それをながめて
 いよく廣し

ゆきゆけば
 見えにけり
 かくれつと
 おもしろや
 きしの岡
 狩人の
 かの入江

露霜しげき
見えにしみねも
ゆくへはるけく
つゝく尾上も
堀もてかこむ

その十四

は、そ原
波の上
みあぎれる
中たえて
城のどど。

森をすぐれば
うかぶかどく
汐のひく手に
おきにうかべる

いやたかく
たつどりの
へだてられ
はなれま。

わがゆくかたは
遠くかなたに
すぎゆく道も
力にたのみ
そこをばからく
かげのかげろふ

いづくぞと
さし出でし
なかりけり。
はしばみの
よぢのぼり
カトリンの

まばしあたりを
そのいはがねを
藤のかつらの
枝をたよりて
かへり見すれば
みさき入りうみ

見わたせど
のぼらずば
つよき根を
あやうくも
夕日かげ
風なぎて

紫にはほふ
よるの岩戸と
沖邊の波も
山のいはむら
波間にひきく
あやにみだるゝ
衣をきするに
中空たかく

その十五

島山は
そびえたつ
まづかなり。
かりこもの
うつりたり。
その枝は
似たりけり。
かきろひの

光りの海に
山に日かげは
南に高さ
亂れしまゝに
も、千の木々の
灰いろの峰に
北の小山は
ひたへもいとゝ

たゝよひぬ。
たなびきて
ベンベヌの
湖の
くれはどり
緑あす
みつぐりの
あらはなり。

狩りの、道に
まよひまよひて
よものながめの

たち出でし
今こゝの
をかしさは

かのかり人は
いはほの上に
心うばはれ

こゝかしこ
きたりしが
たましひも

むかしきまでよ
 實にめづらしき
 あでなる臺の
 やさしき庵の
 年ふる寺の
 かりにといそぐ
 いかにもしく
 夕べになれば
 戀人どちの
 いかによさしく
 波間がくれに
 朝のつとめ
 さえわたりたる

ながめたり。
 けしきやな。
 ありもせば。
 ありもせば。
 ありもせば。
 笛のねは
 きこゆらむ。
 あらましき
 吹きあらす
 きこゆらむ。
 沈むらむ。
 のりの聲
 かねのねの

げに美き
 こゝある危うき
 そこなるやさしき
 近きまきばの
 玄の、め深き
 湖の波まに
 わはれ色ます
 森のあらしの
 笛のしらべの
 ふけゆく夜半の
 ころどしなれば
 いかにもとく
 うさよをさます

ながめよき。
 岩かげに
 谷かげに
 その末に
 あさばらけ
 くだけつゝ
 墨染の
 音たえて
 おもしろく
 月のかけ
 法の師の
 ひゝくらむ。
 ひゝきには

あたり淋しき
 ねざめさびしく
 袖をし招く

その十六

あらしませば
 かのをトか。
 はかなくも
 外にまた
 覆の木をば
 山狩りに
 端枝さす
 後の日の

世をはなれにし
 道ふみまよふ
 かゝるところに

仙人も
 人々の
 あらまほし。

うれしきを
 あらなくに
 此夕べ。
 あらざれど
 やどられむ。
 事やある。
 あかさむも
 あるならぬ。

しかはあれども
人目をわざと
もし山だちに
そのあけきにも
まさりやすらむ
いざよびて見ん
もし山だちの

白雲の
忍びたる
あひもせば
さをしかを
そのなげき
角の音に
いでもせば

かゝるさびしき
あやしきものも
手なれの駒を
うちのがしたる
わが身の外には
はなれし友を
腰におびたり

奥あれば
すみやせむ
失ひし
なげきにも
つれもなし
呼びて見む
つるぎ大刀

その十七

獵男は笛を
二聲ふかむ
かしの老木の
あしわけ小舟

取りいでて
時しもあれ
木かげより
こさいでぬ

一聲高く
島根の岩に
はしきをとめの
立つとも見えぬ

ふきならし
すがりたる
かちどりて
さゝなみは

柳の袖を
光り雪なす
沖の岩ほに
さつ男はやをら
人ありとしも
をとめの姿を
かすかにきし
ありし岩ほを
耳かたぶくる
書を見る如く
あはれ姫神

うちぬらし
あらいはの
みどりなす
かたへなる
知らずして
見て居たり
笛のねを
みあげつゝ
そのさまは
其の國の
見るばかり

さゝやくばかり
磯邊をたゝき
湖さして
おどろの茂みに
こなたの岸に
ありしをとめは
再びきかんの
まなこをこらす
希獵の昔に
川の神ども
をとめはこなた

音たてゝ
うちかへし
漕ぎいでぬ
身をかくし
舟よする
かいおきて
心にや
そのさまは
きざみたる
うたひけん
見て居たり

その十八

希獵きりやの人の
 いかでか是これには
 いかなる人の
 するどき光ひかりの
 いさゝ小舟せぶねの
 花はなの面おもてに
 なにたどへむ
 宮みやの禮のりには
 かゝる歩あゆみの
 かゝる袂たもとは
 玉たまちる事ことも
 玄くろそれがちある
 をとめの聲こゑは
 うたひけむ
 まさるべき
 子こなるらむ
 さしそふも
 波なみ 輕かろく
 むらさきの
 たくらべむ
 露つゆほども
 かくばかり
 ふるゝども
 なかるらむ
 すみれ草くさ
 あまさがる
 川がはの姫ひめ神かみ
 あはれたへなり
 あかねさす日ひの
 いとしまはしく
 玉たま手てにかいを
 紅くわふかく
 いともかしこき
 習ならひしさまには
 やさしき歩あゆみ
 庭にわの撫なで子こ
 かゝる袂たもとを
 なれも頭かしらや
 むなかなめく
 それとても
 この少せとめ女め
 夕ゆふ日ひかけ
 おぼゆれど
 とりつかふ
 そめなすは
 九く重おもの
 あらねども
 あるべきか
 おく露つゆの
 見みる時ときは
 起たすらむ
 さまなれど

優ゆにやさしく
 かのかり人ひとも
 愛あいらしく
 息いきをとえ
 すゝの玉たまちる
 猶なほもきかむと
 ひゝきには
 思おもふらむ

その十九

そも何なに者ものぞ
 きぬの髪かみひも
 その色いろにしも
 かくもたへなる
 きぬの髪かみひも
 やさしき肩かたに
 かくもあはれに
 たえて外ほかには
 ふりわけがみの
 このをとめ
 あやの衣きぬ
 見みえにけり
 若わか 艸くさの
 稀まれならむ
 まつはるゝ
 やさしげに
 見みもえらす
 いはけなき
 ところの主ぬし
 胸むねをかざりし
 漆うるしをあざむく
 緑きぬのふさに
 きぬの上うへ衣ぎも
 事ことや一ひと入い
 胸むねをかざれる
 げにあどけなき
 心こころの花はなの
 ゆかりとは
 白しろ玉たまの
 黒くろ髪かみの
 埋うづるゝ
 かくばかり
 まれならむ
 ま 白しろ玉たま
 面おもてかけに
 うつらふは

げにカトリンの
 あら岩かけを
 すゝしき眼に
 あるは歎きに
 あるはたらちね
 事しありども
 心に祈る
 きけばせきたつ
 事はあるども
 その面影に
 心の底の
 深くこもりて
 ゆかりは清く

湖の
 うつすより
 よろこびの
 かなしみに
 親を思ふ
 あるはまた
 時もあれ
 スコットの
 よしえやし
 みえにけり
 花はそも
 見えわかず
 おぼゆれど

縁の鏡の
 なほあきらかに
 ゑみの光りの
 心の空の
 心の關の
 深くもあらず
 道にそむきし
 はげしきさかを
 罪なき心の
 なほあらはれぬ
 少女心の
 かをりは清く

心が
 見えにけり
 おぼるとも
 くもるとも
 せきあへぬ
 いとけなき
 はなしをば
 よび起す
 ふるまひは
 一本の
 ひたぶるに
 知らるれど

その二十

きけばもきけば
 少女はたへず
 いはの山彦
 いつまで草の
 岩うつ聲は
 待つ聲のみは
 そが笛のねに
 こたへかねたり
 谷の木かけを
 あなやとばかり
 いそをはなれて

笛のねの
 えもたへず
 音をひきて
 ねを長く
 きこゆれど
 なかりける
 ありしかど
 山びこも
 立ち出で
 たわやめは
 こき出でしか

たえてあらしの
 父よとよべる
 やさしき聲を
 のばして聴かん
 岸うつ波は
 さては今のは
 いふその聲は
 かの狩人は
 そはわれなりど
 あわたししけに
 今はやすしど

音のみに
 一 聲も
 いつまでも
 心にや
 ひゝけども
 マルコルム
 よわければ
 うち忍ぶ
 よぶ聲に
 かいをとり
 かぢをたえ

胸の襟をば
何にをたわやめ
このかり人の
なにをたわやめ

正しつゝ
おびゆらむ
眼に
おそるらむ

さつ男の方を
このかり人の
恐れしものども

見つめたり。
姿に
おもはれず。

その二十一

壮りをすぎぬ
やふみなれし
まかはあれども
進みすまむ
今なほ心に
爲さば遂げんの
そよどの風の

年なみは
世の中の
若き世の
勢も
わすられず。
たましひも
さそひなば

いさましげなる
あどを見せけり
もゆる血氣は
袂かるけき
事を爲さんの
はたなかくに
思ひの波の

面かげに
まかはあれ
なほ失せず
樂みも
こゝろざし
うせやらず。
忽ち

うちもよせなむ
まのぎをけづる
なほたくましき
つるぎたちをも
操もこもる
つるぎさやはさ
けぶりも見えつ
日も夕ぐれに
わが身の上を
あはれ詞は
共に人をば

狂ひあむ。
争に
をのこかな。
はかざれど
すかたあはれ。
よるひつけ
あはれますらを。
此ほどり
訴ふる
やさしきも
さしづする

はげしきすさび
いざとし云は、
衣の袖も
けだかきこゝろ
こがねのかぶと
磯邊の岩を
「かりの、道に
あやしきものに
詞は優に
其手ぶりより
そのありさまに

あるはまた
たなずるも
力なく
武夫の
さしかざし
ふみならず
さまよひて
侍らじと
やさしきも
其聲音
似たりけり。

その二十二

かのたわやめは
 おそれもさすが
 山路にまよふ
 此の島がくれ
 汝かおん袖の
 けふのあさげに
 君かきまさん
 草の枕と
 けさ山鳥を
 けさひきにけり
 「さてもうれしや
 ながもてなしは
 まちもうけたる

この人を
 晴れにけん
 人毎に
 世に遠き
 なかくに
 みちまばの
 そのことを
 まきおきぬ
 うちにけり
 君がため
 ちはやふる
 すぎにけり
 まろうどの

見つゝありしが
 「此山里の
 柴のどぼそは
 けふわが宿に
 ゆかりなしとは
 露ひぬひまを
 かねてまれは
 ちかき尾上の
 ちびきの綱を
 君がゆふげに
 げに神かけて
 道にまよひし
 もてなしをしも

うたがひも
 まづかやは
 さしもせず
 来られにし
 おもほえず
 かりあげて
 旅衣
 頂に
 湖に
 まるらせん」
 たわやめよ
 あだしわれ
 うけんとは

いかでおもはむ
 伴にもはなれ
 さまよひ來にし
 入江の磯に
 天つをとめを
 君の山邊の

その二十三

いかでわれ
 手なれにし
 あだしわれ
 たゝすみて
 見るまでは
 このけしき」

道をし失ひ
 駒にも分れ
 この湖の
 天つ御島に
 ゆめにもわれい

つれだちし
 ゆくりなく
 ふしぎなる
 ゆくりなく
 知らざりき

舟を寄せつゝ
 カトリン湖の
 われ初より
 君が來まさん
 するとき眼に

たわやめは
 磯ちかく
 あやしまず
 事はしき
 見るといふ

「そはわれもまた
 君が踏まれし
 まかはわれども
 まだ來ぬ末の
 こゝの山なる

よく知りつ
 事なきは
 われいそも
 事をしき
 翁より

はやくも妾は
道のはどりに
死するを見にき
君が緑りの
黄金ちりばむる
刃のかたち
羽をかざれる
そのたくましき
露もかはらぬ
あすいかならず
心まへを
翁の言の葉
君が吹きにし

きゝたりき。
汝が駒の
翁さはは。
狩衣も
其の色も
柄の色
そがづきむ
ありさまも
ものかたり。
来まさむに
くれぐれも
われはさは
角のねを

かばの木ずゑの
あしげの駒は
汝が面影
總もてかざる
君が手にせる
そののみならず
汝が狩り犬の
君を今日見る
高く貴き
力のかぎり
ゆめ怠るなど
深く思ひ
父の吹きしど

掩ひまげる
うち仆れ
そのすがた
其の角の
懐けんの
水鳥の
黒毛をも
いでたちに
まろうどの
もてなしの
教へにき。
とらずして
おもひてぞ

舟をばこゝに

よせたりし。

その二十四

はゝるみながら
さいどもかくも
まことにたけし
そはかならずや
業をしなさむ
一目しあはゝ
いとふ事かは
荒磯かけて
君ゆるさむか
さつをの馴れぬ

狩人
君が家は
さる人の
こゝにきて
ためならむ。
火の海も
いかでわれ。
こぎはてむ。
いかに君。
かいの手の

「そはまた怪しき
わがこんよしを
かくもたしかに
汝が家のため
君のたへなる
つるぎの山も
われまづ君が
君が手にせし
少女はるみを
をかしき手ぶり

事にこそ。
預言者の
いふといへば
このわれが
そのめつき
いかでわれ
小舟をば
其のかいを
袖にしして
見つめたり。

げにや男の子は
はたありとせば
されどさつ男は
舟は矢を射る
すぎこし舟路
いははたゝめる

いままでモ
取るとせば
わがうでの
ばかりなり。
見つめたり。
島かげの

かいもつすべや
そはいとまれに
力のかぎり
ありける犬は
いまだ遠くも
磯邊に舟を

まらざらむ。
ありたらむ。
ひくかいに
首をあげ
こがなくに
つなぎたり。

その二十五

さつ男は岸を
いづくの道も
いざなふまゝに
よそめに見えぬ
せまき園生に

見わたすに
かよひ路の
従ひて
坂路を
いでにけり。

おどろひまなく
たえて人あと
森の下かげ
のぼりしはては
四方の青柳

掩ひ茂り
みえわかず。
一すぢの
芝生なす
糸ながく

裾もゆらくに
住むその人は
あやうき時の
むぐらの門を

あびけども
たれなるか。
かくれ家に
かためたり。

人も通はぬ
それどわかねど
つくりたるらむ

はなれ家
武士の
こゝかしこ

その二十六

家居は廣し
ほとりの木をば
森の柏木
皮をはぎては
幹をつらねし
ひまもる風を
みじかき枝を

まかほあれ
いはねをば
白樫を
斧をもて
あらかべを
ふせぐのみ。
たるきとし

造れるさまは
わづかにむすぶ
こりては小枝
はつかに角を
苔また土くれ
かるき松もて
かやの枯葉や

をかしげに
黒木の家。
切り落ま
取りたらむ
木の葉もて
梁わたま
あしの葉の

はつかに屋根を
山の木立を
はひりの袖は
天つをとめの
外はするどき
凌がん草を
獵男のかたを
入らせ玉へや

つくるのみ。
其がまゝに
たわやめが
ま弓てふ
カトリンの
うゑつけぬ。
ふりむきつ
露ほども

縁にむかふ
柱となせる
てづからまじし
その名も高き
湖よりよする
少女はどぼそに
「かゝるあやしき
心おきなく

西のかた
かどの戸の
つたかづら。
つる草や。
沙風を
たゝすみて
家なれど
諸共に。

その二十七

「君かたもどに
そのよろこびは
わが世の望み

引かれつゝ
いかならむ。
わがため

こゝに來りし
おもへば君が
天つ御神に

このわれの
まるべこそ
あるならめ。」

かく狩人は
あやしき音に
まはしふるひて
面にふきちる
鞘をはなれし
大刀何故か
壁にかけたる
とりものならぬ
いくさの斧に
猪のきばなを
くひまはりひる
色まだらなる
血しほのあとを

かたりつゝ
大刀の音。
ありけるが
花もみぢ。
つるぎ大刀
落ちてあり。
飾りには
壁はなく。
かりの槍。
うちまどり。
狼の
山猫の
のこしたる

鬨を越ゆる
さすか男の子も
事しなればは
椽にいづれば
男鹿の角に
ありしひゝきは
狩のえものに
かしこには笛
弓矢山大刀
うたれし時の
頭もすこし
その毛もすこし
大旗小旗

耳もどに
はかりかね
はづかしく
思ひあたる
かゝりたる
これなりき。
戦ひの
こゝに楯
數知れず。
其のまゝに
ものすこし。
ものすこし。
いくながれ。

鹿の毛皮に
あざらしの皮
飾るもあわれ

豹の皮
かはうその
黒木の家

黒き白きを
毛皮をぬへる

うちまじへ
壁ぎぬの

その二十八

獵男のあたり
よくくつよき
世にも稀なる
かゝるつるぎを
少女は見つゝ
世にすぐれたる
世にすぐれたる
かくいふ妻が

目をくばり
うでならで
そのつるぎ
この大刀を
ほゝゑみて
兵者の
つはもの
父になむ

落ちしつるぎを
うちふりがたき
いかある人か
軍の庭に
「君が見玉ふ
朝夕身にはく
あだし人には
妻の父の

取りみれば
そのつるぎ
何人か
振るならむ
その大刀は
大刀にこそ
あらずして
骨格は

いにしはなしに
その光りをモ
まかはあれども
まもべのみなる
あはれ甲斐こそ
置くこそをしき

ありどきく
そふるらむ
まかゝあれ
家なれば
あかりけれ
かぎりなれ」

たけき男の子の
群れの柱と
女子ならで
さる武士の
さる武士の

群れに入らば
たのまれむ
おいぼれし
すめりどて
この島に

その二十九

伯母なる人は
かるさあゆみも
玉しく宮に
何處の人の
禮の限りを

さまかたち
自
見まほまや
誰としも
つくしたり

いともあでなる
たふとくみゆる
よくこそませと
名はさかざれど
獵男のやがて

をうかにて
そのさまは
立ちむかへ
問ざれど
「自らは

ヒツゼームスど
 はにふの城の
 つるぎの力に
 そのくるしさは
 自らさやはぎ
 まゝあるほどに
 むれにまじりて
 を鹿をひたすら
 男鹿もどらず
 こしかた行方も

呼ばれつゝ
 主に
 けふまで
 神ぞしる
 ぬきもちて
 はべるかし
 このわたり
 透はんとて
 あまつさへ
 己きがたき

さゝやかなれど
 代々いやましき
 わづかに家を
 大刀と劔を
 権利のために
 けふこのあさげ
 山がりすどて
 伴を思はず
 手あれの駒を
 こゝには迷ひ

スノードン
 祖先の
 保つのみ
 をりくは
 一騎うち
 友どちの
 いでけるが
 見失ひ
 失ひて
 きつるなり」

その三十

わが身の上の
 わかしたり
 さかまほしきは
 やかたのな

御身の上も
 あはれおうなは
 踏み鳴らしたる
 かくてエレンの
 やつれし色に
 つやはなけれど
 よしある人の
 かゝるおどろの
 かゝるおもかげ
 かの客人の
 やかたのおうな
 エレンはさすか
 心を軽く

きかまほし
 今こそあれ
 その名残
 そのさまは
 見ゆれども
 言の葉に
 はてなりと
 山かくれ
 かゝる振り
 モのがたる
 マーガレット
 はづかま
 かへしつゝ

なのり玉へど
 すぎし昔は
 今猶姿に
 賤はたぎぬの
 都の水に
 其面に
 誰れかは見ざる
 あやしき賤の
 かゝる心の
 其言の葉を
 耳傾けて
 どひよる袖を
 「妾二人は

どひかけぬ
 大宮を
 見えにけり
 賤衣
 そまりたる
 すがたにも
 人あらむ
 軒ちかく
 あるべきか
 はじめより
 きゝ居しか
 やさしげに
 數ならぬ

身にしはべれば
都に遠き
流れをどいめ
さまよふ男子に
目には見えざる
笛のめでたき
こゝによろこび
うたひすまゑ
かきひく琴に

その三十一

「やすめかし
見る夢の

あはれ兵者
さむるを去らで

あはれ兵者
すぎにけり

今はねむれよ
なが戦は

なにどしも
島かくれ
風に乗る
魔を行ふ
俗人の
者数多
うたふなる
その聲に
その歌に

君にいらへむ
かゝる谷間に
鬼にひとしき
あやしきものに
琴に妙なる
わが家の軒に
歌いかくこそ
誰がかきならす
いとおもしろく

われくは
世を去のび
女にて
はべるかし
者数多
住みてあり
あるなれど
琴ならむ
きこゆあり

砲丸のどぶ
すぎしとき
おだやかに
汝がために
かくてまた
どかすらむ
すぎにけり
ゆめはしも
眠りにぞ
おもはしき
すさまじき
駒の音
さてはまた

戦の庭の
あやうき空に
ねむりにつけよ
くすしきもの
いどの去らべの
うちどかすらむ
なが戦は
はやもあらじな
今こそねむれ
よるもあらトを
その聲はしも
軍のつゝみ
人馬をあつむる

事をしも
見し火をも
此島の
枕どり
いとたかく
やすみてよ
砲丸のどぶ
さむる時
くるしまむ
うちどけて
汝が耳に
笛のこゑ
聲々も

うちわすれつゝ
うちわすれつゝ
わがこの家は
床をもまかむ
眠るみたまを
あはれ兵者
戦の庭の
たえてもあらぬ
あしたもあらト
いざねむりてよ
きこえざるらむ
劔のひびき
きこえざるらん

湖上美人

かくてしも
なきあがる
水鳥の
たえてなき
矢さけびも
この島の

その三十二

唯きくものは
雲雀の笛か。
うつや鼓の
この島がくれ。
駒のなくなる
この島わたり。」

あさぼらけ
あるはまた
それからで
よせてくる
その聲も

荒野の末に
あし原ふかく
またさく音も
ものもなければ
きこえざりけり

少女はまばし
「やすまなむ
わが術の
あかつきは
高ねには

うたひやみ
あはれ狩り人。
ねむりをさそふ
めざめの笛を
鹿あさやみぬ

また音をかへて
すぎにけり
そのひまを
ふかむまで
かり人よ

うたひ出づ。
汝が狩は。
あかねさす日の
いでやいねかし。
いでやいねなむ。

一章

狩犬も
夢な見そ
いでやすまなむ

その三十三

こゝにあるなり
あたりの谷の。
あはれ狩人。」

かり人よ
夢やすし

いでやいねなむ。
あしげの駒も。

むしろの塵を
まばしかりねの
おなじむしろの
百千の花の
夢路さびしき
術も獵男の
なげさくるしみ
手なれの駒の

うちはらひ
露の床
此の枕
枕邊に
草
さわがしき
かあしみの
野にうめき

芝のかれ草
幾まろうとの
狩り野を夢に
かをるかをりは
ねむりよぶてふ
胸をまづむる
ものさまへに
のりにし舟の

うちしきて
かたしきて
あさりけむ。
通よへせも
たわやめの
よしをなみ
夢にみえ。
波にやぶれ

けはひ衰へ
忽ち翁と
ふりわけかみに
その友をちに
かなたの友は
こなたの友は
そこなる友は
友てふ友の

ほまれうせ
成りはてつ。
立ちかへり
うちあひて
そのむかし
そのむかし
そのむかし
たづねきて

身を落人ど
また忽ちに
長く久しく
心を共に
心へだてし
我にあだせし
死にきどきし
語るは夢か

夢見ては
いわけなき
へだてにし
うちあけつ。
友なるを。
友なるを。
友なるを。
まぼろしか。

その三十四

はてハエレンと
森の木かげを
少女の顔は

もろどもに
あゆみつゝ
もみぢ葉の

袖をつらねて
心のほさを
てりそひしまゝ

おひしげる
さゝやけば
いらへあし。

獵男はいどい
袖にすがりて
手にはあらずで
少女の姿は
まなこするどく
なほいかめしく
あなやどばかり
たえづもゆる
唯さへすどき
さすが獵男も
方をばきつと
數えれぬまで
心のかぎり

こひしさの
たわやめの
くろがねの
きえうせて
面黒き
ましろなる
おどろきて
松の火の
えものをば
身の毛だち
ながむれば
あつまりて
みだるゝを

あふるゝこゝろ
手は取るよど
こほれる手貫
かしらにかぶど
まこのますらを
姿はエレンに
あたりを一人
光りもすどき
なかば見せつゝ
壁にかゝりし
またさまぐの
打ちつゝまたは
月の光りに

せきあへず
おもひしが
つかみたり。
うちきたる
あらはれぬ。
似たりけり。
ながむれば
おはしまに
かくしつゝ。
山大刀の
ものおもひ
うたれつゝ
すまさんと

まづかに立ちて

見わたしぬ。

その三十五

薔薇さまとく
 かばの木すゑは
 柳の枝は
 天の戸わたる
 いざよふ影に
 まづくまづけき
 心の鬼や
 さすがはげしき
 われとこゝろに
 ダクラス家の

ささみだれ
 ちる花の
 力なく
 月影の
 玉藻ちる
 月かげは
 きえぬらん
 ますら男の
 ひどり言

あたりゆかしく
 匂ひををしど
 まづけき風に
 八重のうなばら
 げにまづかなる
 いかある神も
 心のほのほ
 心も月と
 「われいかにして
 思ひ出でゝは

うちかをり
 なきまほれ
 うちねむり
 波たえて
 夜のいろ
 あらび男も
 まづむらん
 すみにけん
 ともすれば
 さやぐらん

あはれ少女を
 唯山賤の
 ありし大刀をば
 たゞ山かづの
 あはれおのれは
 うち見る事の
 ものゝふらしき
 眠のひまも
 夜半の祈りも
 夢なみなまど
 仇も守りも
 ふたゝび草を
 鳥のやこゑに

ダクラスの
 少女ぞと
 ダクラスの
 大刀ありと
 ダクラスの
 かなはずや
 心もて
 心をは
 なしはてぬ
 夢なわれ
 天つ神
 かたしきて
 をどろけば

家の血統に
 うち見る事の
 手にしもてるに
 うち見る事の
 夢にしあらで
 かないかあれば
 夢は見なまど
 かくも亂るゝ
 またもやすせん
 夜半のいのりも
 神の心に
 われを知らぬ
 ベンベヌ山の

あらずして
 かあはずや
 あらずして
 かなはずや
 こと夢を
 さること
 もはやわれ
 事やある
 まかはあれ
 なしはてぬ
 まかしつと
 草枕
 あさばらけ

第二章

その一

軒端にさわぐ
世のうさふしも
獵男を乗せて
風のまに

鳥の聲
わすられて
いさゝ、舟
俗人の

野邊に色そふ
千代ものぶべき
入江をはしる
琴のまらべの

艸の露
ながめかな
朝風
きこゆなり。

その二 琴歌

「あまの子が
行く舟の
世の中
昨日をば

手にとるかいに
すぎゆくあとに
人の心の
はやも忘れむ。

ちる波の
うかぶなる
いとやく
ゆけやゆけ

その花よりも
その泡よりも
かはりこそすれ。
あはれ旅人

まだ世にまらぬ

ながめなり。

汝が舟手
ふたゝびは
つとめにモ
たわやめの
汝を余れ
汝が友に
すさまじき
世の中の
身をよせて

その三季歌のつとま

神やまもらん。
思ひないてそ。
位高かれ。
見る前ちかく
かたせむと思ふ。
いつはりなせそ。
此島がくれ
樂しき色に
忘れもはてよ

すさまじき
九重の
軍にも
劍あはす
汝が大刀に
汝が妻に
ふたゝびは
世の中の
此島かくれ。

此島かくれ
君のほどりの
位たかかれ。
事しもあらば
誠を忘れそ。
操な断ちそ。
思ひな出てそ。
うれしき聲に

編
の
衣

身にかはあれ
身にまどひつゝ

草
汝が國に
枕

此處の里人
露のやどりの

やどるべき
故郷を
その時は
慰むる
時をしも
はてもなく
汝が力
悲の
君のため
玄かあらば
ありぬべし。

その四

やども頼めず
思ひやつれて
おのれますらを
事をつとめぬ。
夢な忘れそ。
わたるふなち
汝が赤心の
よしありとてモ
誠を變そ。
此しまがくれ
まねくたもとも

身一を
うち玄はれ
その人の
此島に
定めなき
まがどとの
なかくに
汝が身をば
汝が友を
汝がために
なくてやまめや。」

思ひわづらひ
さまよふあらば
その悲嘆をば
汝がさすらへる
汝が世の中の
たどひありとてモ
甲斐もなくして
夢なかこちそ。
恨みなはてそ。
迎ふる舟も

音まさりゆく
舟も着きけり
在りし島根の
琴ひく人も
天を見あげし
光りをあふく
天つ光りの
實にも静かに
おきての庭に
げにも静かに
たい一條も
動きもやらぬ
たましひ何時か

朝汐に
陸ちかく
濱邊をば
糸をたえ
ひたひには
けしき見え
さしづをば
ながめたる
かしこみて
長視めたる
吹風
俗人
消えにけむ

歌もきこえず
獵男いさすが
名残をしげに
朽木に少時
とよさかのぼる
琴にもたると
待つなるさまに
そのありさまは
罪まつさまにも
頭を見れば
ふきもみださぬ
かなでし糸の
たましひいつか

成りぬれば
行きかねて
ながむれば
身を寄せて
天つ日の
手ぶりに
にたりけり
罪人が
たどへなむ
その髪
風情なり
音と共に
失にけむ

その五

苦もあはれを
ありしエレンも
そのほゝるむは
翼つらねし
岡邊に立ちて
少女の顔に
風ふかなくに
エレンの母よ
別れを惜み
またもちふる
われかく云は

添へにける
俗人の
何にのため
あひるをば
眺み居る
ちる紅葉
いかにそも
ゆるされよ
行く人の
袂にぞ
まかいはい

岩ほの上に
ほどりに坐り
朝日を洗ふ
心にくしと
犬ををかした
秋ならなくに
知りぬる人は
かれが愛子の
行きては戻り
こぼれやすらむ
たわやめどちは

たわやめの
ほゝるみぬ
水の上
たけりたち
思ひてか
何ににそも
まりぬらむ
微笑みは
戻りては
あはれいかに
エレンをば

あだなる心ど
謗らん人に
心ひかれし
その姿をば
少女はこの世に

必ず
とひて見む
その人の
見ても猶ほ
在るべきか

そしるとさば
おのが眼の
別れかねつゝ
心にあはれど
あらばさかなむ

余はしき
やさしきに
たちまよふ
思ひざる
その名をば

その六

行きもえやらで
少女はさまで
去るとしなれば
名残をしくや
眼はなたで
錦の衣に

ますらをの
心に
さすがまた
おもふらむ
みつめたり
花よそふ

荒いそなみに
どいめざりしが
これを限りど
のびあがりつゝ
緑の髪に
少女の手より

ぬらす袖
いまはとて
思へばや
そなたをば
玉をまき
桂をば

取りにし事は
別れの目にし
思ひ出でける
かのますらをの
見送りはてゝ
あななに事ぞ
げに浮草の
衣にし似たる
「あだし少女の
かばかり心を
汝がちぎりにし
あだし影をば
事しも絶えて

多かれど
まくものは
あまたたび
行くかけを
たわやめは
マルコムを
うかれ女や
少女やな
うつくしき
かたぶけし
マルコムは
姿をば
あらざるを

この少女子が
無かりけりどぞ
小山のうねを
見えずなるまで
われと心に
いかにせむどか
うつろひやすき
汝がちぎりにし
その姿にも
事しも絶えて
汝が影ならで
かく惜みつゝ
汝はいかにぞ

ものいはぬ
ますらををも
のぼりゆく
見送りて
どがめたり
おもふらむ
花ぞめの
マルコムは
ことばにも
あらざるを
外にまた
見送りし
たわやめよ

マルコムならぬ
かく惜しみつゝ
余あやまてり
われと心を
おどろかしつゝ
「あはれ汝が
たふとき名をば
いでマルコムの
はつかに泄るゝ
もみぢを散らす
げにマルコムは
花とし云はれ
はしなく散す

あだし人を
見送れる
あやまてり
なとりつゝ
「いでアラン
琴糸に
唱へつゝ
ほまれをば
ほどもあらず
おもかげは
その人の
月としも
紅葉か。

汝が人ならぬ
心のうちの
うたてなりける
かたへに眠る
悲き夢を
われ勇ましき
われ今汝を
うたはんする」と
少女はわれと
いかなる色や
男の子女の
云はるゝ色の

あだし人を
うたてやな
われ哉」と
伶人を
さませかし
音を添へむ
はげまさむ
言の葉の
紅の
誘ふらむ
其が中に
忍ばれて

その七

琴取りあげつ
うたひ出でたり
そのいさましき
またたちやみぬ
やせにし手をば
かしてけれども
糸の音色の
引くとはすれど
唯悲しげに
踏み勇みてし
唯力なく

伶人は
三度まで
その歌の
三度まで
こまぬきて
いかにせむ
身にそはず
そもいかに
さこゆなり
進軍の
音も立たず

音に名だかき
さはさりながら
たゞ悲しげに
いかにやしけん
「君のおほせの
ひかんとすれど
氣を上げまして
音も引たゝず
さしちに猛き
あどをうたへる
わが琴糸の

軍歌
さりながら
音を立てゝ
伶人は
姫御前よ
琴の糸の
いさましく
徒らに
武夫の
わが歌の
音に出でゝ

かなしき糸の つづる心か そのまがことは この琴われに ひかし仙人の まことに主の そのまがことは われよろこびて	その 八	音に出で、 そもいかに。 われにのみ さづけたる 手づからに 臨終をば わがため うけもせむ。	かなしき人の もしさる事の まがあらまほし その俗人の あはせそめにし つづるといへり まがことならむ	いまはをば あらむには われにのみ。 ここの葉に 琴なれば さもあらば さもあらば
まかはおれども 汝が母御の うちいさみつゝ	くち惜しや うせにける 心地よき	わが姫御前よ 其夜の音に 歌のえらべを	わが姫御前よ 其夜の音に 歌のえらべを	琴の音は 異あらず。 かなでんと

われは思へど いさめる聲も 思へばわびし わがいとほしき まつはり來なむ わがいとほしき 降りもかゝらむ あはれわが琴 いさましき音を かきえらべても われゆるさむや 悲しき音をば 其一聲や	はやれども たのしみの くちをしや。 主が家に 音ならで 姫御前に 音ならで 今よりは 出さむと その音は ゆるさんや。 いまこゝに 世の名残り	かゝる響の ひいきも絶えて あはれわが琴 悲しき事の 又たよりなき 幸あき雲の たえて音なき 世の俗人の よろこびの音を 夢出すなよ これを此の世の あはれひいけよ 汝が其の糸	せまりきて 出でざるを こやわが琴。 必ずや 琴ならば 更に又 琴ならば 汝が糸に 出さむと いださむを 限りてふ ひいけかし。 きりたちて
---	--	--	--

汝をすててむ

その九

汝をすてゝ

われ又共に

終りてむ。

「エレン
露な恐れそ
南の山に
スペインの河の
琴のひきてむ
歌も節をも
さは時ありて
軍の歌の
そをわざはひの
また今更に

わづらふも
俗人よ。
北の野に
こなたまで
糸かぎり
ふし出でゝ
われどわが
いたづらに
ゑるしとは
行末の

よる年波の
歌どしいへば
ウイーツ河の
げにスコットの
笛の吹きてむ
汝は知りてむ
心の糸に
弔ふ歌に
いかでか思ひ
空のなげきを

あらひなり。
音どいへば
かきたより
國かけて
ふしかぎり
知りたらむ。
むすぼれて
きこゆるも
なげくべき。
おもひ出で

思ひ出でつゝ
よしや世にしは
すみてあるなれ
生れながらの
よしや土地をも
彼處にも見よ
よしや嵐の
さはさりながら
風にもいかで
わか心はど
莖を手にし
さかえ玉ひし
花も月をも

かばかりに
知られねど
諸共に。
その御徳も
かしの木の
はげしくて
さりながら
なびくべき。
云ひかけて
抽きとりて
いにしへの
さばかりは

恐るゝよしも
うしろも安く
あはれ俗人
いと高くこそ
國をもよしや
風にまかする
枝こそ折らめ
たふとき幹は
父もまかこそ
エレンはあたり
「あはれ俗人
ありしむかしの
深くまのはぬ

あらぬなり。
こゝにこそ
わが父は
おはすなれ。
捨てぬとモ
ほせにして
まかすらめ。
あらしにも
おはすなれ。
うちながめ
父君の
春秋の
わが袂

わが心には
 やさしき花こそ
 示すものにも
 よもぎが原に
 玉しく庭に
 天の露にし
 われはなづかし
 わはれ 俗人
 まだき見し事
 かくかたりつゝ
 野咲きの葦

その十

やがてこれ
 あるならめ
 ありながら
 さく薔薇の
 うれしげに
 この 葦
 今こそは
 あらぬよし
 たわやめは
 さしかざし

野をなづかしく
 わがいさぎよき
 かゝるおぼろの
 九重ふかき
 花どおなトク
 ほゝるむ葦
 わかもとりに
 かく美しき
 うたはぬ事の
 緑りも深き
 アランをながめ

咲く色の
 心をば
 草がくれ
 大内の
 久方の
 なづかしや
 かざさなむ
 冠りを
 あるべきや
 もとりに
 ほゝるみぬ

げにものみなに
 優にやさしき
 老の思ひも
 かなしみ居りし
 たふとき言葉
 はては思ひの
 「わがいとほしき
 失はれにし
 君は深くも
 老の命の
 世に出でまして
 もとの家柄に
 舞のむしろに

うちかたむ
 言の葉に
 晴にけむ
 うき人が
 きしごと
 せきあへず
 姫御せよ
 位をモ
 おぼさねぞ
 かひあらば
 コットの
 たちかへり
 君が袖

あはれ少女の
 曇りはてたる
 獨りつくづく
 天つ少女の
 少女の方を
 涙につくす
 げにもたふとき
 失はれにし
 千代はともあれ
 わが姫御前よ
 國の中にモ
 玉しく宮の
 世にすぐれしと

笑の眉
 俗人の
 伴もあ
 下り来て
 うちまもり
 老の心
 姫御前よ
 ほまれをモ
 かくもあれ
 あはれ 姫
 名のたかき
 大内の
 人毎に

云ひもはやされ
さかまほしけれ
昔のむしろに
淋しかりける
昔かたりに

その十一

世の中
ながらへて
石ふすま
月かげを
なさんずる

もてはやされむ
カトリン海の
むべらが門の
玉のうてなの
時も見まほし

事をこそ
島かくれ
竹あみど
窓ふかく
ながらへて

「げにもたへなる
苔むす岩も
玉のうてあの
よしや玉しく
おどろが下の
よしや玉しく

夢にこそ
なかくに
上にすむ
大内にの舞
ひなの舞
大内の舞

さはさりながら
錦のまどね
きはにもまさる
こがねの床に
猶樂しみは
錦をつけし

わが身には
綾の床
心地せり
舞へばとて
多からむ
うたびどの

歌をきくとて
音にます事も
手を乞ふ人の
汝は云はんか
われに心を
いやしむ心
ほこれる心
ロモンド湖の
われより頼む
レンノックスを
思ひたゆたふ

その十二

いかでわれ
おぼえむや
おほくある
俗人よ
よせ居ると
深かれど
多かれど
岩ふすま
ことあらば
討むとて
事せむと

汝が妙なる
わらはが爲あ
その多くある
かのいかめしき
あはれ其人
あはれ其人
かれは勢
それさへ越ゆる
妾が言に
出立つことを
汝はいはむか

琴の音の
膝を折り
人中に
ロデリックも
サクソンを
アルピンの
たけくして
人なれど
引かれつゝ
一日二日
俗人よ

何思ひけん
 「さな戯れを
 黒ロ德里クと
 大内山に
 宮守あまた
 木の葉残らず
 成りはえつれど
 かたく保ちつ
 云ふも忌むべき
 うらみといふは
 かりたてらるゝ
 わがダクラスに
 わらび男ながら

俗人は
 のたまひそ。
 誰知らぬ
 武夫を
 ありしかど
 散りにけり。
 いまもなほ
 今になほ。
 事ながら
 誰かまた
 ダクラスに
 誰かまた
 ロ德里クは

ゑみし眉をば
 此あまざる
 人もあらざる
 斬りし事あり
 はげしきさまに
 掟の外
 此の山國を
 玄かのみならず
 云はで叶はぬ
 身の置き所
 よしやかゝらん
 隠家ゆるす
 父君および

うちひそめ
 ひなわたり
 その人は
 われは見き。
 おせろきて
 人としも
 わが土地ど
 かくとしも
 けふの日の
 定めかね
 むぐらとて
 人やある。
 姫君を

われさへかくて
 今は姫御の
 其志しの
 久しくなりし
 法の王に
 やがてゆるしの
 島守ならで
 さすが敬ひ
 またしかすがに
 深く思ひを
 糸ならなくも
 引きもよられも
 樂しき花も

この島に
 花の顔
 ひくひにと
 谷川
 求めにし
 届かなむ。
 島もりの
 かしづかれ
 見るべけれ。
 よせにける。
 ロ德里クは
 すべけれど
 月も又

猶世の中を
 うつし植もて
 願ふ心は
 水せきあへず
 いとこながらの
 さてしもあらば
 汝が父も
 うきの忍ぶの
 君が緑りの
 さのロ德里クの
 君が心の
 汝ぞいとほ玄
 心の中に

見つゝ來ぬ。
 ロ德里クは
 五月雨の
 羅馬なる
 婚姻にも
 山里に
 つるぎたち
 よすがこそ
 黒髪に
 あらくれも
 まにくに
 汝こそは
 絶ゆるらめ。

汝ぞいとほま
あはれかなしや
汝か手は
いとほしや。

獅子のあぎとに

落ちにけり。

その十三

「エレン
あな俗人よ
妾も知らで
母なくなりて
誠の母も
國王の怒りを
この伯母君の
かゝる恵みを
いで此の上は
あはれロデリック

ロデリックの
あるべきか。
此の島に
數ならず。
どにかくに
其の子にて
受けながら
わが血もて
わが手をば

家より受し
げにマーガレット
この年月の
なほ其の上に
禦ぎくれたる
やがてロデリック
今しも忘れて
そを償ふの
求むといへど

其の
伯母御前の
いつくしみ
スコットの
その人は
その人ぞ。
あるべきか。
外ぞなき。
汝はいへど

その十四

いかにロデリック
求めこそすれ
心に染まぬ
モロンの岩の
さもあらなくば
きゝも知らざる
其名をさへも
さまよひ人に

さばせんや。
ロデリックは。
あだ人を
岩がくれ
故郷の
外國に
聞き知らぬ
身をなさむ。

わらわが命
あはれやあはれ
つまと定めて
聖人のあどを
わがスコットの
目が此家の
八重の潮路の

わが血をば
われはもよ
住まむより
慕ひてむ。
辭をば
ダグラスの
外國に

「強き人とは
あらいはだきの
心ひろしど

その人を
瀧つ瀬の
人いへど

余もゆるさむ
荒き心を
さらぬ怒りに

まかはわれ
いかにせむ。
猛りたち

さも奇き怨に
 手にせる大刀は
 仇どし見ては
 彼の心は
 かすめ来りし
 そを惜まずと
 立ち榮えたる
 斬り殺しては
 いかに見るらむ
 大刀取りもちて
 娘にあれば
 志かはあれども
 刃の露と

狂ひたつ
 そをもてる
 情なく
 その大刀に
 寶をば
 いはいへ
 人里を
 血となし
 世の人は
 いさましく
 妾とて
 いはれなく
 うち消やし

荒き心を
 人の爲には
 斬りもつくさむ
 露も違はじ
 おのが手下に
 あはれ楽しく
 焼き拂ひては
 其の有様を
 わらはが父を
 戦にたる
 心に憎くしど
 罪なき野邊の
 無残の血しほに

いかにせむ
 誠あれ
 その大刀よ
 たがはトな
 まき散し
 家々
 灰とあし
 世の人は
 助けんと
 人の手を
 おもはむや
 民草を
 汚したる

人の其の手を
 誰れを我友
 妾は昔
 かのロデリックを
 かざしの羽根の
 常にわななき
 もの、ことほり
 面白からず
 わらはの心は
 酌もつくさで
 いふを聞ては
 わあ、く心
 さる事よそに

いかにせむ
 誰れを敵
 ふりわけの
 見る毎に
 黒き影
 わななきぬ
 志りたれば
 思ふ事
 かゝりけり
 汝までが
 苦しさを
 とめかねつ
 うちすてゝ

幼きものも
 生ながらに
 いはけなかり志
 黒きおもぎし
 物思はぬに
 女子となりし
 心に深く
 思ひて獨り
 かくある妾の
 今またつらさ
 亦はてもなき
 願ふはいはで
 汝にどはむ

おのづから
 おぼえてむ
 昔より
 黒き袖
 ものすこく
 きのふけふ
 包みつゝ
 忍ぶのみ
 心をば
 さる事を
 わが思ひ
 やみなまし
 こや俗人

その十五

汝はなにぞか

思ふらむ

よべの客人

その人を

「よべ送りにし
おはれ姫上
來りし事ぞ
知らでやおはす
君が父御の
さやを放れて
事の兆を
われより此處に
他にまた何を
最期と頼む

客人は
余は唯
歎かる
姫上よ
いにし年
落ちたるは
示しけむ
迎へては
恐れなむ
此の島も

われは何ぞか
此島わたり
悲しとばかり
よべかの人の
はかれし大刀の
あやしき敵の
わが身の仇の
父御の御爲め
昔榮えし
今より何を

思ひけむ
さる人の
思ふなり
やせる時
おのづから
忍びたる
間諜をば
家のため
アルピンの
關として

枕を高く
よし彼の人は
ねたみ心の
疑ひもせば
わがいふ事を
打消してのみ
五月の山の
舞ひたる時の
父の御言の
怨みがちなる
消るものかは
あき何事ぞ
姫よ聞きてか

ねむられむ
仇ならす
唯奇らぬ
何とせむ
姫上よ
おはすれど
火祭り
いさかひを
媒に
ロデリックの
その恨み
さわがしき
何ならむ

願ふ心の
はた間諜にも
かのロデリックの
われ斯くいば
あらずもかなど
よく／＼思ひ
汝どグリームと
和君は忘れ
怨は解けて
胸のはむらは
よく／＼思ひ
物の音色は
風のそよぎの

かひありて
あらずとも
聞きもして
姫上よ
あながちに
玉へかし
袖つらね
玉ひてか
見えつるも
いかでかは
玉ひてよ
何ならむ
そよぐとは

舟はまさしく
 ひらく風に
 輝きわたる
 舟はゆりあげ
 波立つさまの
 浮きつ沈みつ
 諸手の櫂の
 昇る煙の
 吹くや俗人の
 軍の歌の

その十七

角の音も

入江岬の

波遠み

羅德里の
 櫓あり
 槍さげて
 舟白人の
 さる波に
 面を揃へ
 音を揃へ
 勇ましや

松の大旗
 いやく近く
 劍の光り
 かざしの羽根や
 諸手の櫂の
 兜の影の
 間なく亂る
 舟のへさきに
 湖も動かひ

日にはへて
 よるまゝに
 美しくしや
 陣羽織
 漕ぐ度に
 面を白や
 水煙り
 角並めて
 軍歌

そよもきかず
 何も見えねど
 さやぐと見えず
 聞えし音は
 軍の角の

その十六

柳の糸の
 見渡す湖は
 唯琴魂に
 またもさくなり

靡くどは
 さゝなみの
 たよりきて
 物の音は

湖原遠く
 黒き星かげ
 近くまゝに
 ともをつらねて
 西の濱邊を
 プラヤンコーの

見わたせば
 四ツ二ツ
 影まさり
 四つの船
 こぎ下り
 岬をば

遠の沙路の
 浮ぶ星かげ
 帆を張りあげし
 カトリン湖の
 まどもに舵を
 はやうち越えて

末遠く
 四ツ二ツ
 軍の船
 西の濱
 よせにけり
 漕く船は

はるけき沙や
 今は一入
 角ははげしく
 げにや其の音
 軍を催す
 角はいよく
 げにや瀧つ瀬
 馳かけりつゝ
 大地もどろろ
 角は頻りに
 軍を進む
 攻もかゝらむ
 やさげびはやも

解しけむ
 すさまじく
 軍勢を
 其の響き
 時の音を
 ふき出で
 たきつごと
 つとひよる
 轟き
 ひいきては
 関の聲
 鼓の音
 うちまとり

やさしく聞し
 耳や裂けなむ
 聚る音を
 年ふりにたる
 吹きあぐるなり
 いやもせはしく
 峯の嵐の
 百兵者の
 鳴る其時の
 やがて楽しく
 はては俄に
 それにともなふ
 互にけづる

角の音も
 破れなむ
 吹あぐる
 アルピンの
 その響き
 いやも疾く
 下すごと
 勢に
 音のごと
 堂々ど
 ふきあげて
 関の聲
 劔楯

打つうたれつ
 沖つ白波
 敵の引手を
 立も直して
 繰り返すまで
 吹きもあげたる
 休れふしたる
 いよく低く

その十八

敵味方
 涌き返り
 うちくづし
 アルピンの
 軍歌
 末はまた
 味方をば
 吹き下す

透ひつ返へしつ
 うちも亂つ
 味方も残る
 凱歌三聲
 聲つぎくに
 戦の庭に
 用ふならむ

こゝかしこ
 くだかれつ
 備をば
 はた四聲
 吹きあげつ
 あへなくも
 声低く

軍の角は
 消えゆけば
 諸共
 君萬代と
 又吹き出る
 玄ばしは答ふ

山産の
 軍角
 聲あはせ

るびらを叩く
アルピンの公
唯たうくど
近づくまゝに

関の聲
ロデリック
松風
面白

かこも諸手を
はやす節より
嵐に似たる

あはすれば
外は
歌の
聲唯

その十九

舟歌

君は千代ませ
譽れ高かれ
一本松の
久しき世まで
國つ御土は
一本松の

八千代ませ
光りあれ
常盤松
榮えまし
根を堅め
ふか緑り

緑變らぬ
旗の表に
長く此土に
天津御神は
あはれわが松
樂しき色に

松の旗
どいめたる
影を深く
露をか
この一本
花も咲

枝も千尋に
公ながかれど
答へぬ谷とて
たましく蒔えし
冬どしなれば
はかなき色に
尾の上の木の葉
いやも緑を
いよく強く
いよく榮えむ
ライの湖邊の
謠ひつれなむ

ひろげなむ
囃すなる
なかるらむ
若草の
わけもなく
あられなり
散る毎に
重ねなむ
吹く毎に
常磐松
村かけて
つれてしはやさむ

アルピンの君
此山國の
あはれ此松
彌生に匂ふ
唯いたづらに
木枯寒く
わがアルピンは
野わき木枯し
いよく固く
タイスの國の
アルピンの末

ロデリック
この聲に
わが松は
花あるも
まばびてふ
ふきすすさび
いやましに
かれぐに
根を堅め
里かけて
ロデリック

わが軍歌
吹きもやぶりぬ
聲につゞきて
ルスロスデューの
昇る煙も
よしある人も
夫を討れし
今より後は
アルピン黨を
あな面白や
うたふわが聲

音も高く
わが力
おもしろや
村々も
うつくしや
心地よや
其の妻は
末ながく
思ふ毎
今よりは
きゝもせば

フリユンの谷を
わがひきあぐる
ハンノカールの
火焰の下に
ロモンド湖の
水岸に骨を
またサクソンの
わが軍をば
恐れもすらむ
アルピンの末
レベンの里も

今此處に
かちせきの
うめき聲
埋れて
里わたる
洒したり
たわやめは
歎くらむ
恨むらむ
ロデリックと
震はなん

その二十 舟歌のつとぎ

はたレンノクモ
この山國の
緑變らぬ
ほとりの島に
蕾の花を
かざしの花と
斯くも目出度
はやも芽ざして
見まほし時の
謠ひやつれん
千代もと祈る

動くらむ
響れゆる
松のため
やさしくも
花桂
なしてかな
幹のべに
ふしのびて
かひあらば
はやしつれむ
松の色かな

あなおもしろの
こげや諸人
力の限り
句ひこぼるゝ
桂どまさて
また見まほしや
玉の緑葉
榮ゆる影の
このアルピンの
アルピンの末

けふの日や
うたへや人
漕や漕げ
薔薇の木
わが君の
見てしがな
たましくに
みまほしや
この人々
ロデリック

その二十一

マーガレットは磯邊に近く
 入江の風にふり出て迎ふ
 母は母とて岩下水の
 歡ばせむと舟なる人の
 先づ云せんと「なに、此處へは
 汝も又おあトおなト流れの
 祝はぬ道の
 女子ばらいで迎ふ
 吹きなびき花の群れ
 くみて知るいはでのみ
 思ふまゝ勝いくさ
 思ひけむ急かざる
 ダグラスのますらをの
 あるべきか
 花の一むれびんの黒髪
 雪なす諸手まねく袂や
 あはれわが子の下に堰くある
 磯に上らぬ恙なかり去
 エレンの方をどくこそ來つれ
 家の血筋に勝ちてしかへる
 呼べどエレンは
 ひき連れてはらくと
 ひらくと句ふらむ
 この日頃心をば
 そのさきにことほぎを
 さしまねぎとく此處に
 ありながら軍をば
 ちかくに

無くもがなるきかとと思へど
 いなむ心を折りしも誰の
 何思ふらむかあなたの陸に
 いでや小舟をいでや俗人
 たなびく斗り斯くとも知らず
 少女のかげを島へと寄する
 いさゝ浪路を
 人の言のいな舟の
 はげまして吹くならむ
 をせりのききこゆるは
 はしらしついでや俗人
 疾く早くロデリックの
 ふき慕ひそのひまに
 漕ぎわけて
 思へば進むいなと計りも
 磯邊へ半角の遠音に
 「汝もきゝてか父の合圖の
 陸よりわたしあかねさす日の
 いさゝ小舟に頻りに歌を
 母の群れをばエレンはいつか
 かなたの陸へ
 方もなくいなませず
 下る折り手わやめは
 俗人よ角ならむ
 奉らむ日の光り
 飛び乗りて吹きあげて
 吹きはやし
 いさゝ舟上りたり

その二十二

塵の此世の 身なれども
 天つ皇土の にごらざる
 天つ使の 袖の上へ
 たえて覺えぬ さる清き
 げにその涙 その雫
 心やさしく すなほなる
 げに其涙 その雫
 限りなきまで いとほしき
 ひしど抱きて 父ダグラス
 思はず落す 一玄づく
 涙ぞ清き なみだなる

人の心の
 露のあはれぞ
 注ぐも穢れど
 やさしき涙の
 まごゝろ深き
 わが娘の袖に
 清き涙の
 わが女エレンを
 さすがに猛き
 わが娘の髪に
 げに其清き

そこにまた
 こもるなる
 あるよしの
 ありとせば
 父親が
 ふりそゝぐ
 限りあり
 かき抱き
 ますらをも
 かゝりたる
 雫かな

その二十三

エレンはいとゞ 嬉しげに
 繰りつ返しつ あまたゝび
 つくぐまもる 若武者は
 寄まほしげに 見えながら
 はづかしさにや ひかるらむ
 心の底の こむらさき

アランは獨り つくぐとど
 ロデリックばらを うち見やり
 いとゞをしげに うちまもり
 はなやぎさやぐ 一むらを
 いかなる雲や さそふらむ

かなたの島に
 折りく主の
 やがてかたの
 またもやえはし
 曇るまぶたの

父の袖
 よろこぶを
 マルコルム
 さすがまた
 うちまもる
 見えにけり

漕きよする
 此方をば
 ロデリックの
 うち見やり
 村時雨

諸手に拂ふ
これも何と
肩にうちのせ
此あはれなる
よしある事を
彼はむかしを
よにもはげしく
奪ひし敵の
駒のあとべは
その武者は
得むと願はむ
駒のあとべに
乗り込む城の

一
思ふらむ
親しげに
わが供の
覚えすや
忍ぶなり
大旗を
武將の
低きだに
位を
従へて
櫓より

それを詠めて
わが手をはたど
「いざ若武者よ
今の時雨の
さらば語らむ
わが身がありし
玄のぎ削りし
駒の前にし
甘人あまりに
かの酋長人の
官ももてる
前陣後陣
我ボスウエルの

ダグラスは
マルコム
汝の世に
いはれあり
さねかし
その昔時
戦に
ふりかざし
まもられて
必ずや
武將を
はあやかに
櫓より

かの俗人
うたひはやえし
玄かはあれども
かく武將に
光りも我が手に
あて人あまた
神の御笛の
うたひあげつゝ
花と榮えし
思ひ思へば
ほこらまほしき
心にむせぶ
くめどつきせぬ

かのアラン
時をこそ
マールコムよ
まもられつ
傾きつ
駒つらね
すみわたる
はやしつゝ
時より
けふの今
心地する
その涙
その情

俗の諸手を
彼はいまはた
君につげなむ
敵の旗なる
うまえうま
城のむかひの
城の内なる
こゝもかしこも
其のはあやぎし
けふの我が身の
この俗翁の
はたいとほしき
あはれやさしき

導き
忍ぶなれ
ダグラスは
三日月の
數知れず
御寺には
俗人は
色もかも
時より
なかく
人知れず
たわやめの
その情

あはれ嬉しき
八十武士に
世にときめきし
むかふるわが子
はるか心の
かゝる嬉しき
けふのわが身の
願ふはマルコム
げに子の玉に
塵のねうちも

その二十四

そのの涙
送られて
昔より
わが翁
ありそ海
有難き
あかくに
笑ひなせそ
競べなば
あらぬなり。

思ひ思へば
八十伶人に
なかくに此の
歌も花をも
濱の眞砂子の
人の迎ひに
ほこらまほしき
かゝりし父の
我が失へる
何に惜しからむ

いにし年
はやされて
磯の邊に
かざらねど
ま心の
あふ今日は
心地する。
ほこり顔
物みなは
をしまなむ。

よにも嬉しき

賞賛

聞くはマルコム

いふは父

親のほむるを
ばらの色香の
恥ぢて色そふ
父が連れたる
心もなげに
尾を打振りて
まもるこなたの
上にとまりて
うちも眠りて
立ちたるエレンの
何にくらべん
子はあはれてふ
一入高く

うちきゝて
露にぬれ
よろこびを
狩犬を
みつめたり。
身をもがき
鷹も又
うれしげに
静なり。
影は唯
たくらべむ。
親心
見ゆるらむ

エレンの顔は
いよ、輝く
人に見せじと
はた荒鷹の
かなたの犬は
エレンの方を
エレンの手なる
黒き翼を
これを詠めつ
天津少女の
これをながめて
エレンの影の
思へばこぼる。

くれなるの
ばかりなり。
思ひけむ
つばさをば
嬉しげに
うちまもり
角の柄の
うちたゝみ
彼を見つ
影ならで
ダグラスは
必ずや
マルコム

心の底は
あはれの色ど
まもる眼の
包むにあさる

その二十五

父より更に
忍び忍びて
胸にあふる

上もあき
こなたをば
思ひをば

このマルコムは
玄かモ力ハ
このスコットの
此ますらをに
たえて此の世に
青き頭巾の
山のさちにも

たけすぐれ
いと強く
きならしの
勝りたる
なかりけむ
その端に
年なれて

けだし瘦せてし
げに一門の
縮のあらたへ
人の衣とし
亞麻にも似たる
波ど亂れて
あはれ敏き

あなれども
若き武者
ひあ衣も
なりし事
額髪
おもしろし
その眼

雪の中なる
タイスの國や
山の下道
道てふ路は
強き弓をば
命をせとに
逃るゝ者は
ひたはしりして
心は姿の
武くやさしく
エレンに逢ひし
ならはざりける
兜の上

白鷺も
湖のはた
踏み知りぬ
ひくどきは
駈るとも
稀れならむ
上るとも
玉に似て
はた清く
時までは
その心
さしかさす

隠るゝよしは
路てふ道は
おどろの中の
此マルコムの
如何なる鹿か
このマルコムの
ロモンド山の
勞るゝ事ぞ
姿は心の
げに花と見む
露もあはれも
あはれエレンを
羽根のかさしの

無かりけり
隈もなく
細路も
手つか弓
逃るべき
追ふ袖を
高き峯
なかりける
花に似て
ますら男兒
たえて世に
見てしより
動くごと

動きそめたる
胸のよどみも
荒き業をば
この若者の
はた古の
けぶりを見つる
此の若者の
いまロデリックの
入るさの月と
東の山の
誰も云ひにき

その二十六

時までは
あらざりき
いみ嫌ひ
心をば
古事を
俗人をは
おひ出で
ほこりかも
成りはてむ
朝日とも
語りなき

岩井の清水
まかはあれども
誠の道を
よくも知りたる
さけば燃え立つ
皆もつげにき
人となりてむ
またくひまに
其時こそは
輝き出る

さばかりの
まかはあれ
うち慕ふ
友とちは
ますらをの
語りなき
その折は
必ずや
マルコムは
時ありと

やがてともく
エレンは父を
君はさばかり
のうわが父
又いかにして
見あぐる方は
さはいへわが女
戦の眞似を
われ又何に
遠く東を
わけ迷ひたる
思はぬ折りに
かしてこそも

うちつれて
見上げつゝ
山狩に
なともかく
云ひたれど
誰やらむ
山狩に
爲せしのみ
たのしまむ
あさりゆき
折りからに
あいになり
隈もなく

かへる家路の
「のうわが父
深く分け入り
おそく戻りて
あどは言葉も
「げに疑ひも
かばかり深く
此樂しみの
深くな咎めそ
フレンラの谷の
此マルコム
騎馬の武士
我が行く邊り

舟の中
いかなれば
玉ひけむ
おはすらむ
うちたえて
さこそあれ
入りたるは
なかりせば
こやむすめ
奥深く
君に斯く
獵男原
まきたれば

僅に振り上げ 語り出づ。

その二十八

「世に飾りなき
時も多くは
言葉短かに
父と申さむ
呼ぶを許させ
エレンの君は
またマルコム主
親ら治め
余は聴むと
はやもいとはや

己れ故
あらざれば
大槪を
ダグラス殿
玉ひてか
何が故
君はそも
玉はなむ
思ふなり
さかまほし。

言葉つくらふ
けふの使の
語りはべらむ
君は父とや
のう母上も
よそに面を
齡ひも延びて
その齡ひにも
味方にますや
そはともかくも

業知らず
ゆるよしを
のう父上
この身に
聞ねかし。
むけ玉ふ。
汝が國を
なりもせば
はた敵か
今此處に

孰れも聴かせ
狩りのすさびに
所の酋長の
心の儘に
宴まうけて
千代もと謡ふ
あはれや首を
はたヤローの
あはれ淋しき
玉藻波よる
血に泣く魂の
里は何所も
斯く誠なく

玉へかし。
事よさし
限りをば
逐ひ遣ひ
殊更に
聲と共
梟らしたり。
そ
エトリク
テピナット
ものすぢや。
道絶えて
道もなき

げに殘忍の
近畿の里に
鷹狩犬と
げに無残やな
國王の代をば
其酋長とモハ
メガット河の
ウイッツ河の
流るゝあたり
此處も彼方も
駒のひづめに
唯鳴く者は
スコット國の

わが國王
討ち入りて
諸共
酋長とモハ
祝はむと
その木戸に
草原に
そののあたり
こゝかしこ
かゝりたる
虫の聲
猛き王

名を山狩りに
頓て此所へも
此山國の
逃るゝ事の
いづれ命は
フヒンラの森にて
忍びの者の
今は逃るゝ
教へ玉へ」と

その二十九

事寄せて
來るときく
酋長共も
あるべきぞ
同じなり
汝が影を
たよりにて
道もなし
問ひかけぬ

同ト跡にし
かれを思へば
同ト命を
彼れも酋長あり
玄かのみならず
國王の者に
我も聞たり
よきすべあらば

落さむと
此處に又
いかでかは
我も酋長
ダグラス殿
知られしと
その事を
聴かまほし

伯母もエレンも
互に顔を

まもりしが

頓て娘は

父の顔を

伯母は我が子の
心は絶えて
色めき立ちて
心にかゝるは
其けふりにぞ
心は更に
「げに勇しき
暫時おどろに
玄かはあれども
懸ると聞ては
汝に歎きを
此ダグラスの
射る矢するぞく

かたをこそ
動かさる
見えにけり
エレンのみ
見えにける
動かねど
ロテリック殿
鳴りわたる
我が身故
かるかやの
かけざらむ
皺首に
ある事は

もの淋しげに
そのマルコム
さはさりながら
エレンの爲めに
つくづく聴て
さすが歎きも
よしや嵐は
頓て過れば
汝が家に
束のその間も
置く霜白き
國王の弓の
汝も知りてむ

見つめたれ
面さへ
マルコム
さやぐとは
ダグラスも
色に出で
はげしくも
ものもなし
災難の
留りて
この頭
兼てより
ロテリック殿

いかで君をば
わがアルピンの
わが袂より
昔は父の
そのアルピンの
ありて甲斐なし
絶えて奥なき
君が姫御を
願ふは授け
君のはどりに
集るものハ
恨む心は
われに心を

うち捨て、
松陰に
振り捨て、
馬盤旗
常盤松
今愛に
わが言を
わが妻に
玉へかし。
必すや
多からむ。
一つなる
よするらむ。

いかでかすべき
残るゆかりの
嵐に任かす
今は我家の
さる頼みなき
摧き捨て、も
願は聴ね
君が力を
此ロデリックに
友も味方も
また兼てより
西の方なる
樂のえらべも

さる業を。
唯二葉
ものならば
えるしある
ものならば
止みなまし。
マグラス殿
我が腕に
結びなば
いや多く
國王をば
兵者も
いと高く

我さへ此所に
帝の御言の
帝のまゝに
帝の怒りを
散り行く宿の
爰の雲井の
狩り立てられし
帝の軍の

その三十

在らざれば
まに／＼に
従ひて
解くよしの
この二葉
よそに見る
玄トモ
はてむ日に

のうロデリック殿
家の男の子を
真心盡さむ
無してふ事は
余どエレンは
森の穴にも
兎にも角にも
再び會ひも

君は唯
うちつとへ
程ならば
候はす。
諸共
隠れてむ。
忍び居て
仕らむ。
いなみてむ。
あかくに
玉ふらめ。

「いなむる事は
かゝるあはれの
我が此の大刀を

マグラス殿
仰せには
わか身を

弓矢に懸けて
従はでこそ
神や守らせ

いなみてむ。
あかくに
玉ふらめ。

妹脊の宴を
聴かぬ里こそ
あなやとばかり
こゝに燃さば
必ず光りを
威さん事は
さのおのゝきな
さいえはふきな
あまのかる藻の
のうダグラス殿
兵者どもが
互に道を
味方となして

知らせなば
なかるらめ。
さやぐらむ。
遠近の
うち添へて
かたからじ。
かたまたまひそ。
かたまたまひそ。
わが思ひ
和殿さへ
これもかも
守らん
玉はらば

フホーの河邊の
スターの城の
妹脊の宴の
千里八千里
ゼームス王の
のうエレン殿
願ふは母上
心は千々に
絶て盡さむ
此山國の
共に契ざりて
同じ心の
飽く事知らぬ

兵者も
松明を
諸共
夢路を
かゝる時
君はまた
余れども
よしもなや
里々々の
おのもく
一筋の
帝をば

絶て道なき
いかでか難き

谷間より
事あらむ。

ひなしく逐ひも

返へさむに

その三十一

人は多けれ
雲にそびゆる
潮うづまく
あやうき夢を
朝日のかげに
眼もくらみ
緑の淵は
打ち懸りたる
吹きしく嵐に

世の中に。
たかどのを
わだづみの
夢ながら
おどろけば
千尋なす
底知れず
関干は
ゆらくと

いかなる人か
いなかの間に
岸いと高く
心静かに
きらめき渡る
岩下陰を
水音すごく
げにさゝかにの
ゆらくとばかり

其人は。
打ち上り
端居して
見あかして
玄のゝめに
見おろせば
打ち聞え
蜘蛛の巢の
思われ

見ればあやうく
はては懐へむ
其荒淵に
恐れたりける
身を沈むるも
かゝりし人の
心にそまぬ
まかさむ袖の
老の袂の
心にあまる
雲にかゝりし
さすがに父を
なほいや深き

ものすごく
方もなく
沈めんど
さ恐れ
あるからむ
あらずやは
花あらし
いとつらく
あやふさに
二筋を
たかどのに
思ふ心
このエレ

彼方此方へ
我どわが身を
思ひて遂に
おそれのはての
人はありけり
あはれ此所にも
そまぬ嵐の
振りも拂へば
けふの細布
我身ひとつに
わづらう人にも
我身の事の
此身はよしや

どろろく胸
潔く
あへなくも
その淵に
世の中に
エレ
誘ふから
父が身の
胸せまき
定めかね
似たるらむ
思ひより
うき淵に

沈み果て、も
止めかねてぞ

父が身を
見えにける。

助けまほしく

思ふ心

その三十二

姫の唇
遂に自ら
けしきに見れば
言葉かけんと
我娘の顔の
其顔色の
わが子の心を
「あはれ嬉しや
袖にあまりて

また眼
大海に
マルコムは
思ふ時
紅の
亂れより
いどはやく
ロ德里ン殿
覺ゆなり。

わな、く色を
身を沈めむと
懐へかねけむ
彼方の父も
燃えつ、消えつ、
生死の瀬戸に
彼方の父も
和殿が心の
まかはあれども

うち見れば
思ふ心
進み出でて
いどはやく
うつりゆく
迷ふあ
さとりけむ
深き露
ロ德里ン殿

我一本の
 汝が世のもの
 よる戀人を
 君を恐るゝ
 願ふは心に
 汝が仇とし
 われさすらひて
 天皇の軍に
 駒の手綱を
 皆此手しほに
 思へばエレンモ
 よその怨を
 斯く捨てられて

この娘
 なしかねつ。
 待にあらず。
 わけあらず。
 かけられな。
 なる事を
 あればとて
 ひかふべき。
 ひく方も
 かけたれば
 數ならじ。
 かけられて
 かくも世に

えこそ與へね
 わが娘の顔の
 青くなりてし
 露さる心の
 我等が命
 夢なせられそ
 いかでか槍を
 今の國王の
 劍鞘はく
 尙いとほしき
 よしや音もなき
 はたわけもなき
 住家定めず

君が妻に。
 夕ばえは
 面かけも
 あるべきか。
 救はむと
 かへすく。
 さやはきて
 若き頃
 そのすべも
 童ども
 ぬれ衣の
 怒より
 さまよへど

罪なくて見る
 思ひて獨り
 此我罪に
 國王も何か

その三十三

月影
 忍ぶきれ。
 かゝづらひ
 つらくのみ

なほ帝こそ
 のうロデリック殿
 かゝる軍を
 君を思はむ

いとほしく
 なまなかに
 起さずば
 思ふべき。」

二度三度
 袖廣衣
 怒りのほむら
 あらに見ゆる
 げにものすさき
 行方定めぬ
 あやめも見えず

ロデリックは
 波荒く
 立さわぎ
 そ姿
 そ姿

立ちて歩める
 晴れぬ額は
 望み絶えたる
 さす燈火の
 夕夜のものをけ
 夕べの路を
 悪魔に似たり

わが座敷
 今更に
 恨みさへ
 かげくらく
 翼もて
 ぬば玉の
 そ姿

よるも甲斐なき
恨の槍は
胸もさかる、
父女の袖を
人の眼も
いつかは人に
心に懸りし
頼し綱の
廣き胸をも
さすが誇れる
袖廣衣を
なはため息は
母のまなトリ

片糸の
玄たゝかに
その恨み。
思ひ立つ。
今日ばかり
逢坂の
軒のつま
今日の日今
堰さぞかぬ。
魂魄の
あらゝげに
きこゆなり
子の恨み

いとつれなき
心に深く
恨みの大力に
常は涙を
せきわへぬまで
關路越えてと
妻と呼ばなん
絶んいまはの
まかはあれども
亦よせ返へす
折ちも振へど
人の鎮り
思へば柔和き

人の戀
貫けは
ロデリックは
嘲けりし
落る涙
朝な夕
せといはむ
苦しみに
劍大刀
勢に
拂へども
音もあらねば。
たわやめの

心はいかで
立ち別れんど
少女のはたに

兼てかけたる
今更仇と
けぶりも凄く
あなやとばかり
「やは奇怪の
退けや益なき
教へ置きたる
是れまで助け

その三十四

玉
きえてより
燃え立ちて
マルコム
推參哉
小童や
言の葉を
置かれしを

身もよもわらず
力を添へむと
深くも掛けたる
怒りのほひらは
むらく萌す
胸もと睨と
乳の香も失せぬ
よくも先の日の
斯くも仇とし
此軒陰に

わが望み
あかくに
其の怨
取り据ゑて
小倅め
火祭に
散らすよな。
ダグラスに

思ふらむ。
マルコムは

彼たわやめに
猪にむかへる
むづと組たる
此佩く大刀の
いふにや及ぶ
あはや開かむ
嵐は凄く
世に多力の
「誰れもまばし
己れが敵と
げにあさましき
かゝるいやしき
このダグラスは

謝せよかし。
犬のこど
マルコムモ
外にまた
事かはと
玄ゆらの巻
成りにけり。
力もて
やみねかし
心得む。
わが身哉
いさかひの
世の中に

彼方もいかで
取られし儘に
「われ武士の
如何なる助か
互に握る
いづれか散らむ
斯と見るより
組みたる二人を
先に劍を
氣や狂ひたる
よに一本の
人の寶と
はかなき者と

怵ゆべき。
ロデリックを
身の守り
求むべき
腰の大刀
花紅葉
ダグラスは
ひきはどき
抜む者
静まりね。
この娘
成るまでに
なりしとは

思へば恨の
止むる人の
互につかみし
半抜きたり

その三十五

かぎりやな。
言の葉に
手を解きて
腰劍

口惜き世の
さすがにものゝ
きつと彼方を
何れもひかぬ

有様と
耻かしく
にらみつめ
武者振ひ。

あはや劍は
上着の袖に
すごき夢路を
泣く音をきいて
かなたの人も
納めて見ても
堪へぬ怒りを

放れんず。
取りすがり
踏むがごと
マルコムの
半ま
やすからぬ
なぐさむる。

「あすまで此處に
彼方の人を
抜きたる大刀を
矢竹も脆く
わななきおびゆる
止るあなた
マーガレットは

ロデリックの
こなたには
たわやめの
摧くれば
をさめつゝ
あざけりて
眠れかし。

かばかり弱き
思へばものゝ
和殿歸らば
このロデリックの
また此清き
きたなき人に
斯くゼームスに
尙も國王の
今更いはでも
鐵は常に
來しはマリスか
關の札をし
心靜かに

その面
あはれなり。
ゼームスに
あるかぎり
民に生れ
おもねりて
つげよかし。
きゝもせば
汝知らむ。
研きすまし
何事ぞ。
與へねど
うち消して

ま夜の嵐に
今宵はこゝに
まかへ傳へ
此海山は
なごかは塵の
人の飾りと
このアルピンの
道の隈く
事落もなく
我は待つと
かのマルコムか
云ふをこゝたは
「さらば暇を

ふれもせば
宿かさむ。
くれよかし
余保たむ。
世の中の
なるべきか。
ありさまを
わが力
告げねかし。
つげねかし。
歸らむす。
膽太く
玉はれや。

汝があはれの
よしや山だち
何の恐るゝ
汝の敵と
よしや山路を
あかねさす日の
よしやいかなる
または勇ましき
われは恐るゝ
いでや床しき
よしや袂を
白雲かゝる
いかなる所に

この砦
侵すども
事あらむ。
ある人に
ぬばたまの
日の下に
荒者
ロデリック殿
こどもあし。
ダグラスとの
分つども
峯の上
忍ぶども

夢恐れをな
神の授くる
返すぐも
益なき心を
闇路をゆくも
ゆくより安く
うしろを窺ふ
親ら行手を
關の札をバ
げにいどほしき
これを別れど
巖たゝめる
浮世の中には

玄玉ひそ
所に
ロデリックの
添へられな。
マルコムは
覺ゆなり。
事あるも
塞ぐども
何にかせむ。
エレン
いひなま
谷の奥
我の

遇ふ事難しと
いでロデリック殿
さらばと計り

いふ所
頓てまた
云ひすて、

絶えてありとは
必ず見参
森の伏屋を

きかぬなり。
仕らむ。
立ち出でぬ。

その三十六

かくとダグラス
かのマルコムを
「けふのあさげの
何の里々々
兵者共の
けふのあさげの
合圖を聽きて
君の行きます

教へけむ
送り來て
事なりき
くれの濱
限りをば
事なりき
こゝかしこ
行手こそ

俗の翁は
氣づかはしげに
あはれ烈き
かしこの尾上
呼び集めんと
かくて侍れば
つとひよる者
心にかゝりて

磯近く
袖をひかへ
ロデリックは
こゝの谷
誓ひしは
必ずや
多からむ。
侍るなれ。

湖邊をゆくは
願ふはこゝより
自ら漕ぎて
事細かに
劍大刀をば
衣を肌
腕をさすりて

遠けれど
行きねかし。
まゐらせむ。
きこゆれど
諸共に
引しめて
たゝすみたり。

安しと思ふ
あはれ其處なる
まかまねかしと
こあたは何と
腰にまつかと
波間をくぐらむ

道あれば
磯邊まで
まめだちて
聞くならむ
結びつけ
こゝろにや

その三十七

「我を心に
さらばいなど
あはれ俗人
装ひはて、

マルコムは
汝こそは
マルコムは
かけなせそ。

「さらば恙も
げに真心の
彼の手を腕と
汝等が行方

無くてあれ。
鑑なれ。
握りつめ
なかくに

思へばいと
國王の後見
はたわが家の
土地も兵も
また友をちを
唯黒がねの
それより外に
此誠ある
いつまで草の
狩たてらるゝ
住も詫させ
玄か〜傳へ
彼ロテリックの

思はるゝ
ましまして
兵者は
頼まれず
救ふには
この一大刀
ものもなし
マルコムが
いつまでか
鹿のごと
申すべき
吳よかし
力をば

このマルコムの
わが心にも
伯父の指圖に
敵原をば
此はかきな
また真心の
玄かはあれども
一人もかくて
あはれかしこき
山のはざまに
願ふは俗人
此マルコムは
頼もやらト

土地こそは
まかせねば
まかすれば
ひしぐには
マルコムは
この一身は
俗人よ
あらむには
汝が主を
谷かげに
ロテリックに
露ばかり
借もせじ

彼方の山邊に
更に借らトど
身を隔せて
飽まで強き
静に水を
氣遣しげに
月かげ白き
影はさながら
傾て磯邊に
一聲高く
扱は恙も
家路へこそは

渡らむと
告よかし
飛び込みぬ
マルコムは
わくるさま
湖を
波間をば
うの鳥の
泳ぎつさ
さけびたり
なかりしか
歸りけれ

つたなき舟の
かく云ひ捨て
沈むと見れば
彼方の陸を
夫を長視めて
いづくまでも
腕に任せて
波をかすむに
恙なきをば
聲をきくより
うれしと計り

助を
波間へど
浮出
志ざし
俗人
見わたせば
泳ゆ
異ならず
告むとや
俗人
歡て

第三章

その一

昨日は今日の
井筒にたけを
かちく山や
旅せし折に
語りし人の
やせ衰へて
音に聞つゝ
磯の真砂を
月日は絶す
夢の如くに

昔に
かけたりし
鬼が島
出あひたる
面影は
力なく
待つ人の
引つ汐の
流れつゝ
消えぬれど

思ひ返せは
われらを膝に
又はその身が
をかしき事の
いかにうつろひ
行手も見えぬ
残るも今は
誘ひくつて
過ぎにし事は
酋長の吹きなす

筒井
取上
海山
數々
はてにけむ
三つ瀬川
僅かあり
行く如く
春の夜の
角の音に

野くれ山くれ
合圖を知らぬ
輝くばかり
兵者共の
事をば知れる

谷かくれ
隈もなく
飛びゆけば
數知れず
人あらむ

おどろの奥の
軍の檄は
命は露も
酋長のほとりに

奥までも
稻妻の
惜しまざる
つとひ來る

その二

時しも夏の
青海原は
あしたの風は
今しも森に
動くすれど
けはひに似たる

あさぼらげ
日に映り
そよくと
吹きそめぬ
まかすがに
海の面

空に湛へる
紫の色に
今しも湖に
風の心
色に出さぬ
底に映れる

カトリンの
匂ふなり
わたりそめ
誘はれて
たわやめの
山々の

荒にわれにし
 鎮めるよしの
 抜きたるまゝに
 はやる心の
 昇る朝日を
 岩の下には
 いそしむ間も
 いとあさしき
 互に顔を
 げに荒鷺の
 大空高く
 隠れひそむに

ロテリッの
 なかるらむ
 手に提げて
 一筋に
 いらみつめ
 家の子が
 心せき
 面影に
 うち守り
 風に乗り
 鳴く聲に
 似たりけり。

胸の嵐を
 夏なほ寒き
 島の磯邊に
 及をなでつ
 足踏み鳴す
 祈りの壇を
 玄ばくならむ
 兵者共は
 音をも立てぬ
 ベンベヌ山を
 林の鳥の

今更に
 大太刀を
 歩みより
 うち振りつ
 大岩の
 造らむと
 ロテリッの
 おのゝきて
 有様は
 蹴り立て
 音を絶えて

影は動くど
 岩下水の
 われてもあはむ
 水岸に匂ふ
 寢床を出て
 芝生をさして
 尾上の瀧も
 音もすみ昇る
 こゝの藪には
 世にあはれなる

その三

見えながら
 いはで唯
 行く瀬をば
 蓮の花
 めの鹿は
 急ぐなり
 見ゆるなり
 村雲雀
 山雀
 音をそへて

見れば亂れぬ
 心の底に
 下に頼むに
 玉散る露の
 我子よ來れと
 山邊の霧も
 雲井に高く
 その森には
 谷のあなたの
 あはす調も

其の影は
 碎けつゝ
 似たりけり
 めづらしや
 うち鳴て
 晴れそめて
 また低く
 友がらす
 山鳩も
 おもしろし
 景色だも

いかにやさしき

ものゝ音も

いかに静けき

景色だも

疑ふばかり
常に外道を
頼まむ人は
この仙人の
鹿を逐ひゆく
知れば其儘
淋しき谷に
この仙人に
御名を唱て

その

見えにけり
喜べる
絶えてなく
巖屋をば
狩人も
狩犬を
山道に
逢ひもせば
避るなり。

五

彌陀の教は
この仙人の
靈所を廻る
皆心して
この仙人の
控て再び
若獵人ら
神を心に

よそにして
祈をば
人さへも
さけにけり
邊りぞと
逐ひもせず
ゆくりなく
伏し拜み

怪しき話の
羊の群れを

傳ふなる
守らむと

生立ちの
いにし年

この仙人の
母ある人は

風に裂かれし
かどろを幾重
袈裟の衣に
わづかに白き
姿面影
招き迎へて
拂ひやはらん
尾上をかけて
やさしき様は
生たる人を
其ドルイドの

その

松の幹
つみかさね
黒頭巾
其の髭も
あらくれし
今茲に
その爲に
呼びしなり
露もなく
犠牲として
今茲に

四

雪に折れたる
グライアンてふ
徒跣のまゝに
編みにし髪も
此の法の師を
落もかゝらむ
八重山深き
佛に仕ふる
昔ありてふ
神にさへけて
墓より逃れ

松が枝に
仙人は
立ちてあり
もの凄く
此の里に
まがことを
ベンハロの
法の師の
ドルイドの
歡びし
來にしかと

兜かぶとに近ちかく
花はなの桂かつらに
かゝる淋さびしき
一ひと夜よ眠ねら
ず
ままた狩か人ひとも
乙おと女めの髪かみ紐ひも
そそれより後のち
若わかき少せう女めの
ままたたわやめの
其その夜よよりして
唯ただわが胸むねに
産うぶ屋やの中なかに

咲さき出いで
卷まきたるは
谷たにがく
れ
明あかしけ
り
誰たれ一ひと
人ひと
はどき
た
る
髪かみ紐ひも
も
樂たのし
み
も
衣ころも
手て
の
遂つひ
に
ま
た
忍しの
び
つ
は
て
に
け
り

紫むらさ句ごふ
酋う長さの骨ほねにや
上う衣ぎの袖そで
を
牛うし飼か人ひとも
契ちぎり
そ
め
た
る
も
の
は
あ
ら
と
ど
再ふた
び
結むす
ば
ず
遊あそ
び
も
絶た
え
て
は
な
や
ぐ
か
た
は
夫つま
も
求もと
め
ず
遂つひ
に
あ
か
さ
ず

草くさ花はなの
あ
る
な
ら
む
被かり
て
誰たれ一ひと
人ひと
り
て
験しる
し
と
て
い
ひ
ぬ
れ
ど
成な
り
に
け
り
止と
に
け
り
捨す
に
け
り
唯ただ
獨ひと
り
仙せん
人ひと
の

世よに物もの凄せきき
草くさ葉はの露つゆと
嵐あらしにうたれ
恨うらみを外よ所ところに
げに鬼おに神かみを
祭まつらぬ魂たまの
係かる所ところに
心こころの大た刀ちも
敵てきの備そなへ
を
葛つたの纏まとふも
恐おそる、事ことも
堅かためたりける
巢ねをくふ鳥とりも

谷たにがくれ
あへなくも
雨あめに濡ぬれ
見みあしつゝ
挫くてふ
さまよひて
宿やどりなば
折をれやせむ
事こともなく
あはれやな
知しらざりし
骨ほねの
下した
あはれなり

何いづ時ときの世よ何なにの
消きえけむ人の
此こゝ處ところに彼か處ところに
あやしき小屋こやに
はやりにはやる
おどあふ人も
結むすぶ夢ゆめ路ぢも
げに黒くろ金かねと
切きり崩くづしけむ
この世よの中なかの
猛たけき男おとこ兒この
そを頼たのまむと
打うち残のこりたる

戦たたかひに
まかばねの
散ちりまける
いねにけり
男おとこ兒こだに
絶たえてなき
やすからで
堅かためたる
そ
の
腕かみ
物もの事ことに
そ
の
胸むね
を
思おもひ
て
や
黒くろ金かね
の

幼なかりし
此仙人は
絶えず思ひの
人のあはれも
父を誰とも
他は嘲り
ものは思はト
森のこだまの
谷の流れの
一夜あこがれ
我身の鬼の

その六

昔よ
唯一人
かき曇り
世の事も
知らぬ火の
のしれど
そよどだに
聲ちかく
淵ちかく
さまよひて
子なりてふ

うなる童の
浅芽が原に
心くるへる
はた歡びも
煙あやしき
よその嵐と
月の淋しき
身のうきねをば
身のうき淵を
思ひ思へば
人の云ひつる

そが中に
伴もなく
童に
身に知らず
鬼の子と
きゝすてゝ
幾夜さは
恨みつゝ
歎きつゝ
今更に
言の葉も

眞なりやと
若やたなびく
父のものがけ
彌陀の光を
書のあかしを
雲はいよく
秘法魔法の
讀あかしたる
ものゝ迷ひに
尋ね尋ねて

その七

思ひて
稲妻の
見ゆるやと
拜ど
頼みて
立まよひ
書の
あかつきは
どもなはれ
唯一人

若や八重たつ
きらめく光の
心も空に
晴すよしなき
照すよしなき
闇はいよく
數も覺えず
心も亂れ
ベンハルローの
人の此世を

霧の中
其の中に
こがれゆく
袖の雲
胸のやみ
奥深く
讀くらし
氣も狂ひ
岩の屋を
捨にけり

朝夕は

よしや草葉の露のよすがも
黨の女子と祭らむ父も
此の仙人の鳴り如何なる
絶てきこえぬ
ま夜の嵐の轟きわたる
常盤の松の落ちもかゝらむ
若やさわがむ
人にや告むと

かけ逆もあるべきを
知れるのみ。白雲の中
夢の事ならむ。ハローの音につれ
鳴る神のくだけしもの
まがことの沖つ波
仙人の

二木の親の只母のみを
父を誰とも雲のみ深き
まばく聞ゆる此の世の中の
山のほき路を駒の蹄の
落ちて裂たる此アルピンの
徴候をこゝにうらのさきもり
岩屋を出で、

ありとせばアルピンの
みなし子の昨日けふ
鬼のこゑ騎馬づれの
何ならむきこゆなり。
松の幹に山里に
つぐらむ心あれと
來したるを

げにもの、けのうつゝに見ゆる
打てはくたくるながめこらせば
川の悪魔も見れば怪しき
ま夜の嵐はかしこに叫ぶ
戦の巻にかく仙人は
此奥山の結びて見れど
猶うつせみの

子なりてふ事多し。はやせ川
何あらむ立つと見ゆ。山の男
もの凄く。血にまみれ
唯一人。雲かくれ
心のあれば世の道を

人に嬉しき岸のあら岩
うづまく波を湧きたつ泡の
尾上の霧の鬼も立つかど
まよへる魂の見ればまだ見ぬ
仆れし者も現の世には
夢のあやしの流石にももの、
放るゝすべも

まぼろしの幾度かつくぐど
その中になびくかげ
見ゆるなり。こゝに泣き
後の世の見ゆるなり。
捨てられて庵りをば
忍ばれてなかりけり。

祖のまします
いつの世何時
神はやはらはめ
天地に誰か
兵者共は
かなたを急度
輝く大刀を
鎧の袖の
まじとばかりに
沖のなごろの
いかで許さん
共にひとしく
聲にや靡く

あだし野の
叶ふべき
神やりり
入るべきと
我知らず
にらみつめ
うち振りて
音高し
いふ聲の
うちよせて
誠なき
答ふれば
その姿

かなト露とし
斯誠なき
人はすてなむ
いふ仙人を
手毎にこぶし
いふにや及ぶと
勇み立ちたる
磯にくたくる
いつしか高く
岩も裂よと
さるもの共を
八重の尾上の
峯にひそめる

成らむ事
人こそは
世の外に
うちきよて
握りつめ
いふけしき
緋緘の
細波の
なりまさり
響くこゑ
許さトと
岩がねも
狼さへ

すは戦ぞと
戦はじむと

いさむらむ
舞ふあらむ

雲井に駈る

荒鷲も

その十

消ゆるや峰の
聲も静に
何唱らむ
燃るほのほの
仰ぐにあらで
ほのほのまゝに
ふりかざしたる
見つ、梓の
弓矢の神や

さ嵐に
なりゆきぬ
聲低く
折るく
御名のかげ
十字をば
聲高く
手つか
うち捨む

沈や磯の
またも仙人
唱て燃す
佛の御名は
のゝしる如き
群れ居る上に
此恐しき
ひきも難つる
哀れきたなき

波のまに
祈いづ
十字架
唱れど
御名の聲
ふりかざし
合圖をば
者あらば
犬トもの

去ばし言なき
 光りかゝやく
 「大君あらば
 祖の御庭の
 あだなる道を
 きけや諸人
 燃ゆる十字の
 又ふりかざす
 「いでや味方を
 人より人に
 ほのほの中に

その十一

仙 人 は
 まの玉は
 火の海原
 教へをば
 踏むあらば
 きゝてむと
 はしぐを
 十字架
 集めむと
 わたらんす
 もやさなむ

齒をくひえばり
 ほのほどありて
 劔の峯も
 若し他所にして
 焼きもやはむ
 いやますくに
 泡立つ血しほに
 いやふりあぐる
 この十字架
 きゝも洩しゝ
 誓ひの土地に

腕をまき
 燃るらむ
 踏むといふ
 今こゝお
 いきはがむ
 祈りつゝ
 うち消して
 其の聲音
 この割符
 耳の
 いち早く

起臥す家の
 おなじ煙に
 猶上もなく
 天つ御神に
 憎くや汚れし
 かくと聞より
 さげふや真夜の
 罵り立つる
 ほのほの中に
 やらひやりたる
 こも又焼なむ
 ウリスク山に

軒あらば
 焼きすてむ
 恨みなむ
 訴へて
 犬じもの
 女子ばら
 夜及の聲
 音凄し
 うづめなも
 者共を
 このほのほ
 ものさやぎ

見よや十字の
 焼きたる軒を
 少女おうない
 かゝる哀れの
 神の掟を
 するとき音をば
 童うなるも
 「いでやきたなき
 はたかく清き
 猶隠さんする
 げにすさまじき
 ヒラナンボーに

このほのほ
 うち越えて
 諸共に
 犬じもの
 願ひあむ
 はりあげて
 かたことに
 家は皆
 アルピンの
 小屋あらば
 いのり語
 鬼叫ぶ

集る野邊は
いでゆけマリス
鷹にかられし
漕ぎて出たる
猶見えながら
三尋ばかりと
舟を放れて
嵐の誘ふ

その十三

ランリック。
いそぎゆけ。
小鳥ごと
この磯の
はやもはや
見てあれば
ひらくと
桐一葉

時は今ぞや
言葉の下に
波間を飛ぶや
櫃の水泡の
舟は彼方の
血けふる割符の
彼方の陸を

今のまど。
舟ははや
いさゝ舟
消えがてに
陸近く
急使
飛ぶさまは

急げやマリス
さばかり早き
いそげやマリス

急ぎゆけ。
逸足に
急ぎゆけ。

鹿のなめしの
穿れし事や
かばかり早く

澤靴も
なかるらむ。
はしる事

はしりも来ざる
よそのみ見つる
はた怯れたる
あはれこゝなる
汝の心の
哀れ飛び散る
汝が寵の
あはれ十字の
かゝる穢き

その十二

足は皆
まの玉は
腹はみな
この血潮
血潮もて
この血しほ
光りをば
このの袂
者どもは

こもうち焼きて
山の鳥の
狼のあぎとに
この土をも
汝が寵を
十字のはのは
汝が血しほの
包める幸は
此の幸よりや

灰とせむ。
餌とやせむ。
裂かせあむ。
浸すごと
浸さなむ。
消すごとく
消すならむ。
多かれど
うちすてむ。

待ちもかねたる
マリスの手にし

ロデリックは
うちわたし。

十字の割符
「いでくマリス

取る間なく
急ぎ行け。

汝もこれまで
高き山邊を
山は馴れにし
獲物をあさる
岩根けばしく
落るにためらふ
胸はほのほの
手束の弓の
急げやマリヌ
鹿を逐ふには
山路を競ふに
岩根を凌ぐ
踏むべき道を

なかりけむ。
疾く下れ。
鹿のごと
狩犬ごと
あらばあれ。
事なせそ。
燃るども
一筋の
急げかし。
あらざれど
あらざれど
急ぎ使

岩はしる水の
沼べ澤べも
谷の淺瀬を
おどろの隙を
ほきは高く
汗は額に
泉の袖に
ひかば切れても
汝は駒をば
あるは袖をば
唯大君の
仆れでやまぬ

湧くがごと
そら駈けよ。
うちも越え。
わけよ汝。
あらばあれ。
みなぎるも
目あかけそ。
ひきなせそ。
蹴り立て、
うちつらね
御言もち
大丈夫の

その十四

戦の割符
草の庵の
谷の板橋
げに逞しき
なほ止まらぬ
あつまる土地を
山の嵐の
磯に釣りてし
煤に染みたる
つまさこりてし
取残したる

飛ぶまゝに
庵の毎
踏み鳴らし
兵男の子
急使
呼はりつゝ
おろすごと
あまの子も
鍛工さへ
山がつかげ
斧のかげ

すは事ありと
鏡胃の
森のおどろを
おのもくくに
軍の割符を
駈け行くかげの
唯聞ゆるは
ひき返したる
急ぎ取り佩く
樂しき歌も
羊の群れも

萱の軒
音すなり。
ふみわけて
あらはれぬ。
指示し
早ければ
其の響き。
手束の弓。
大刀の劍。
うち止みて
飼ふ人の

ダングラガンの
緑の森に
苦むす岩の
汝も休まむ
あはれ軍の
彼方の郷へ
鷹や小鳥を
なにし悲しき
げにや用ふ
誰歎くらむ
今朝白露と
狩の樂も
劍取る手も

家々も
木影れて
立つとどく
其處わたり
その割符
傳へなむ
逐ふけしき
ものねの
歌の聲
こゝの
なり果て
絶えにけり
朽ちにけり

今は間近く
半かくろひ
郷の家々
汝が働きも
其處なる將の
マリスはいよく
ダングラガンに
さそふ嵐に
泣くや女子の
げにやダンガン
あはれすぐれし
雙びなかりし
戦ある度

成りにけり
半見え
見ゆるなり
終るらむ
うち取りて
蹴り立て
近寄れば
響くらむ
音も淋し
こゝの將
ますら男の
兵者の
狩の都度

見えねばさよふ
取る人見えぬ
獵男も駒を
我遅れじと
上を下へと
常は磯邊の
皆水底に
雲井に高く
音に立つばかり
あはれその湖

その十五
いそぎ行け

こゝかしこ
鋤のかげ
控へつゝ
うちつとふ
うち返し
波絶えて
影どめて
舞ふ雲雀
きこえてし
その泡の

湖邊の里も
誰いそしみし
逐ひ詰めたりし
すは事ありと
もの静なる
げにやめでたき
岸の岩かね
心静に
やさしき音へ
静けかりける
波も今日こそ

畑ならむ
鹿をすて
大刀劍
山里も
こゝの湖
森のかげ
うち眠り
まかすがに
湖の
さやくなれ
うち過ぎつ

山狩に
軍には
いかならむ
行く水の
いつのまに
なるぞ悲しき。

すぐれたる脚
強りし腕
夢や見るらむ
水泡の如く
君歸るらむ。

なげきにも
けふこそは
道芝の
消えにける
待つ甲斐も

ひるまぬ心
何處の空に
露散る如く
君こそあはれ
無き世の人と

その十七

馴にし主の
犬も心に
あはれや狩犬
嬉れしかりける
きゝて覺りし

返り來ぬ
惜むらむ
スツーマー
その聲は
あはれ犬。

ものゝあはれは
名残惜げに
日頃なれつる
さゝどばかりの
馴れぬ足音

もの知らぬ
詠めたる
その人の
聲音をも
きかんとや

首ふりあげて
呼べど返へせど
來つるにあらで
天を駆けりつ
呼び立つれ共
見かへる人も
亡骸ちかく
ふりかざしつゝ
割符をはやも

耳立てぬ
返らざる
なかくに
地を飛びつ
内も外も
あらざれば
馳せよりて
聲高く
まわされよ。

誰か來にけむ
人の死骸をば
軍をうながし
今こそ來つれ
歎きの雲の
マリスはやがて
血にまみれたる
「あつまる土地は
いでく早く

何來つる。
歎かんと
あつめむと
急曇り使。
かき曇り
なき人の
割符をば
ランリック。
わか友よ。」

その十八

さすがに父の
承はりぬと

子なりけり。
踊りいで

かくと見るより
戦の割符を

オীগスは
取る間も

沼べ澤べの
後も詠めず
聞ゆる間は
さすがに人の
マリスの袖に
「のうこゝの人
駒にも鞭は
若木の枝の
頼み少なく
神や守らせ
赤心盡さし
懸らむ時は
幼けなき者

嫌ひなく
驅立ぬ
たらちねの
歎きをば
かゝる雨
今のはや
あてにけり
唯一つ
見ゆれども
玉ふらむ
いましたち
返すく
はた女子

十字の架
驅る我子の
母も涙を
汲む袖よりや
母はつくく
會長の御言を
檜の老木の
嵐を何に
會長に赤心
のう汝たち
我みなし子の
願ふは助け
かひなきもの

ふりかざし
ものゝ音
かさゆれを
まぐるらむ
うちまもり
傳へんと
朽ち果てゝ
凌がなむ
盡す子を
父の世は
浮雲の
玉ひてよ
心の中

運しと腰に
佩のすれども
此方をまもる
はりし矢竹の
母の袂に
母も涙に
さはさりながら
名をば汚しな
云ふにや及ぶ
父の棺を
袖にも涙は
又勇み立つ
綱を放れて

ひき結ぶ
勇めども
たらちねの
一條も
すかりたる
むせ返り
行や汝
し玉ひそ
事かはと
見かへれば
堰あへず
武者振ひ
若駒の

父の佩たる
見れば涙を
母の心に
ちいに碎けて
さすが名残の
「けふとはつらき
夢ダンカンの
父に劣ると
差いらへても
ますら男の子の
思ひかへせば
二度三度
荒きひづめに

剣大
たへつゝ
あづさ弓
亂るらむ
惜しからむ
汝が別れ
子ありてふ
そしられな
オーガスは
黒がねの
女々しやと
踊り上り
任してぞ

臉まへにたぎつ
 レニの小川せがはは
 なほオーガスは
 底そこひも知らぬ
 露つゆも心こころに
 右みぎ手てには高たかく
 流ながれに足あしを
 二ふた度たびばかり
 川かはは香かほまんど
 猶なほも十字じゅうじを
 あなたの岸きしへ

その二十

そ の 涙なみだ
 みなぎりて
 えばしだに
 波なみの淵ふち
 願ねがひみす
 十じゅう字じ架かた
 取とられじと
 躓つまずけば
 あせるらむ
 耽たふと取り
 たどりつき

干ほすや尾上おへの
 渡わたせる橋はしも
 水みづ岸ぎしに踏ふみも
 水みづ泡わ逆さか巻まく
 うづ巻ま淵ふちへ
 さしかざしたる
 斧きりをつきたる
 水みづ泡わは高たかく
 今いまは限かぎりと
 浮うきつ沈しづみ
 はや走はしり行ゆく

山やまおろし
 近ちかからず
 どいまらず
 高たか瀬せをば
 踊おどり入いり
 左ひだり手てには
 歩あ行ゆ渡わたり
 みなぎりて
 うち見みれば
 はや瀬せをば
 寺てらの道みち

ひなしき人の
 かくと聞きくより
 手てに取とり持もちて
 弔とらふ庭にはに
 棺ひつぎも動うごかむ
 人ひとの心こころも
 歎なげきの雲くもの

その十九

歎なげきをば
 家いへの子こ等ら
 構かまふれは
 鳴なりわたり
 その響ひびき
 えばらくは
 曇くもり來きて

歎なげきあかせ
 我われ遅たれトと
 弓ゆづるの響ひびき
 空そらしき人の
 深ふかき歎なげきに
 晴はるゝとすれど
 連つらねし袖そでに

給たまはれや
 劍つるぎ大た刀ち
 ときの聲こゑ
 亡なき骸からも
 沈しづみたる
 聽きてまた
 雨あめえげし

かなたにも
 行ゆく影かげは
 飛とぶ割わり符ふ
 また知し知らぬ

見みるや血ち煙ける
 唯ただ稻いね妻つまの
 休やすむ心こころも
 年とし猶なほ若わかき

十じゅう字じ架かた
 光ひかるごと
 絶たえてなく
 オーガスの

世はいろくの
世にも樂しき
結ぶノルマン
ひなびたれども
袖を連ぬる
里の若者
妻はいかなる
ふり分け髪を
謠ひすまし、
朝の露に
天つ少女の
玉手に取れる
え難にすといふ

此あした
一 群は
マリーイの
まかすがに
花妻の
はやし連れ
心地する
ふり立て、
伶人の
濡れたらむ
羽衣の
綾のひれ
桂をば

グライト寺に
新妹春を
世にもめでたき
つま耻しき
花耻しき
罵りさやく
よしは別ねど
樂しき音にぞ
あとより續く
花の薫りの
袖の振舞
げに集ひたる
我はえにきと

集りし
今此處に
群れあるぞ
新夫に
影あはれ
振舞に
うある子も
合すなる
花妻は
ゆかしげに
やさしげに
皆人は
新夫は

まもりくく
わが女の耳に
さやく影も

ほこりがに
さしよりて
あはれやな

その二十一

如何なる人か
十字を高く
危急を報ぐる
げに哀れやな
涙は未だ
さはにまたゝる
塵にまみれて
聚る土地は

會ひにたる
うち振りて
報知どは
オীগスは
干しあへず
袖の露
あへぎく
ランリツク

御寺の門に
今こそ着さね
はやき言葉に
父に遅れし
今渡りたる
また蹴り立つる
軍の割符を
はや傳へてむ

會ひにたる
急使
見ゆるなり
悲しみの
澤水の
路のべの
うちふりて
此の十字

喜び迷ふ
嬉しき事を

母親は
忍び音に

名残惜しげに
うち詠むれば
あかね名残の
夫は再び
小川を上へ
レニの流の
まかはあれども
心はいかに
ちいに吹しき
置きもあへざる
え絶ぬ思ひに
名をも譽も
酋長のみ爲や

花妻の
妻もまた
忍びあき
見もやらず
馳せ上り
澤邊まで
剣大刀
動くらむ
亂るらむ
思ひ草
思ひ亂れ
立てまほし
友のため

妻の衣手
置く間もあらぬ
袖の涙や
心づよくも
タイスの川へ
ふり向きもせぬ
さすがに猛き
望の庭の
朝の露の
思へば名残や
亂るとすれど
得まほしやと
赤き心も

つくくど
露の別れ
告るらむ
立ち別れ
落ちかゝる
鐵石心
ますら男の
朝あらし
いたづらに
惜しむらむ
まかすがに
思ひ出で
盡さむと

いでノルマン殿
妹脊といふも
袖振りかへて
嵐に折るゝ
さばかり望を
暮もあへぬに
夫もいとほま
悲しき事の
酋長のみためや
何にためるふ

その二十二

さはさりながら

さすがあはれ

上着どく手も

力なく

遅れなせそ
束の隙
無惨やな
心地せむ
かけたりし
はやもはや
妻もあはれ
はてにこそ
友のため
事をせむ

無惨ある哉
猶ひき足らぬ
軍の割符を
げに面白く
今日此年の
わきも捨てゝ
げに禍の
さはさりながら
こゝに危急の
はやも行かなむ

花あらし
新妻の
取る夫は
あけわたる
けふの日の
立ち出づる
限りやな
アルピンの
急使
いそかなむ

聴^やよ
 てし
 まや
 た今^{いま}

わが
 胸^{むね}
 は

なづ
 かし
 き

ノル
 マン
 は

今^{いま}
 こ
 そ
 は

あな
 が
 ち
 に

汝^き
 が
 悲^{あは}
 嘆^{なげ}

い
 と
 ほ
 し
 き

去^き
 が
 う
 た
 ふ

げには
 か
 も
 な
 や

夕^{ゆふ}
 べ
 の
 歌^{うた}も

汝^き
 が
 黒^{くろ}
 髪^{かみ}

今^{いま}
 は
 如^い
 何^か
 に
 と

思^{おも}
 ひ
 た
 え
 な
 む

え
 も
 思^{おも}
 は
 ざ
 れ

心^{こころ}
 の
 髪^{かみ}
 を

此^{この}
 アル
 ビン
 の

張^は
 し
 弓^{ゆみ}
 な
 れ

思^{おも}
 ひ
 か
 れ
 て
 も

心^{こころ}
 の
 露^{つゆ}
 に

い
 と
 ほ
 し
 き

い
 つ
 の
 日^ひ
 か

い
 と
 ほ
 し
 き

加^か
 き
 亂^{みだ}
 れ

余^{われ}
 は
 も
 よ

汝^き
 が
 誓^{ちか}
 ひ

あ
 な
 が
 ち
 に

ひ
 く
 も
 の
 は

黨^{たう}
 の
 た
 め

わ
 が
 足^{あし}
 は

よ
 そ
 な
 お
 も
 ひ
 そ

飽^あ
 く
 時^{とき}
 の

岩^{いは}
 は
 ま
 る

我^{わが}
 妻^{つま}
 マ
 イ
 リ

わ
 が
 身^み
 を
 覺^さ
 す

ひ
 き
 も
 結^{むす}
 ば
 び

え
 も
 思^{おも}
 は
 じ
 な

汝^き
 が
 契^{きぎ}
 り
 を
 ば

思^{おも}
 ひ
 た
 え
 な
 む

え
 こ
 そ
 も
 た
 ざ
 れ

敵^{てき}
 を
 討^う
 つ
 時^{とき}

放^{はな}
 ち
 し
 矢^や
 な
 れ

瀧^{たき}
 つ
 岩^{いは}
 井^ゐ
 の

わ
 り
 ど
 こ
 を
 知^し
 れ

思^{おも}
 ふ
 心^{こころ}
 は

わ
 は
 れ
 花^{はな}
 や
 ぐ

見^み
 ま
 く
 ほ
 し
 と

堤^{つみ}
 も
 澤^{さわ}
 も

固^{かた}
 く
 動^{うご}
 か
 ぬ

さ
 す
 が
 ひ
 か
 る

こ
 の
 夕^{ゆふ}
 べ

い
 と
 ほ
 し
 き

こ
 の
 衣^{きぬ}
 は

夢^{ゆめ}
 の
 心^{こころ}

こ
 の
 衣^{きぬ}
 は

その二十三 謡歌

梓^{あや}
 弓^{ゆみ}

名^な
 と
 共^{とも}
 に

思^{おも}
 ふ
 心^{こころ}

ま
 た
 く
 ま

鐵^{てつ}
 石^{いし}
 の

名^な
 残^{ざん}
 こ
 そ

床^{とこ}
 は
 葉^は
 草^{くさ}
 ぞ

君^{きみ}
 を
 離^{はな}
 れ
 て

静^{しず}
 む
 る
 者^{もの}
 は

歩^{あゆ}
 む
 音^ね
 の
 み

血^ち
 し
 ほ
 に
 し
 み
 て

ひ
 く
 に
 撓^{たぶ}
 め
 の

歸^{かへ}
 り
 て
 又^{また}
 も

か
 ら
 る
 心^{こころ}
 に

げ
 に
 稻^{いね}
 妻^{つま}
 の

心^{こころ}
 の
 弓^{ゆみ}
 は

絶^た
 え
 づ
 歌^{うた}
 に

木^き
 の
 根^ね
 こ
 そ

獨^{ひとり}
 寝^ね
 の

木^き
 戸^と
 守^{まも}
 る

あ
 す
 の
 夜^よ
 は

こ
 の
 袖^{そで}
 や

わ
 る
 べ
 き
 か

花^{はな}
 妻^{つま}
 を

勵^{はげ}
 ま
 さ
 れ

光^{ひか}
 り
 か
 な

撓^{たぶ}
 ま
 ね
 ぞ

き
 こ
 ゆ
 ち
 れ

枕^{まくら}
 な
 る
 ら
 め

淋^{さび}
 し
 き
 夜^よ
 半^な
 の

兵^{つは}
 者^{もの}
 ぞ
 も
 の

猶^{なほ}
 い
 か
 ち
 ら
 む

床^{とこ}
 ぞ
 あ
 る
 ら
 む

それにも早やさは
 ポイルの湖や
 軍の音をば
 眞こも刈るてふ
 頻りにさやぐ
 月の入るさも
 隈なく分くる
 名乗る證しを
 玄ほれし腕に
 威しかねつる
 いづれの村も
 重なる山の
 げにスコットの

勝るらむ
 トイン湖
 ゆるがして
 バルバイの
 禽の聲
 草といふ
 十字架
 持つものは
 取らるる
 童す
 村毎に
 山毎に
 山あひの

あまの釣舟
 浦の宮やの
 わなすさまとや
 岩垣沼を
 懸て南に
 廣きガルトの
 此アルピンの
 霜になやめる
 弓づるは未だ
 力なき手に
 續く谷間の
 互に伍を
 岩はしる水の

静かなる
 どまづたひ
 十字架
 渉るらむ
 うち向ひ
 草村を
 黨なりと
 翁すら
 小鳥をも
 磨ぐ
 谷毎に
 かりあつめ
 流れては

武士の
 君が思ふ
 のらマリイ
 よしやまた
 如何ばかり

その二十四

まよの嵐に
 いよく燃えも
 聞き海邊も
 げにバルクイの
 疾く凄じく
 燃ゆる野火
 ひろがりて
 輝き
 夕嵐
 あるときけど

弓矢拙く
 さちなき夫の
 汝にしあらで
 敵を破りて
 夕べ嬉しく

見まほしや月

よしえやし
 ノルマンの
 誰をまた
 めでたくも
 軒のつま

野邊に消えなば
 臨終の心は
 何思ふべき
 命しあらば
 月や見ゆらむ

山のくれく
 峯の岩根も
 燃え行く野火は
 村のおどろの
 今此の戦の

谷のくま
 焼けゆけば
 はやかれど
 野火こそは
 此割符

斥候をはせて
 事なきよしを
 猶さやぎたる
 一人も見えず
 いまだ靡かず
 瀬踏のうさの
 鳴く水禽の
 あなロデリクは
 馳せも向はで
 殊更分けて
 げにペンベヌの
 残る清水の
 そは此あさげ

うかへば
 告ぐるなり
 氣振りなく
 騎馬の影
 旗さしもの
 未だ見えす
 音もすみて
 何が故
 今こゝに
 あさるらむ
 山の奥
 一ひつ
 ダク
 ラス
 は

皆かへり来て
 またグリーンも
 げにレドノク
 はたカドスの
 ダクレイ河の
 コンの湖原
 こゝも静かに
 彼方に集ふ
 何に心を
 何にかゝれる
 奥がも知らぬ
 心にまみて
 よべの言葉を

いまだなほ
 ブルースも
 城の中
 櫓にも
 水守に
 波はれて
 其處もまた
 兵者
 つくし
 心ぞや
 巖むらに
 かゝるらむ
 あだにせず

ひとつ淵瀬に
 音はげしく
 いづれも急ぐ
 此の世の光り
 大刀は手馴し
 一筋ならで
 酋長に誓ひし
 心を寄する
 掟と頼む
 此あさまだき
 ペンベヌ山を

落るごと
 いや凄く
 ランリツ
 見てしより
 兵をの子
 外に又
 言ならで
 方もなく
 兵男
 子
 その二十五
 ロデリクは
 うち探り

いやますますに
 潮は強く
 霞と靡く
 露の命の
 げにアルピンの
 互に結ぶ
 玉の緒糸の
 唯ロデリク
 タイスの國の
 自ら草を

集りて
 いや強く
 兵をのど
 起臥に
 黨どいふ
 糸もなく
 絶えて世に
 教へをば
 ふみわけて
 境を

「斯る所ぞ
 少女はひとり
 父も哀れや
 玄ばしなり共
 係る岩屋に
 かゝる岩屋に
 もの凄き音に
 水岸の岩に
 唯湖の
 岩はしる水の
 よみ路も斯くと
 晝猶くらく
 櫓のむら立

松柳
 ぬば玉の
 思ふなる
 音ならで
 風立ちて
 絶間なく
 聞ゆのみ
 生むならむ
 父と女が
 たわやめも
 たらちねの
 なかくに

まづ枝はづ枝の
 たましく光りの
 げにや静けさ
 又聞ものも
 沖のなごろの
 波の戦ふ
 げにや狼の
 はた山猫も
 げにもあやまき
 身の隠れ家と
 哀れものゝ
 父の心を
 ものゝけありと

おひ茂り
 泄るゝのみ
 岩かくれ
 なき岩屋
 さやく時
 もの音の
 毛のあら者
 其兒をば
 此岩屋
 頼み住む
 限りやな
 慰さめて
 慎しみて

ありし島邊を
 ものゝけ谷と
 げにやむかしも
 父女此の世の
 掟のよそに
 踏みしためしの
 山のはざまに
 げに武夫の
 昔大地の
 崩れ落ちけむ
 落ち重なりて

その二十六

うちすてゝ
 きく岩屋
 今もまた
 うき住居
 捨られし
 絶えてなき
 ひらきたる
 胸板に
 うち震ひ
 岩むらば
 自ら

此世ながらの
 むかしは骸骨の
 物すさまじき
 かりの住居と
 何時の世如何なる
 げにあさましの
 岩屋の門は
 受けたる大刀の
 裂けにし時に
 此岩の戸に
 造りし岩の

世の外
 ほらといひ
 岩むろを
 定めけり
 人とても
 此の住居
 さも似たり
 大刀傷に
 山の端の
 落ちかゝり
 此のとぼそ

浮世の人の
かゝる所ぞ
山の御神も
斯る所ぞ
近寄る事は
たえて又
久方の
かゆきより
なかくに
なかるらむ
踏寄る者も
天つ少女も
神業行ひ
怪しきものも
心安しと
あかるらむ
いゆきより
玉はれば
憚りて
語るなり。

その二十七

日も暮近く
右に左に
過ぎ行く影は
ベルナンボの
行く手は何處の
渡りくく
ロ德里ッは
引連れて
いと低く
岩のかけち
方ならむ
アクレイの
すぐりにすぐりし
ベンベヌ山の
カトリン湖に
ものけ谷を
是より渡らむ
路の隈く
兵者を
頂を
映るなり
越え行けば
カトリン湖
うちさぐり

味方の備を
はやもカトリン
心きゝたる
如何にしつらむ
物のをしげに
君のあとべに
藪の茂みを
君を遅しと
入日のかげに
また勇ましき
すぐりにすぐりし
つくらむと
渡らむす
供人は
ロ德里ッは
たどりゆく
つづくのみ
押し破り
待ちかくる
映るさま
なかめかな
ものなるは
居ならべば
波に靡き
馳てむかはむ
岸の小舟を
一足早く
急ぎもやらで
童子一人
残りの者は
はや磯の邊に
今や波まに
げにもめでたく
力のみかは
けしきに見えぬ
兜のひれは
楯は夕日に
ランリック
下さむと
駆け行きぬ
唯一人
剣どり
路もなき
かしてみて
沈みゆく
美しく
姿ま
此の兵者
風に舞ひ
かゝやきぬ

その二十八

如何にまつらむ
今朝隠れにし
たどるをたどる
げに潔よく
軍のたけび
返すくも
又思はトど
何とまつらむ
水の流れを
燃るほのほを
一まは堅き

ロ德里ッは
ダグラスの
様哀はれ
思ひ立ち
矢さけびの
われはもよ
思しは
此姿
堰くどても
消す迎も
心もて

今も歩行は
岩屋の道の
げにも哀れや
心に懸る
響の中に
エレン父女の
長くも過ぬ
あはれ甲斐なき
あはれおどろの
いかで久しく
堰くにあらでは

いと重く
路近く
ロ德里ッは
思ひをば
きやささむ
事をしも
今朝あるを
砂をもて
柴をもて
堪へなむ
いかでよく

思ひの水を
名残の袖を
心の驕り
猶止めがたき
げに亡魂の
いゆきかくゆき
もしや少女の
梢を鳴す
まかはあれども
高くやさしく
琴のまらべに
それやエレンの

堰き止めむ
ふりはへて
強よければ
ぼんのうの
止まりて
迷ふがごと
聲するど
風の音を
聴やいま
聞ゆるは
合またる
天つ少女

哀れなる哉
一目を見まく
さすがに行きも
きづなの綱は
隠し玉の
行つ戻りつ
耳傾くる
つらき限りど
尾上の嵐の
それやアランの
柔しきこゑは
世にもめでたき

ロ德里ッは
思へども
とむれど
たちかぬる
邊りをば
そのあたり
心のうち
おもふらむ
さそふ度
つくし琴
何あらむ
うたの聲

「南無マリイ」
 わが頼む
 いつ何處
 汝ゆかば
 國を逐はれ
 汝が袂
 久かたの
 願ふ事の
 天が下の
 南無マリイ
 いや清く

その二十九願歌
 天の姫神
 少女が願ふ
 汝には聞えむ
 ゆく瀬や出でむ
 君に捨られ
 汝が蔭にこそ
 南無天の姫
 あはれさへてよ
 少女の心
 天の姫神
 いやもかしこき

やさ少女
 ねきごとを
 思ふせの
 よしやこの
 うき淵に
 この父女
 さにづらふ
 久かたの
 哀れども
 南無マリイ
 天の姫神

少女にませば
 聴ても玉へ
 絶てし淵も
 父母の者は
 沈みはてしが
 護らせ玉へ
 少女のわれが
 南無天の母
 聞ても玉へ
 天の姫神
 のう天の姫

茲にいま
 寒くとも
 なかくに
 汝が袖の
 こゝに吹く
 玄かあれば
 さにづらふ
 久かたの
 哀れども
 南無マリイ
 天の津姫
 汚れたる
 行く方も

布かで叶はぬ
 よしつらくとも
 錦の褥
 露だにあらば
 風の薫も
 のう天の少女
 少女のわれが
 南無天の母
 さへても玉へ
 天の姫神
 のう天の姫
 悪魔ぞ多き
 無き此父女

足曳の
 汝が袖の
 綾の床
 ぬば玉の
 なかくに
 久かたの
 願ふ事の
 天か下の
 南無マリイ
 いや清く
 世の中は
 かゝる世の
 今よりは

岩根の床
 蔭だにあらば
 玄く心地せむ
 闇き岩屋の
 床しかるらむ
 南無天の姫
 あはれさへてよ
 少女の心
 天の姫神
 いやちごにます
 悪魔ぞ繁き
 悪魔に逐はれ
 汝がみかけを

日も入る方を
 上着の袖を
 彼のたわやめの
 さくは今日こそ
 今を限りど
 僅に心を
 言葉もなく
 湖原さして
 東をさして
 兼て契りし
 麓の谷に
 軍だちして

うち見るに
 かき合え
 其の聲音
 限りなれ
 三度まで
 勵ましけむ
 うつる舟
 漕き出ぬ
 急ぎけり
 ランリックの
 既にはや
 待受けたり

心づきてか
 「あをしかりし
 彼の天つ姫の
 今日を限りど
 繰返したる
 足を早やめて
 乗るや遅しど
 應て着きたる
 日も暮れ果てむ
 峯のあたりに
 アルピン黨れの

ロ德里クは
 名残かな
 其の聲ね
 思はる
 ひとり言
 下り立ちつ
 舟人は
 かなたの磯
 時ばかり
 着き見れば
 兵者は

只 管
 今より
 何事も
 天の
 父の
 南無マリイ

その三十

琴の調べの
 猶ロ德里クは
 もぬけの殻の
 あはも聴むと

消えゆけば
 えも去らず
 立つがごと
 思ふあり

うたふ聲音も
 つるぎを杖に
 覺束なくも
 ありし童の

たえにけり
 空蟬の
 たすみて
 幾度か

頼みし寄りて
 汝が御守護
 思はで過ぎむ
 少女のわれが
 聞ても玉へ
 天つ姫神

あはれきよてよ。

うき草の
 わけ暮に
 天つ少女
 願ぎ事を
 子の頼む

憂を逃れむ
 ありと頼みて
 少女にませば
 あはれきよてよ
 わが願き事を

動かぬ山も
おちむく返す
聲消へ行けば

震ふらむ
音を三度
つねのこど

三度あぐれば
ボハストル野の
夜はまづけく

山も湖も
末遠く
成りにけり

その三十一

あるは座りつ
げにさまぐの
上着をひしど
おどろを布きて
ひらく茂る
草葉の色に
鎗の鋒尖の
飛ぶや螢と
人やあらむと
酋長の胃に
あはれ嬉しや

あるは立ちつ
けしきかな
引き寄せて
臥したれば
夏木立
隠れつ
木かくれに
見えまかふ
思ふのみ
さしかさす
我が酋長と

あるは静かに
まかはあれども
まぐや木の根の
青き上衣の
夕やみ深き
唯こかしこ
輝くさまは
きらめく太刀の
闇きやみ路を
かざしの羽根の
迎へことほく

歩行つ
大槓は
木の枕
衣の手は
夏草の
剣太刀
ちらくど
その光り
ゆきゆけば
輝きに
ときの声

第四章

その一

唱歌 「わたらしく
 憂き事の
 朝露の
 一ひの
 あはれく
 なづかしき
 行末の
 よすがとも
 何忍ぶらむ
 ベンナカ湖の

開く時こそ
 去り行く折りは
 おき纏ふから
 かゝる涙に
 野ざきの薔薇
 この花薔薇
 余が樂しむ
 なれや此花
 ノルマンは
 波がくれば

取り分けて
 よろこびの
 花薔薇
 忍ぶ草
 この薔薇
 我が袖の
 後の世の
 よすがとなれや
 かく謠ひつゝ
 昇る朝日の

花は句はめ
 一しは成らむ
 あはれや勝らむ
 ゆかりや添らむ
 心づからや
 かざしとなれや
 余が忍ぶの
 見わたせば
 かげ清く

友呼千鳥

聲高し

その二

結ぶとすれど
 庭の清水の
 今はた心に
 誰にいふとも
 湖の左りの
 寝で立たる
 露置きまほふ
 折しも何の
 物具それと
 わなマリスよあ

風立ちて
 一ひの
 かゝり来て
 語るるとも
 森の右
 此あさげ
 道の邊の
 來つるらむ
 手に取りて
 汝はいま

住もあへざる
 あかで別れし
 堰もかねたる
 思はず出る
 岸のかけ路の
 斧も弓矢も
 薔薇の蕾
 岩根の上に
 「すはこそ來れ
 ドーチー山ゆ

古里の
 曉の
 ノルマンの
 獨り言
 番兵にと
 うち捨てゝ
 つみ居たり
 聞ゆれば
 誰なるぞ
 戻りしか

「扱も告げねど
 げに遠近に
 正しと聴くは
 敵の兵者
 二日も其處に
 スタアの城の
 出陣の宴
 されば彼方の
 やがて寄なむ
 雨風強く
 凌に難き
 汝は花妻の
 「あな汝未だ

うち問へば
 さまざまの
 しかどぞ
 幾隊は
 待ちてあり
 たかどのに
 行ふと
 黒雲は
 この谷へ
 侵すとも
 事やある
 隠れ家を
 知らざるや

此方も告る
 人の噂は
 そは何時何處
 ドーテイよりや
 セームス王は
 數多武夫
 いふ事々は
 鳴雷の
 さはさりながら
 我が武士の
 玄かはあれども
 何處のかけに
 此アルピンの

敵のさま
 さはにあれど
 すはとあらば
 進まむと
 今もあは
 うち集へ
 誠なり
 轟きて
 よしやいかに
 鎧もて
 ノルマンよ
 頼まむす
 たわやめも

「殿はこゝより
 彼所の森に
 我れ知るべして
 聴て邊りに
 ゆづるをひしと
 余は殿へど
 驚の尖き

その三

二人互に
 此方見返り

うち連れて
 ノルマンは

汝が面
 覺えたり
 程遠く
 居ますなり
 参らせん
 眠りたる
 うち鳴らし
 参らむす
 眼もて

會長へと急ぐ
 敵の振舞

敵の近づく
 「殿は何處に
 さ霧立をふ
 いでや淋しき
 かくさゝやきて
 伴の兵者
 「グレンタルキン
 聴て戻りて
 番れや此處を

途すがら
 聴かまほし

報知をば
 休まるゝ
 彼のわたり
 假家へど
 ノルマンは
 覺さむと
 いで起きよ
 來つらむに
 油断すな

妻もわきも、
 戦叶のぬ
 皆彼島に
 結ぶ夢路も
 散々湖に
 漕や寄せよと
 げにわが酋長の
 心も見えて
 酋長の何故
 かくもはなれて
 「そが故よしの
 げに恐しき
 昔の祖が

人妻も
 者どもは
 隠されて
 安すかれと
 置なせそ
 つげられき
 振舞は
 頼もしや
 かばかりに
 唯ひとり
 玄かゞぞ
 限りなる
 幾度か

うなる童
 酋長のなさに
 猶いやが上に
 沖の大船
 皆彼の島の
 あはれめで度
 さすがに此處の
 さりさりながら
 誠心盡くす
 彼所の森に
 よべブライアン
 よしや限りに
 戦を占ひ

翁とち
 これもかも
 かくれ家の
 磯小船
 入江へと
 差圖やな
 父といふ
 のうノルマン
 供人を
 いねにけむ
 仙人は
 あらざるも
 玉ひたる

タカイルムてふ
 げに恐ろしき
 占を見むとて
 その太占に
 マングラガンの
 余も知りたり
 昔ガランを
 雪なす皮に
 ほのほと燃る
 ひきとひけども
 これに煩ひ
 心の中ぞ
 石もて疊む

太占と
 太占に
 行きたれば
 用ひむと
 白牛を
 白牛を
 討し時を
 角黒く
 凄まじく
 駈け出で
 苦しみて
 寒かりき
 九折

聴と夫とは
 此戦の
 酋長も此處には
 屠も無惨
 「おな強かりし
 音に聞えし
 奪ひ取りたる
 赤き眼は
 うちどうてども
 かへす軍の
 さすがに強き
 玄かはあれども
 また槍の手の

思われぬ
 行末の
 あらぬなり
 のうマリヌ
 白牛を
 兵者が
 ものなりと
 輝き立て
 猛り立ち
 途次
 兵者も
 行路は
 鋭き鞭に

レモンド山に
其處のわたり
猛りもえせず
今幾里
來し時は
なりし牛
程遠からぬ
幼き童の
あな屠りしか
デンナンロ
うつども
其牛を

「げにその牛は
兵者岩と
雲に響きて
も、雷と
岩根の裾に
水に碎くる
何れを見るも
身も瀬もわかで
その五
屠られぬ
昔よ
岩はしる
鳴り響き
打臥て
岩の響き
夜叉のかけ
仙人は
血煙る皮を
世に誑はる、
瀧の邊へ
落ち込む淵の
まなく散來る
岩にみなぎる
何れを聞くも
夢に見るらむ
さかはぎて
岩かげを
うち敷きて
邊りなる
水けぶり
波の音
鬼の聲
占いか

いかなる占の
殿も遠くは
さざり立そふ
邊りの岩に
今や見互す
げにも仆れし
悪魔のかけに
枝にとまりて
頻りに鳴きて
夫れには似ずや
人の聞なば
さはさりながら
このアルピンの
見ゆるかど
行ぬあり
林をば
うち上り
仙人を
兵者の
似ずや彼れ
山の鳥
鹿の肉
彼の姿
必すや
余こそは
守りども
今や彼所に
あな音なせそ
今や静かに
彼方に眠る
あはれ見よかし
骸の上を
弾丸に裂れし
鹿を裂く手を
是非にはしやと
「あ奇物かいひそ
そをまが言と
ロデリック公の
此のアルピンの
待つなれば
彼を見よ
別けく
兵者の
のうマリス
うち迷ふ
檜の木
うちながめ
鳴く鳥
われならで
さくあらむ
御太刀をば
鏡と

亂れがちなる
 來ぬ世の空を
 玄かはあれども
 あはれおのゝく
 消えく聞き
 かきも裂れし
 君の爲めにど
 爲しも遂けたる
 わが枕邊に
 いかでかいひも
 常世の者どに
 越えて生れし
 余見しものを

人に見る事は心
 見る事は今
 おのれ今
 この身體
 この眼
 余が心
 ひたぶるに
 驗しなれ
 來りしは
 盡されむ
 育てられ
 余ならで
 見し人は

げにや敢果なき
 いかでたやすき
 爲しとげたりし
 絶えく底き
 身も世も別かぬ
 是ぞ果敢なき
 心つくして
 げにうかりける
 人てふものゝ
 げにやうつゝの
 天が下なる
 いつの世誰か
 絶えてあり共

此身もて
 事ならむ
 事こそは
 胸の音
 わづらひに
 仙人が
 太占を
 岩の床
 言の葉に
 世の人ど
 掬をば
 今茲に
 おもほへず

我世の兆と
 父を鬼ども
 穢き占は
 彼所に殿も
 今こそ山を
 互にかくと
 此のアルピンの
 かはす言葉も
 梢の紅葉
 敢果なき骸の
 又どもすれば

その六

頼むなれ
 けものども
 逆もわれ
 連れ立ちて
 下るなれ
 語りつゝ
 ロデリック公
 面正しく
 軒の花
 どもすれば
 消えはてて

會長だにあらば
 知るよしもなき
 かくても止みね
 見よやノルマン
 打連立ちて
 彼の仙人の
 「あはれ我會長
 散れば歸らぬ
 むらく燃る
 觸れば逆立

なにかあらむ
 仙人の
 われは思はじ
 諸共に
 來て見れば
 グライアン
 ロデリック殿
 人の身の
 思ひ草
 黒髪の

げにや怪しき
聴しにあらす
唯わか胸に
ありつる答は
討取りたらむ

その

七

味の方こそ
まかぐぞ
自かから
言の葉に
もの影の

答はほのほに
見しにはあらす
焼こまれたる
敵の一人を
此の戦に

似たりけり
文の面に
心地する
いち早く
勝つべけれ

「嬉しや仙人
げにもしみじき
余がアルピンの
まづ射る者は
まかのみならず
軍のかさでの

返すく
汝が占
この黨は
わが味方
今茲に
血祭に

汝が赤心
願ふ所の
敵に向へば
先血を塗るは
自ら好みて
身を供げたる

汝が操
汝が占
いつもく
余が太刀ぞ
アルピンの
ものぞある

そは此あさげ
いつの夜にかは
道てふ道は
道の案内を
谷の木がくれ
その間諜をば
いかでか彼は
事を告げんと
敵の音信

その

八

八

わが國へ
歸すべき
塞ぎたり
承けひきて
おぼろの道
討ち取れど
逃れ得む
來したるは
さかまほし

敵獨り
はた南
偽りて
誘ひゆき
唯一討
置きたれば
彼は誰ぞ
何かある

「さればにはべり
すさま見えぬ

ドリチーは
槍劍

げに凄トき
劍の中

槍劍
ゆらくと

ものな思ひを
醜しつのますら男おとこ
魂たましひ寒さむく
此所こゝを離はなれて
今いまこそ求もとむる
げにや夜よべまで
かゆきかくゆき
淋しみしき島しまの
げに荒あ鷹たかの
集あつりつとふ
醜とのますらを
えも防まがざる
かしこき御心みこころ

姫ひめごせよ。
すらだにも
覺たゆなる
かくれ家の
時ときならぬ
湖うみ原はらに
見みえし舟ふね
入い江えへど
おろし來きて
ばかりなり。
すらだにも
程ほどなれば
いかでかは

世よに聞きえたる
吹ふき來きる嵐あらし
かゝる危あやき
猶なほ奥おく深ふかき
何なににか歎なげく
燈と火ひあかく
あはれ其その舟ふね
いづらもひしど
野の澤さわの禽どりの
彼かれをし見みれば
陸がのかなたに
のう姫御前ひめごきみまへよ
汝かれがみ爲ために

アルピンの
烈はげしさ
戰いくさゆゑ
住ま居ゐをば
事ことあらむ
心こゝろ地ちよく
今いま朝あ見みれば
漕こき寄よつ。
葦あしがくれ
アルピンの
ここの戰いくさ
父ちち君きみの
此處こゝならで

いでや者ものども
よしやことごと
曾長そなの言葉ことばに
霞かすみと動うごく
風かぜに舞まひ舞まふ
何處どこにありや
岩屋いわやの邊へどり
天そらゆく雲くもの
慰なぐささむれ共とも
夢ゆめな歎なげきそ
よき便たよりもて

その九

急いそぎゆけ。
いはすども
いらへつゝ
一ひと馬うま
旗しるし備そなへ。
マグラスは。
苦くむしる
うき思おもひ。
甲斐かいぞなき。
姫ひめごせよ。
歸かへらなむ。

汝きが預あづかりし
皆知みなりたらむ
嵐あらしと響ひびく
天そらに輝かがやく
あな面白おもしろの
彼は行いきけり
エレンは獨ひとり
思おもひ迷まよひて
「聽きて歸かへらむ
やがて父御ちちごも
歸かへらで叶かなはぬ

其その位い置ちに。
汝きが務ととめ。
角かくが鼓つづみ。
劍つるぎ大た刀あ。
けしきやな。
影かげ見みえじ。
つくとど
伶人べいじんの
父ちち上うへも。
よき人の
ものなるを

うちくたくなり
 戦起ると
 深くも思ひ
 汝が夢に
 鎖にひしと
 汝が見たりと
 汝が夢を
 心にくまで
 いなくアラン
 はた誠ある
 余ら故なり
 父の苦し
 余等が故に

岩の根を
 ききまぬ時
 沈まぬ
 かのマルコム
 繋がれて
 いひし時
 のうアラン
 おはせしと
 さはあらト
 ロテリックも
 身の危難
 こゝにあり
 あはれく

あはれアランよ
 事の起りは
 汝忘れてか
 余が手づから
 彼マルコムの
 父は面を
 父はよしある
 汝は思ひてか
 げに心ある
 かあたの天も
 父の歎も
 のう伶人よ
 苦しむ人の

父君は
 自らの事
 のうアラン
 まきしてふ
 わづらふを
 わからめき
 夢なりと
 のうアラン
 マルコムも
 この山も
 こゝにあり
 父君は
 歎きをば

「いなくアラン
 いかにめでたく
 げに父君は
 み目にかゝりし
 名残の袖は
 再び引きも
 別れてこそは
 かよわきものに
 葦のそよぎに

さゝらあらト
 さそふとも
 まめやかに
 一ひ
 見えながら
 かへされず
 ゆかれたれ
 あればとて
 なびく水

汝が柔しき
 余が此胸の
 暇を告げて
 落る涙は
 思ひ立たる
 張りし矢竹の
 よしやわが身は
 父が心は
 柔しき水も

言の葉に
 解かるべき
 行かれしが
 ありながら
 御心を
 一ひ筋に
 女子とて
 知らずやは
 なかくに

猶靜かなる
いかでか無くて

その十

かくれ家を
あるべきぞ

求めんと思ふ

心の根の

「いなく姫よ
君の袂の
また殊更に
父の遺させ
歸り玄遅く
近き御寺を
父の御身の
夢うたがひな
神や守らせ
よしや誠の
悪しきえるしに

いとほしき
むら時雨
ふりはへて
玉ひしは
成らむ故
契りてぞ
恙なく
玄玉ひそ
玉ふらむ
夢どても
あらざるを

あはれ悲しき
道理ありと
余より亂し
あはれよぎなき
逢ふに便りこそ
殿はいでさせ
おはさん事は
またマルコム
余が幻に
父君の爲め
余が幻に

姫御前よ
見ゆれども
玉ふなり
よしありて
よけれとて
玉ひける
返すく
君の事
見し夢の
姫の爲め
見る事は

その十一

救はむものと
父の家出も
世に逢ふ事の
何に遺して
今宵歸らず
尋ね來りて
あはれ悲しや
われど余が身を
思ひ込みたる
あはれ妻も
余こそ先きに
父も彼所へ
悲しき事の

思ふ心
こゝに在り
叶はずば
行かれけむ
成るならば
名乗れとは
父君は
犠牲として
一筋に
ダクラスの
爲さむずる
行きしなれ
限りなれ

いかでためらふ
まかあらざれば
天つ國にて
まかあらざれば
カンパスケチスの
いひも遺させ
ゼームス王に
友の恙を
立出で玉ひし
男兒の身にし
同ト事をば
思へば女子の

人あらむ
何にがゆる
相いはむと
いかでまた
御寺へと
玉ふべき
身を捧げ
祈らむと
事なるぞ
あなるらば
爲さむとて
この身こそ

水枝 さす
鹿 鹿 蹄 鹿蹄

緑の森は
鳴く容鳥の
狩犬叫び

身に浸みて
聲きけば
獵人の

嬉しかりけり。
樂しかりけり。
角鳴る時ぞ

「あはれ汝が
汝がひくならば
たぎつ涙の
引き立つれ共
餘所の空のみ

思ふごと
余は聴かむ。
やるせなや。
すませども
忍ばるゝ。

汝が心に
玄かはあれども
琴取り上げて
思ひは此に
果てなき天も

任せなむ。
玄かはあれ
伶人は
無きエレン
あはれなり。

のう姫御前よ

エレン

聴ねかし。

常にあやまつ
尋ね來りし
勇まざりける
知らせたりける
あはれ姫上
いひつる事は
是をし見れば
禍ならじと
かゝるいふせき
天つ岩屋は
げに恐しき
悲しき姫上
君が歎きを

事あらじ。
其時に
其時に
阿ランに
此のう姫よ
いつもく
告げむとき
岩の屋は
常にかく
咄しをば
余が琴に

見知らぬ人の
また余が琴の
思へば今日の
いひてし言を
こは禍の
必ず誠に
獨りまがごと
又偽りの
願ふは早く
怪しき事の
余は知りたり
うちも解きてよ
搔きはらさむと

彼の島に
ひけとく
歎きをば
思ひてよ。
兆ぞと
はべりけり。
のみならず
あるべきか。
捨てなまし。
多かるを。
のう姫上
かこち顔
思ふなり。

禍わざがつみぬば其その夜よささいいひそ
 玉たまのり衣ころも射いて取とりしば
 紫むらさのの紫むらさのの紫むらさのの
 細こ枝えだをば木このは葉はをば
 この腕うでをば

拾ひろふもあはれ。
 樵こるもあはれや。
 馴ならさで叶はぬ
 絹きぬの衣にけふぞ悲しき。
 手てに取とるものも
 鹿しかをばはぎて
 製つくるやあはれ
 汝きこそあはれ。
 こやリチャード。
 果はて玉ふども
 開ひらけの闘たかひ
 汝きが槍先さきに

岩いの屋の
 山やまがつの
 明あけ暮れに
 朝あさあ夕な
 冬ふゆの日の
 この兄あに
 ゆくりなき
 敵かたきをば

壁かべをあまむと
 まづの手業わざに
 馴なられにし汝きが
 無なかりし汝きが
 寒さむさを凌ぐ
 よしやあへなく
 禍わざがつみ故ゆゑぞ。
 兄あにと知らねば

水みづ枝えださす
 緑みどりの森は
 嬉うれしかりける。
 汝きが故に
 世よを忍ぶ
 野の末すえにも
 住まで叶はぬ
 余われは君ゆゑ
 住まで叶はぬ
 余われ捨すてはて、
 阿あリスプランド。
 汝きが故に
 美うくしき
 うち連つれて
 汝きが兄を
 心こころ太とくも
 思おもへば果はかず
 汝きが髪故ゆゑぞ
 汝きが手にし
 余われが手にし
 此この旅たびに
 澄せみ渡る
 わはれアリス
 太た刀ち劍つるぎ
 身みと成りし
 森もりかげに
 故こゝろ郷さとを
 あなあはれ

取とり持もちし手てに
 汝きが故なれ。
 あさましき
 美うくしき
 うち連つれて
 汝きが兄を
 心こころ太とくも
 思おもへば果はかず
 汝きが髪故ゆゑぞ
 汝きが手にし
 余われが手にし
 此この旅たびに
 澄せみ渡る
 わはれアリス
 太た刀ち劍つるぎ
 身みと成りし
 森もりかげに
 故こゝろ郷さとを
 あなあはれ

汝きが故に
 美うくしき
 うち連つれて
 汝きが兄を
 心こころ太とくも
 思おもへば果はかず
 汝きが髪故ゆゑぞ
 汝きが手にし
 余われが手にし
 此この旅たびに
 澄せみ渡る
 わはれアリス
 太た刀ち劍つるぎ
 身みと成りし
 森もりかげに
 故こゝろ郷さとを
 あなあはれ

汝きが手にし
 余われが手にし
 此この旅たびに
 澄せみ渡る
 わはれアリス
 太た刀ち劍つるぎ
 身みと成りし
 森もりかげに
 故こゝろ郷さとを
 あなあはれ

水 枝 さす
 た わ や め の
 柏 木 の
 リ ナ ヤー ド の

緑 の 森 は
 ア リ ス の い と い
 一 ひ ら 陰 に
 斧 の 音 聴 ゆ

身 に 浸 み て
 樂 し げ に
 榎 木 の 葉 の
 あ は れ く

樂 し く も 在 る か。
 樂 ひ 謠 ひ つ。
 茂 れ る 下 に
 緑 の 森 ぞ

足 曳 の
 人 々 の
 荒 は て し
 そ の 聲 は

小 山 が く れ に
 王 の エ ル フ ォ ン
 年 經 る 寺 の
 も の 鳴 く こと

世 を 恨 み
 い で 誰 か
 軒 端 を ば
 な ま ぐ さ く

恨 み 果 て た る
 來 よ と 呼 ぬ。
 吹 風 の こと
 ひ い き 渡 れ り。

天 つ 少 女 の
 榎 柏 木 を
 妃 の め づ る

う ち 連 れ て
 う つ 響 き
 小 男 鹿 を

舞 ひ 舞 ふ 庭 を
 何 故 な ら び。
 狩 取 ら び と て

月 の 夜 に
 さ し か く す
 エ ル フ ォ ン の

余 は や
 汝 も ま た
 荒 拷 も
 汝 と 居 れ ば

こ そ め の 衣
 花 摺 衣
 汝 と し 着 れ ば
 森 の 緑 も

身 に 纏 ふ
 紅 の
 あ つ ぎ ぬ の
 花 や ぎ て

事 は え せ ね ぞ
 衣 は な け れ ぞ
 暖 た か り し こと
 余 は 見 る な り

その 十三 琴歌の續き

かゝりしなめり。
憂はあらじな。

君としあれば。

のう余がせ

余がせよ聴ね。

君も余も

世に幸あくて

故郷をも

汝は捨てけり。

まかはあれ

まかはあれども

余はわが

思ふ君あり。

汝は汝が

思ふ余あり。

かくしあれば

二人しあれば

又思ふ

物はあらじな。

來したるは
着あらしの
何者ぞ

何奴ならむ。
緑の衣を
いかなる物ぞ。

久方の
かしこくも

天津少女の
着むと思ふは

あな面憎くや。

いでウルガン

いでやウルガン

汝こそは

耶蘇の教を

學びしと

兼てし聽けば

ものゝねの

聞ゆるわたり

いでや行け

早やも行けかし。

十字をば

よしや見るとも

祈りをば

彼れ結ぶとも

神やらひ

彼れやらふとも

冬枯の

野べのすゝきの

枯れづくに

まほれ行くごと

消えづくに

苦しめやらむ。

かく苦しみ

かく煩ひて

世の中に

かくしあるより

なかくくに

身の無き事の

勝れると

よしや祈るも

彼れをこそ

死ぬも許さで

その十四 琴歌の續き

うちもこらふめ。

水枝さす

緑の森は

身に浸みて

樂しかりけり。

百鳥は

謠ひやめども

うたゝまた

嬉しかりけり。

たわやめは

夕べの燈火

夕まぐれ

點し立てつゝ。

リチャードは

おどろを負ひて

余がせせに

今や歸りぬ

ウルガンの

醜ものかけ

柴木負ひつゝ。

影の見ゆるに

リチャードは

あなやと斗り

手を結び

神を仰げば

影凄き

醜のウルガン

あなめく

穢れたる手に

祈ると

余恐れじと

ウルガンは

うち罵りぬ

岩いの戸とは
 ウウルルガガンンの
 十じ字じををば
 たたわわややめめは
 ややががててままた
 勇ゆうままししき
 いいややちちの
 ささりりななががら
 鬼おにののけけののももに
 人ひとのの手てに
 歡うきののももに

岩いののととばばそそは
 怪あやししのの顔かほは
 手てづづかからら結むすび
 げげにに勇ゆうままししや
 汝いましのの如ごとく
 少せう女にょだだににああららば
 十じ字じのの架かを
 ささははささりりななががら
 家いへにに捕とらははれ
 ももろろくくもも裂され
 ままたた樂たのししみみも
 かかくくどどななりりぬぬる。

ぬぬばば玉たまのの
 彌い増ましにに
 ももののけけのの
 ままたた結むすび
 人ひとににししななららむ
 空うら蟬せみのの
 ああささままししき
 三み度たびままで
 余われがが額ひたひ
 絶たええててああき
 白しろ露つゆのの
 消きええ行ゆくくせせに
 このこのエエルルピピンンのの

額ひたひにに寄よりりて
 二ふた度たび結むすべべば
 凄さくくぞぞ成なりりぬ
 いいよよくく暗くらく
 余われがが頭かしらに
 強しひひてて結むすばばむ
 醜しとののウウルルガガンン
 美うらくくししきき世よのの

昨きの日ひのの今け日ひのの王きみ
 もものの影かげ人ひとのの霞がきみ
 ううままししき
 定さだめめああき
 春はる霞がきみ
 常つねににかかもも
 冬ふゆのの日ひのの
 白しろ妙たのの
 ももののけけのの

今いまははたた思おもへへば
 玄くろろろしし召めすすててふ
 夜や叉しやのの姿そがたと
 余われららがが姿そがた
 ううまましし少せう女にょのの
 緩なくくかかここと
 輝きらめめくくののみみのの
 もものの静しづかかなるなる
 みみ雪ゆきにに薫かりり
 住きままふふ所ところにに
 かげをいかにせむ。

ぬぬばば玉たまのの
 ああささままししき
 秋あき霞きりのの
 ありありとと見みれば
 忽たちちちにに
 わわははれれははかかななや
 冬ふゆのの日ひのの
 面おも白しろき
 まますす鏡かがみ
 樂たのししかかりりけけれ。

影かげはは見みゆゆれれと
 氷こほりにに匂におふ
 光ひかりりりのの如ごとく
 きらきらふふががここととく
 何い時つししかか消きつつ
 見みるるとと思おもへへば
 替かはりりゆゆくくななり
 よよるるににししあありりき
 刃やいばをを取とりりて

「いななく姫よ
斯る嵐の
此所へ忍び
まろび寄れたる
まがふ方なき
見るよりエレンは
げにも似たりや
緑の色
その勇ましき
外國人の
琴の調べは

その十六

果にけり。唯一人
歩行より
狩衣
スノードンの
夢の現
人の影
岩屋の戸
玉ひつる。
折りなるに
今こゝに

折りしもこの
上るは誰ぞ
あでに氣高き
尖き眼の
ヒツ、セームスの
思ひ迷ひて
こはく如何にと
「あなせームス殿
げにいかならむ
和君を茲へ
汝を再び

岩道
誰ならむ
其の面
其の光り
ありし影
詠めしが
驚き
君何にし
まがつみの
誘ひけむ。
相見むと

たわやめは
十字をば
もの、けど
美しき
水杖さす
ほろくど
玄かはあれ
ドンハリの
諸共に

げに勇ましき
三度祈れば
見えにし影は
げに美しく
緑の森は
鳴く山鳥の
讀經の聲の
古き御寺に
着たりし時の

なりまさりつゝ。
たわやめは
結びたる
スコットの
たわやめの
なりにけるか。
身に浸みて
聲きけば
澄わたる
墨染の
嬉しさは
勝りけるかな。」

三度結びぬ
十字の下に
人の中にも
兄エセルスと
樂しかりけり。
嬉しかりけり。
響をきゝて
衣を三人
緑の森に

偶然余を
 などまがつみど
 もの賄賂て
 かしこの流れ
 露ふみわけて
 「あな樂しとは
 戦ありてふ
 守りの事を
 「夢さる事は
 さる言の葉は
 野邊の煙りの
 「あはれ俗人
 彼所に影の

誘ひしは
 數ふべき
 いざなひて
 こゝの岸
 嬉しくも
 何事ぞ
 事もまた
 せいムス殿
 神かけて
 あらざりし
 けぶりにも
 疾く此所へ
 見ゆるぞや

神の御靈と
 先に連れにし
 今朝しも互に
 あはれ嬉しき
 導き呉れたる
 汝が案内者は
 道の隈々
 和君に告も
 尾上の風の
 聞かざるのみか
 さるけぶりをば
 その兵者を
 いでや疾く

思ひるゝ
 案内者をば
 謀しあひ
 道芝の
 人の心
 戦の事
 隈もなき
 せざりしか
 そよとだに
 また余も
 見ざりけり
 引て來よ
 こやアラン

彼の心の
 外國人を
 かれに正せよ
 如何なる風の
 このロデリックの
 人を悲しみ
 岩を凌ぎて
 さばかり賤しき
 きゝたる事の
 その十七

有磯海
 恙なく
 こやアラン
 吹き初めて
 家の子は
 人を怖れ
 和君をば
 心根の
 なかりしを

底の心を
 送りて行かむ
 げにいたはしき
 汝を此所へは
 賤しき者の
 會長なる人に
 忍びて此所へ
 ありと絶えて

うち糺し
 誓ひをば
 せいムス殿
 誘ひけむ
 限りとて
 告げもせず
 導くごと
 昔より

「あはれ柔しき
 掛けて給はる
 たわやめよ
 わが命
 かばかり君の
 世にも尊く
 御心に
 思はるゝ

さりさりながら
 よしわが命
 また戀ならば
 露の命の
 棚機づめの
 むなしき空に
 我心をば
 願ふに汲みぬ
 かくも妙なる
 この淺茅生の
 思ひて此所へ
 軍の營み
 餘所にのみ見む

さりながら
 捨つるども
 この命
 露ばかり
 今日ばかり
 うち捨てて
 うちつけに
 うちつげに
 たわやめよ
 美しき
 野末より
 來つるなり
 はたしあひ
 遠方の

余が身の譽
 すつる甲斐ある
 人の消ゆるを
 余のいかでか
 再びどなき
 願ふはきね
 岩瀬の水の
 かゝるあさは
 花の咲くべき
 汝を餘所にし
 汝を移さむと
 もの凄まじき
 都わたりに

人の戀
 譽れなり
 惜むてふ
 惜むべき
 今日折り
 たわやめよ
 いふよしを
 昔より
 野ならねば
 移さむと
 來つるなり
 氣色をば
 伴れ立ちて

柔しき手もて
 余は來しなる
 よし遠くとも
 わが駒待つに
 彼處の城に
 庭の木陰に
 眺めてしがな
 君の心の
 余が心なき
 和君の譽る
 歡びてのみ
 かくも危き
 和君を此處へ

汝を余れ
 今此所に
 ボハストル
 うち乗れば
 どいかんず
 移し植る
 朝あ夕
 讀すとや
 耳ゆるに
 まにくに
 ありしかば
 道を踏み
 いざなひて

移し植るんと
 あはれたわやめ
 彼處の城に
 瞬く間に
 扱は君をば
 あはれ柔しき
 「あな亂りにな
 云ひてしやまむ
 君が來ましし
 えもうち消さず
 斯る危き
 余招くには
 和君の身をば

思ひてぞ
 いざ行む
 行きもせば
 スタール城
 我宿の
 花のごと
 の給ひそ
 やみなまし
 その時に
 只管に
 けふの日に
 あらざれせ
 あやふくも

爲し参らえし
余が果敢もなき
代りに何を
唯打あけて
余が心なき
招きしなれば
罪の許しを
此身の父は
國の中より
父が首を
祿賜ふてふ
血筋も深き
必ず君の

誤ち
またり顔の
償はむ
余が耻を
笑顔より
いまこゝに
求めなむ
かしこくも
逐はれつゝ
討ち取りて
かくも世に
此の余に
汚れとや

げに余が罪の
偶然招く
げに如何にして
告るの外
ゆくりもあらず
己が耻をもて
兎まれ角まれ
掟の外に
父が首をば
天皇に捧げむ
穢れはてたる
縁を結び
成りも侍らむ

深かりし
禍ひの
つくなはむ
道あらじ
誤ちを
わが罪の
せりムス殿
置かれつゝ
あさましや
者あらば
我父の
玉ひなば
せりムス殿

かばかりものを
らざでもあらば
もの思はで
よしある人の
此の世にありや
深き心の
よしある人の
わが紫の
君の辨きてむ
深く奇咎め

申しても
肝むかふ
やみねかし
侍るなれ
その人は
つくしがた
侍るなり
この心の
こゝろ
玉はれそ

猶もものをば
余が誠心を
あはれ我君
思へば今も
わが父故に
身をうき淵に
あはれ我君
深き色をば
妾が身をば
願ふはやく

おぼしてか
きかせられ
其處にこそ
存命て
われ故に
沈めたる
かく云は
必ずすや
ゆるされよ
ゆきねかし

その十八

ヒツゼームス

天雲の

浮し少女の

つき草の

うつし心を
知りてはあれど
エレンの心
ヒツゼームスも
いなと斗りを
うらうへなりと
少女心の
ひくも靡ぬ
空しき露と
塚の邊りに
あはれエレンは
わが世の望
ものかたりたる

ひきよする
今茲に
今更に
知りつらめ
いらへても
面影に
一筋に
其の姿
消えはて
獨り居て
うき思ひ
絶えまじと
あはれかも

巧みの糸の
よしや引くとも
結ぶよしなき
言葉の節に
底の心は
ほのめかすとも
云ひも張りたる
わがいとほしき
残るも悲し
歎く時こそ
やるせもなげに
歎きくへ
エレンの答

限りをば
繰るとても
事をこそ
いな船の
玉藻刈
おもはれず
梓弓
マルコムが
おき塚の
かくあらめ
つくくと
マルコムを
うちきゝて

ヒツゼームスの
望の庭も
あはれと思ふ
「わが世と結ぶ
妹どし思ひ
嬉しき人の
「あはれ君さは
露も知らトと
君も危し
かのさかどしき
恙あらずや
頼む方なる
それうちきゝて

心の
荒れはてぬ
心根は
君なくば
かまづかむ
心やな
君こそは
覺ゆなれ
はやもはや
兵者
いかぢらむ
者ならば
ヒツゼームス

頼の綱も
まかはあれども
猶枯れ果てず
君を今より
請け引き玉へ」と
エレンは何と
彼のロデリックの
かくしありては
立ち歸りてよ
君の案内と
彼の俗人に
えるべに將てぞ
今更亂るゝ

切れはてぬ
まかすがに
うせやらす
はらからの
云ひ出づる
思ふらむ
心をば
余のみか
歸へりてよ
爲す事は
うちきゝて
歸りてよ
心をば

賜りたるは
うまし人にも
世を渡らむと
此黒金の
皆我が國と
ありて甲斐なき
今より姫の
これを見せも
誰かは知らぬ
驗のえさるさ
よしや如何なる
この償ひは
黄金造りの

此の指輪
あらざれど
思ふ者
此楯ぞ
思ふ者
この指輪
この玉は
玄玉は
者あらむ
此指輪
願ひとて
必すや
指輪をば

あは大内に
只此一筋の
余が持つ城は
戦せむ野は
何かは王に
願ふは姫に
納め玉ひね
宮の門守
直ちに王を
汝を導く
王が質けし
姫が望みの
エレンの指に

殿居する
劍もて
こゝもかも
こゝもかも
求むべき
棒げさむ
此指輪
殿守も
求めさば
汝が守
この寶
儘ならむ
渡しつゝ

人に見せじと
別れて二足
事ありがほに
また立ち寄りぬ
その十九
岩の門

思ふらむ
また三足
立ち止り
岩の門
たわやめよ
さゝねかし
うち振り
奉りて
賜りて
ものあらば
きこえよや

額に手をば
如何なる心の
立ち止りて
願ふはせめて
余いにし年
國王のからき
辱くも
今より後に
持ちてし來れ
望のあらば

うち置て
浮びけむ
振りかへり
一言の
戦命を
みかどより
みかどより
何時何處
此指輪
きかなむと

何の合圖に
 何としつらむ
 彼所に鳥の
 ヒツゼームスは
 鳥の群れて
 鹿を頻りに
 勇ましかりし
 「あななづかしの
 このトロザ一の
 今はた思ひ
 さはさりながら
 汝が命は
 心置れて

呼ぶ聲ぞ。
 うち迷ひ。
 群れ居れば
 夫れさゝて
 ついばむは
 逐ひすがり
 其駒の
 わが駒よ。
 この谷を
 いづるなり。
 音を立てそ。
 なかるべし。
 言葉なく

さゝ答むれば
 「いな合圖に
 彼れおどさむと
 彼方を見れば
 無惨や前の
 あへなく仕え、
 ひなしき亡骸に
 汝がために
 踏みたる事の
 わはれムルドク
 もしきはぶきて
 導く人ど
 心許さぬ

ムルドクは
 候はず。
 思ふのみ。
 げにやげに
 山狩に
 わか駒の
 わりければ
 わがために
 口惜しく
 前をせよ。
 聲上げなば
 つれ立つも
 道の連れ。

名残を惜しむ
 さらばと斗り
 只空蟬の
 天を驅るか
 共に巡りぬ
 三また近き
 トロザの谷の
 遠近うたふ
 影靜なる
 案内者の者は
 叫ぶをきゝて

そ の 二 十

狩衣の
 立ち去りぬ。
 敷のどと
 ヒツゼームス
 山のあせ。
 流れをば
 風絶えて
 鳥の聲
 山の路
 はしなくも
 ヒツゼームス

袖は短き
 ものいふ方も
 打守りたる
 早も案内者に
 カトリン湖と
 渡りて急ぐ
 唯聞くものは
 眠りやすらむ
 ヒツゼームスに
 怪しき聲を
 「あなムルドクよ

暇人は乞ふ
 伶人には
 かなたには
 連れ立ちて
 アクレイの
 後影
 水の音
 日の光り
 連れ立ちし
 わな一聲
 汝が聲は

路はいよく
端ざまに掛る
見れば怪しや
尾花の袖の
緑の髪も
つゝれの衣も
あはれや
静かならざる
四方をふりさけ
何に心を
黄色いろに

いやすごとく
悪路へど
あさましや
枯れく
花の面も
初鴈の
あさましの
眼も
うちながめ
留めて見る
咲き匂ふ

只見上げたる
今は來にけり
路の邊りの
瘠れし女子
嵐にうたれ
僅に肌を
げにあさましの
森に岩根に
見るとはすれど
天もなげなる
草を額に

大岩の
かの二人り
岩のねに
只一人り
日にやつれ
包むのみ
その女子
大空に
玄がすかに
其の眼
うちまきて

その二十一

鷺の落し
あはれその羽根
心に怖き
岩の端を
かのムルドクの
岩々響き
ヒツゼームスの
歡ぶがごと
聽てうち泣き
歌ふもあはれ
昔榮えし
あらん神をも
今はするどく

羽根を取り
此の羽根は
ものもなく
うち上り
影を見
さよひまで
影を見
うち笑ひ
よと泣き
あさましや
時世には
鎮めけむ
凄ト

打ふる手振りの
ものをば絶えて
鹿だにえこそ
集めたる羽根
あなやど一聲
近くまゝに
都の人と
はては頻りに
よと泣つゝ
歌の聲をば
琴の音色に
昔のけはひ
うちも狂ひて

をかしさや
覚えざる
上らざる
あはれやな
叫びたり
かの女子
思ひてか
手を振りつ
やがてまた
うち聞けば
はた笛に
まゐるくあり
歌へども

「おはれ如何なる
いかなる事を
よしこそあれ」と
「さればに侍べり
名をばブランと
かしてこの里を
僅かに妻と
あへなく我手に
心狂ひぬ
刃を余に
太刀に脆くも
彼は此所へは
かれを看守れる

人ならむ
いふならむ
うち問へば
かれこそは
さこゆあれ
討し時
呼び初めし
生をられ
この少女
向けたれば
仆れたり
来りけむ
マドリンの

かの手弱女は
おはれその歌
彼ムルドンは
デバンの里の
あはれ我會長
彼は折りしも
名残も深き
擒となりて
彼がゆかりの
雙ぶ者なき
そは夫れとして
此所にあるこそ
隙を窺ひ

誰なるぞ
その心
いらへつゝ
者にして
ロデリックが
花妻の
其の曉
かくも世に
其の人は
わが會長の
いかなれば
不思議なれ
幾度か

逃るゝ事の
おはれ魂
かく罵りて
あはや打んず
「弓振り上げて
打むとするや
畑つくる兒が
汝を此谷に
氣は狂ひたる
辱なしと
身をまろばして
天駟りても
手づから造る

ありときけば
亂れたる
ムルドンは
手弱女を
何かする
うたばうて
石投げ呉れむ
たわやめも
云ひさして
歡びぬ
なづかしき
此の翼

又も逃れて
敢果なき者に
手にせる弓を
あなやと支ゆる
己れムルドン
己れ一打
投げ出すごと
一打なりとも
嬉しき人の
ヒツゼームスの
「おはれ我君
わがせのみ魂
歎を知らぬ

来りけむ
侍るなり
ふり上げて
ヒツゼームス
少女をば
打て見よ
ムルドンめ
ゆるさむや
言葉かな
膝近く
是れ見てよ
尋ねむと
彼の人が

あはれ光りも
 緑の色
 余が此耳は
 都わたりの
 わがいとほしき
 ありまなり
 余が此ブランの
 彼の衣は
 げにもあはれに
 あはれめで度
 誠に君に
 汝の賢く
 汝は酌むらむ

消えにけり。
 嬉しさは
 物の音も
 人の聲
 ウイリムは
 かの人は
 常にかも
 そのかは
 謠ひけり。
 語らむと
 ましませば
 我が心

さはさりながら
 今なほ嬉しく
 明ならず
 尙嬉しくぞ
 げにや誠の
 げに彼の人の
 心の限り
 野邊の緑の
 都わたりの
 余が今茲に
 思ふ事には
 必ず底の
 斯く云ひ捨て

狩衣の
 思ふなり。
 なりにしか
 聞ゆなる。
 野守にて
 うせしゆゑ
 うせにけり。
 失せにけり。
 色なりし。
 里うたを
 いふ事は
 非ざるも
 心をば
 手弱女は

君に投げられ
 いかでか墮るを
 谷の岩ほの
 狼の牙に
 いばらが枝に
 狼の連を

その二十四

「あないひさせそ
 柔しき人の
 少女はいとゞ
 情も深く
 げに泣きあかし

こや少女
 言の葉に
 嬉しげに
 見ゆるなれ。
 泣き暮し

此の谷へ
 止めむと
 底深く
 裂れなむ。
 打かゝり
 招くらむ。

よしや危く
 此の翼をば
 落て碎て
 あはれ穢き
 旗指物と

静にもてよ
 狂へる魂も
 「あはれ嬉しや
 あも静めなむ
 わか目も今は

落るとも
 貸すべきか。
 汝か骨は
 汝が衣は
 翻り

なが心
 沈むらむ。
 君こそは
 あが心
 枯れはて

又も絶えど
彼のムルドクを
此方の人を
眺るさまの
歌ふうた
や、雲時
うちまもり
あはれやな
聲はせはしく
睨み詰めては
聴て谷間を
はた低く
やがてまた
遠近と

その二十六唱歌

山人は
嬉しげに
狩人は
華勝れたる
麗に
谷を下り來ぬ
見ゆるかな
山の獵男は
常にうたひぬ
げにも楽しく
暮すかな
百枝なす
やさしくも
まくひうち
劍どぎ
猪繩渡し
弓づるはきつゝ
角振りかざし
げに柔しくも

傷うけし
麓には
小男鹿は
心あれば
狩人は
女鹿を遇ひぬ
猪繩ありと
小男鹿に
息絶えどに
誠を籠て
物も見えなむ
驅りもすべし

守るかな

その二十七

あはれせームス
けだしエレンが
頻にものを
さはさりながら
戀ゆるゑに
どやかくと
いひつるも
ムルドク
心し燃わて
思ひ煩ひ
絶て心に
あやしき聲を
ありしかば
氣遣ひて
懸けざりし
さゝし時

謀りかねたる
 今此少女の
 慥に成りぬ
 小男鹿よりも
 影を見留し
 劍 鞘 剝
 云はずば取らむ
 また稻妻の
 彼方に逃げつ
 射たる玄の矢の
 ひれを拂ひて
 無惨の矢先き
 今こそ示せ

人 心
 謠 歌
 その疑ひ
 なかくに
 猪のごと
 ふりかざし
 汝が命
 輝くごと
 驅りざま
 いたつきは
 うしろなる
 その矢先き
 疾き脚を

若しやと思ひ
 それをしきゝて
 かけたるわなを
 ヒッセームスは
 わなやと思ふ
 「こや巧みをば
 かくといふまも
 在と見るまに
 弓引きためて
 ヒッセームスの
 少女の胸を
 わなアルピンの
 汝がアルピンの

疑がひぬ
 今更に
 見とめたる
 狩人の
 瞬く間
 うちわけよ
 彼方には
 はやもなく
 ふりかへり
 冠りたる
 貫きぬ
 ムルドンの
 兵者の

絶えて踏ざる
 峯ふきおろす
 わはれはげしき
 汝が命を
 汝が命に
 伏えて待つなる
 汝がゆくてに
 わな叶はじど
 伏えて待つなる
 わはやはげしき
 高嶺おろしの
 打たれしさまは
 脆くも仆れし

此の危急
 わらしごと
 ますら男が
 すてなむか
 かゝる時
 汝が友
 待ちてあり
 見ゆるかな
 汝か連れに
 サクソンは
 雪なだれ
 鳴神の
 ムルドンの

あはれ示せよ
 むらく燃る
 汝があとべに
 汝が命を
 今こそ汝の
 おどろの繁みに
 汝は彼所に
 あなくあはれ
 えこそあはざれ
 今ぞ汝に
 あはや無惨の
 落ちて裂けたる
 血けふる骸を

疾き脚を
 ほのはごと
 絶るなり
 拾はむか
 命なれ
 隠れつゝ
 どいくらむ
 途にまた
 汝こそは
 退ひつきぬ
 只一打
 松の枝
 うちのぞく

ヒッゼームスの
 兎せむ角せむと
 「何處いかなる
 絶えぬ緒ならば
 さはさりながら
 わはれ彼世へ
 思へば過ぎし
 もの、道理
 わはれ血汐の
 この狂ひたる
 消えゆくこそは
 果敢なく消ゆる
 恨み返さむ

立寄りて
 煩ふを
 君なれば
 余もまた
 引けどく
 急ぎ行く
 幾月日
 殊更に
 一の魂も
 この魂も
 嬉しけれ
 我が身かも
 この篠矢

またゝる血をば
 彼の静かに
 よにも嬉しき
 結ばまほしき
 切れたる糸を
 死出のかきでの
 覺えしよりも
 今ぞ覺えぬ
 枯れ行く雫
 思へば夢の
 ひびき矢光に
 思へば憎き
 わはれ我が君

せかひとて
 見かへりて
 御心
 わが玉の緒
 いかにせむ
 一時は
 なかくに
 わが悟り
 雫地して
 心
 かゝりてぞ
 此の篠矢
 君のかげ

ヒッゼームスの
 玉の緒絶えて
 元來し道へ
 無惨血しほの

その二十七

目の玉は
 音もなきに
 玄づくど
 紅の衣
 たわやめは
 青柳の
 篠矢をば
 力なく
 咲き匂ふ
 白羽根を
 傍らに

小鳥を握む
 莞爾と笑みて
 歸る彼方に
 我手を膝に
 木下の岩に
 われど抜き取り
 はかなき影の
 草を結びし
 編みて造れる
 落ち散りたるも

峰の鷹
 立ちあがり
 たわやめの
 うちのせて
 取り継り
 うちみやり
 いどほしや
 花桂
 翼さへ
 わはれやな

君の面影 前の世よりの 君も見つらむ 心狂るへる 頼む瀬もなき 黄色いろど 今は移りぬ 汝が美しき あはれや血汐 かくも光りは この黄色の 如何に無惨の 残し、鬘と

いとなく 何となく すぐせある わがこの鬘 夢の 中の さのふけふ うつりても 黄色に 髪のごと 消えはてぬ 仇の手には 今更さらに

我身の仇を 和君と見ゆる わな余れこそは 沈み果てたる なは捨てざりし 朽ちはしつれを 緑の色も 涙に血汐に 願ふはわが君 いかなる時に 今更さらに

討つといふ 嬉しさや 歎きの 中の うき淵の わがこの鬘 わがこの鬘 昔の ありしをば 汚れつゝ 君きゝね いかにして 手弱女の 告げざらむ

君に願ふは 返すくも これを汝が さしかざしたる 雨にも日にも 再び余に わなわさましや のう天津神 今や絶えなむ わが悟りをば あはれ我が君 はたわが身ゆる 願ふは和君

わが君よ 今此處に 勇ましき 羽根のごと うち晒し 送りてよ。 わが心 玉だすき わが魂の いや清く 必すや 恙なき 毛衣の

賤のをだまき 君に願ふは 兜のひれに この汚れたる あはれ恨みを このみ死出の なほも迷ひぬ かけてぞ祈り いまはの瀬戸に いや明らかに ますら男の子の 君が命の 袖ひろ衣

くりかへし わが此の鬘 ひらくと 血汐をば 雪ぎてぞ 頼みなり。 わが心 奉る。 のう御神 照してよ。 太刀に懸け 幾重にも 身に纏ひ

暎しんと挾はさみて
 結び合あはして
 夫つまの鬢かみ
 千ちすぢ幾筋いくぢ
 かく語りつゝ
 君きみがみ蔭かげを
 彼のロ德里ロ德里に
 「このたわやめの
 あだし野末のぞの
 歎なげきこもく
 落おちて碎くだくる
 これも瀧たきなす
 さすがに強つよき

ますら男おとこも
 袖そでの雨あめ
 袖そでの雨あめ
 うち寄よせて
 露つゆとしも
 この恨うらみ
 恨うらみむす
 頼たのみあは
 大丈おほ夫おとこは
 切きり取りて
 諸もろ共どもに
 血ちに染そめて
 打うち仰あやぎ

そこの雫しづくは
 太刀たちの袂たもとに
 無む念ねんの齒はがみ
 玄くろくじ者ものなる
 消きえし少女せうにょを
 この歎なげきをば
 あはれ天津神あまつつかみ
 君きみ助たすけてよ
 悲かなしき少女せうにょの
 少女せうにょの手てにせし
 暎しんと互かたみに
 余あが冠かむりたる
 弓ゆみ矢や八幡はちまん

汲くみすやは
 はらくと
 玄くろがすかに
 手てに懸かり
 うちまもり
 必かならずや
 もしや余われ
 その時ときに
 たぶさをば
 夫つまの髪かみ
 うち結むすび
 わが頭巾かぶとに
 神かみかけ

太おほき羽根はねをし
 眼まなこも凄せこき
 譽ほこり顔がほなる
 君きみが御心ごころ
 扱さもあはれの
 必かならず返かへして
 行ゆく手ての路みちの
 君きみは行ゆけかし
 あはれ天あまつ神かみ

その二十八

うちかざし
 ロ德里ロ德里に
 ロ德里ロ德里に
 強つよくあれ
 此このブラン
 玉たまはれよ
 限くまく
 異こと路みちを
 いびさらば
 ヒツゼームス
 たわやめの

血ちに汚けがれたる
 げにアルビンの
 願ねがふはわ君きみ
 君きみが劍つるぎし
 この手弱たをやめ女の
 仇敵かたきは尙なほも
 君きみを討うたむと
 われ行ゆかむす
 柔やましき心こころは
 死し出での言ことの葉は

手てを持もちし
 曾長そながありと
 ひかひなば
 強つよくあれ
 ここの恨うらみ
 君きみがゆく
 待まちつなれば
 死し出での路みち
 持もてあり
 打うちさけば

あはれなるかな
 猛きその身も
 越し方行方
 思ひ續けて
 嵐を凌ぎ
 爲したる事は
 狂へる如き
 思はざりけり
 僅に靡けり
 山蜂の巢の
 誰か思ひ
 頻りにはやる
 かくてしなほも

今のはや
 弱りはて
 身の勞れ
 つくど
 岩を裂き
 多加れど
 業をしも
 ドーチイの
 はやもはや
 巢をかけて
 覺るべき
 狩りの犬
 山路を

はりし心も
 露散る草に
 身の危さを
 思ひ廻せば
 危き業を
 今日今この
 終りどこそは
 城の櫓の
 この山國の
 かく聚りに
 今はわが身を
 余を狩らむと
 さまよひ行かば

たゆみはて
 打臥して
 身一人に
 さまよひの
 幾度もか
 綾もあき
 なすべけれ
 旗のかけ
 國かけて
 あつまるど
 討ち取れど
 あせる敵
 いたづらに

余の晴さむ
 思へば憎き
 あだしかざしは
 必ず晴らさむ
 いかなる故の
 さりさりながら
 必ず剛き
 斯くと心に
 敵の守りし
 路なき森を
 踏み越え打ち越え
 空しく道を
 今朝よりものゝ

此の恨み
 ロデリックの
 われ持たド
 この恨み
 聲なるぞ
 なかくに
 敵なりと
 契りつゝ
 繁ければ
 踏み分けつ
 ゆきくつ
 返しつゝ
 あらざれば

このいたはしき
 血にし染めざる
 弓矢八幡
 あな遠方に
 狩の兵者
 死を極めたる
 思ひ知らさむ
 もと来し路は
 行きもえかねて
 道にしあらぬ
 又道なきに
 たどりくつて
 いやまし勞れの

髻を
 夫れまでは
 神かけて
 ひく音は
 進むかや
 此小男鹿
 もの共に
 なかくに
 ヒッゼームス
 岩根をば
 ゆき戻り
 急げども
 身に浸みて

唯狩り立つる
直ちに弓を
忍びよりたる
誰かためらふ
鹿を狩るごと
狐の如く
偽りあせそ
何にか偽る
いで呼びてこよ
よべや二人りも
つとめて必ず
敵なりてふ
汝に見せあむ

獸にはは
ひきもせず
狐をば
ものあらむ。
誰かせむ。
屠るらむ。
間諜とや。
事をせむ。
ロデリックを。
はた三人り。
ものどもを
余か言の
示すべし。」

直ちに犬を
雲時免るして
隙に落すに
忍びよりたる
敵の間諜と
汝を問課と
汝を問課と
余の仇敵ぞ
我はと思ふ
今宵一夜を
余が此太刀に
偽りならぬ
「ほだの光りに

かけさせず
遁すとも
殺さむに
敵をば
きくからは
今此處に
誰か云ひむ。
敵にこそ。
兵者も
かく置けよ。
貫きき
證をば
見返れば

劍おつとり
何しに来つる
この外國の
余の仇敵に
さ夜の嵐も
願ふは雲時
饑へてしあれば
「汝ハロデリックの
扱は味方に
汝は呼ばすや
強ひても云はむ
彼が業をば
「あくまで強き

踊り出で
夫れきかむ。
者にこそ。
圍まれて
いとつらく
休ませよ。
もの玉へ。
味方にや。
あらざるも
云はざるや。
ロデリックを。
助けむと
言葉かな。

「やは何者ぞ
あはれ扣へよ
「汝は何をか
まかも道迷ひ
氷りて寒き
道の案内者を
燃火のかけを
「いなく味方に
敵なりとしは
「いなく余は
彼れのみならず
爲すもの共は
さいさりながら

名をきかむ。
都人。
求むるや。
此わたり。
此の袂。
かし玉へ。
ゆるされよ。
余あらじ。
強ちに
仇敵ぞと
誰もあれ
皆敵ぞ。
男鹿ぞと

汝は誠に
是れをし見ても
今更なるき
あはれ敷けかし
いで兵者の
此かてを
「げに〜まかり
いで兵者の
互に分む
このかてを」
大将の太刀をば
かのロデリックの
佩きしかな。
仇敵とは
いひなせそ。
床かさむ。
このかてを」

その三十一

乾し固めたる
傍の柴を
分けてかたしく
人のとひたる
語る心も
外國人よ
鹿の肉
折りくすべ
一つつ床
氣色かあ
面白や
聴ねかし
げに山國の
編の毛衣
迎へる様は
彼方此方と
あはれ兵者
あのロデリックの
招待や
片袖を
珍らしき
いたはりて
勇ましや
み爲めには

生れながらの
ロデリック公に
聴もえすてぬ
戦の庭の
神の御言も
余が心の
余れ若し吹かば
數多の人に
さへ無く逆も
劍互に
己が心の
黨の爲めにし
直くなりといふ
臣にして
さからひし
我が祭に
血祭に
傳ふなり
儘なれば
この角を
圍まれば
かく斗り
抜き持ちて
儘にこそ
一筋の
誠にと
言をしきけば
まかのみならず
屠ば戦に
わが此笛を
余が此笛の
一聲吹かば
こゝに討れむ
疲れ果てたる
こゝに勝負を
さはさりながら
家の爲めをば
矢竹心の
黨あれば
何にまれば
汝をば
勝つといふ
吹く事も
一は
君こそは
汝が命
君あれば
命せむと
よしやわが
思ふとて
武士の

かく語りつゝ、
縞の毛衣
友寐に馴れし
げに面白の
一夜玄づけき
山の端匂ふ
げに面白き

武士は
かたしきて
兄弟と
武夫や
水の聲
朝日の影
気色かあ

傍のおどろ
げに勇ましや
思ふ斗りに
結ぶ夢路も
鶏の八聲に
谷の小川に

塵を拂ひ
敵をち
枕なめ
風絶えて
驚けば
立つ煙り

道にいかでか
余が此太刀に
之に過ぎたる
言葉をきけば
夢も仇にな
かくてぞ此所に
木の根岩かき
此アルピンの
余れ案内して
汝が劍こそ
君がけなげに
天つみ空の
「扱眠れかし

背くべき
懸む事
耻あらト
いたはしや
さくべきそ
眠りてや
うち越えて
郷はづれ
参らせむ
守るらめ
賜りし
隈もなく
今こそは

疲れし人を
世に武士と
將た外國の
夫れが求むる
今宵一夜は
山の端白く
森を林を
コイラントグの
そこより後は
「げにや嬉しき
心のほを
又歡びて
驚も眠りを

むぎくど
云る、身の
人といふ
もの事を
一つ床
なりもせば
分けく
砦まで
汝が劍
志し
自らはも
受侍らむ
うたふなり」

第五章

その一

おぼろの下の
寝もせで明る
おもて白くも
岩に砕ける
ついでをりなす
錦に移つる
清く濁らぬ
憂き瀬ときけば
玄のぎを削る
直なりといふ

石の床
枕の邊に
明そめて
瀧つ瀬の
山路の
初日子の
武士の
余ど入りの
太刀風の
梓弓の

ちがやの袖の
行惱みたる
笑めるが如き
波の上には
このもかのもの
光りや胸に
矢竹心の
岩根と見れば
烈しくすすぶ
弓弦にかけて

草の薙
旅人の
朝ぼらけ
玉と散り
緑葉は
宿るらむ
止み難く
われと裂き
中にすら
義を守り

その二

しば鳴く鳥の
輝く影に
草の寢床を
緩鬩つらく
短き祈り
常のあさげを
とも爲しては
身に打懸て
緑の森を

聲に連れ
驚き出て
起き出で
曉の
爲し果てつ
なさむとて
山人は
立あがり
踏み分けて

林を洩る
二人の武士
風にたよふ
天を見上げて
味も香もなき
消し焚火を
色あやどりし
よべの契を
岩角越えて

初日子の
諸共
ひら雲の
どもく
武士の
燃すなり
上着をば
あだにせず
山路を

誠を盡す
げにや朝日の

清き影は
清き影

仰ぐも高き

朝日影

澤湖若緑焼上霞は峯湖尾下
 邊の枝の石着ものつかまたに上
 山邊の森に敷の多と見ゆるられ
 邊をにににの多と見ゆるられ

色似濃重姫支寄細連浪來岡
 色は似たりけり。濃く薄く。重
 色は似たりけり。濃く薄く。重

此柳水お彼緑唯百人敵落路路
 此所に彼所に。柳の系の深く。水
 此所に彼所に。柳の系の深く。水

路經静生隔間包いと雲石レヘ聳
 路經静生隔間包いと雲石レヘ聳
 路經静生隔間包いと雲石レヘ聳

他にげげ亂險我猶ス此見う
 他にたげげ亂險我猶ス此見う
 他にたげげ亂險我猶ス此見う

その三

もた清八折かく道高谷果行
 もた清八折かく道高谷果行
 もた清八折かく道高谷果行

眼玉分手景お雲絶フげ
 眼玉分手景お雲絶フげ
 眼玉分手景お雲絶フげ

涙白散攀成生見未タその
 涙白散攀成生見未タその
 涙白散攀成生見未タその

さきつ時にし
 迷ひ入りにし
 峯吹く風の
 戦に出でし
 道えるべせし
 今はた思へば
 「さはさりながら
 「汝も武士に
 我に問はるゝ
 車の轍を
 踏ゆくものに
 時もあだには
 逃れし狩犬

ゆくりなく
 其時
 音もなく
 事なれば
 山人が
 偽りの
 何故に
 ありながら
 事やある
 ゆくがごと
 あるべしや
 過さすと
 尋ねらむ

鹿を逐ひつゝ
 山邊の霧も
 所の酋長は
 さは速かに
 我に向ひて
 敵のたくみに
 再び此所へ
 事の珍らしく
 世の武士の
 常に定まる
 世治りて
 思ふばかりに
 又彼の山の

此處わたり
 眠るまで
 いと遠く
 歸らとど
 語りしも
 ありしよな
 來れるや
 今更に
 行ひは
 道をのみ
 事もなき
 逃し鷹
 少女子が

清水の早瀬
 さばかり路の
 静に路の
 「如何なる事に
 我と求めて
 關の割符の
 夫も持たなく

湧き返り
 けばしきに
 あぎとをば
 かゝつらひ
 來りけむ
 あらざれば
 只ひとり
 四
 山人よ
 切り抜けむ
 はトめより
 寄らざりき

積る小石も
 えるべの武士も
 導きながら
 かゝる山路を
 ロデリック公の
 通る人は
 迷ひ入りては
 すはとし云はば
 割符は帯びて
 それが助けを
 長くもあらぬ

堆たか
 たどくと
 問ひけらく
 態々も
 渡したる
 稀なるに
 來りけむ
 取れ出で
 腰にあり
 受けむとは
 三日餘り

こぼす笑歴の
心ひかれて
事の無しども
さすりし腕を

その五

ゆかしさに
なかくに
思はれず
その儘に

路危しど
斯る所に
いかで我々
あだに扣へて

聴むには
迷ひ來る
武士が
止みなむや

「汝が心は

いはであれ

我もあながちに

問はざらむ

さはさりながら

汝がそも

茲に來れる

路すがら

アルピン黨を

うたむとて

マールの侯が

昨日今日

軍をあげて

此國に

攻めて來らむ

噂をば

汝はさしや

聞かざるか

「夢さる事は

聞かざりし

皇帝の

ゼームスの

狩の遊びを

守らむと

兵卒共の

あつまりし

噂ばかりは

聴たりま

さはさりながら

茲に斯く

此山國の

者共の

斯く集ると

聴ならば

只徒らに

かゝりたる

彼のドーチーの

城の旗

どり出だされて

此の國の

深山おろしに

ひらくと

翻へされむ

その事は

余今更に

疑はト

「ひるがへされよ

吹く風に

彼れらが絹の

旗々々の

唯徒らに

たゝまれて

むざくしみの

餌としも

成るてふ事は

われくも

心地よからず

思ふなり

松を畫ける

アルピンの

黨の旗の手

大空に

翻へるがごと

勇ましき

翻へされよ

ふく風に

外國人よ

さりながら

君が鹿をば

逐むとて

ゆくりもあらず

來りしに

なぞアルピンの

一黨は

共に天をば

戴かぬ

仇なりとは

云はるゝや

「そはいはれあり

武士よ

汝が會長なる
無慘の太刀に
法の庭より
此所に住むてふ
絶えて知らずに
誠を守る
たとひ命は

ロ德里クは
あへなくも
逐れ來て
事よりは
ありしかど
武士の
捨つるとも

大内山に
人を斬りたる
斯る野武士の
他の事をば
唯此の事の
心に敵と
討ち盡くさむと

ありし時
科により
會長となり
昨日まで
譯にても
せざらむや
余は思ふ

聽くに忍びぬ
腹立しげに
暫時歩を
「まか云はるれど

濡れ衣を
うち見やり
止めつゝ
ロ德里クが

身に懸けられて
睨める眼
言葉せはしく
劍に手をば

山人は
凄じく
呼びかけぬ
かけたりし

其いはれをば
いやなき業を
汝はきゝてか
己の耻を
天津御神も
道に背きし
國の政を
纒に人の
罪を糺さむ
スターの城の
光を仰ぐ
國の掟も
人を斬りたる

きゝたりや
こらさむと
聽たりや
雪ぎたる
知るならめ
行ひぞ
預かりし
心をば
よしもなく
奥深く
人もなく
亂れはて
ロ德里クを

武士の面を
太刀を抜きたる
罪ある人を
清き心の
「如何にいふとも
さはさりながら
アルバニ侯は
繫ぐばかりに
皇子なる人は
閉籠られて
また勢も
天皇の前を
答むる人も

汚したる
心をば
うち殺し
中こそは
その事は
その折りに
力なく
ありければ
幼くして
在りしかば
あらざれば
憚からず
なかりけり

かの豊なる
余らゴールの
外國人の
思へば惜しや
強ひて土地をば
何處の奥に
谷又谷の
おぼろの床に
肥し牡牛を
山は答へて
汝にもまた
われ山々は
余が情は

野邊々々も
人々々が
慈悲なく
われくの
奪ひたり
住む事ぞ
奥深く
眠るなり
求むるも
いふならむ
太刀劍
懐を
これのみぞ

此わはれなる
神より受けし
太刀抜き連れて
遠つ祖をば
思へばわはれ
山又山の
雲を袂に
今余が踏める
甘き麥をば
汝の祖の
楯こそ今も
汝の宿に
その餘の事は

谷々も
ものなるを
寄せ來たり
逐ひ拂らひ
われくは
末遠く
かた敷きて
荒山に
求むるも
ありしごと
あるならめ
恵みたり
汝らが

扱今汝が
いはれもあらぬ
荒れに荒れにし
時を得顔に
必ず卑しと

その七

君といふ
軍もて
郷々々の
世に立つを
思ふらむ

盗人もの
罪なき人を
小屋の家畜を
清き汝の

ロテリックは
うち屠り
かすめつ
心に

斯くと聴くより
睨みつめしが
「外國人よ
谷のかけ橋
絶え續く
悦ばしげに

武士は
懸てまた
さはいへど
隔てつ
遠近の
打ち笑みし

凄き眼に
卑しむがごと
彼所の山を
森の木かげに
野原牧場を
汝が心を

暫らくは
うち笑ふ
過ぎし時
遮ぎられ
見渡して
聴まほし

劍に懸けて
 山は答へて
 斯る怪しき
 年月暮す
 力の限り
 再度取りも
 荒さむ事を
 夢な忘れそ
 一穂なりとも
 八十の野飼の
 川原にまよふ
 神よりうけし
 取りも返さず
 取らむのみ
 いふならむ
 住居して
 ものなれば
 踏み散らし
 返さむと
 思はざる
 必すや
 稲穂をば
 獣あらば
 影あらば
 このゴール
 おくべきか
 山はいかにも
 北のはてなる
 くやしき涙に
 我が取りし
 わが奪はれし
 山を下りて
 者は絶てし
 サクソンといふ
 あたりの野邊に
 一つなりとも
 野にし川にし
 力の限り
 事の善悪
 わらざらむ
 者をどもが
 刈るを見ば
 遠近の
 此の國を
 飽までも
 わけて見ば
 えせとぞ
 山里に
 ひせびつゝ
 奴原を
 寶をば
 彼の里を

よしや此所なる
 里のわたりの
 そはなかくに
 わがロテリクを
 外の事もて
 「志かいふからは
 かのロテリクを
 君思ひてや
 隠くして余を
 此の身をむざく
 供へむと思ふ
 山國の
 城を野を
 いはれあり
 懲らさんと
 責められよ」
 八
 君はそも
 討つ事の
 思ひてか
 待つ事を
 うち取りて
 心根も
 酋長なる人が
 踏散らす事
 いかでよしなき
 汝若し思ふ
 よしや幾度
 故よし絶えて
 兵士あまた
 君云ひるゝや
 軍の門出の
 又罪なしと
 此處彼處
 あればとて
 業ならむ
 心あらば
 尋ぬども
 あらとぞ
 行く路に
 罪なしと
 血祭り
 云ひるゝや」

「汝が云ふ如く
見むと思ひて
包むよそめも
忍びて來つる
人のまゐるしに
よしをも告す
軍の犠牲に
君しか云へば
事こそ澤山に
君の心を
よしなき事は
迎もかくても
互にまのぎを

鷹と犬
來しあらば
あらざるを
缺こそ
あはざるらめ
あかさすに
備へむと
さてもあれ
あるなれど
傷ましめ
今更に
余れこそは
削るなる

又の山家の
行も歸るも
人も通はぬ
ゆゑしき敵の
さは云へ余は
君をやみく
する心根は
なほロテリッを
今は云はずに
君が眉根を
語るもやうなき
ほこりがほなる
過世は遂に

少女子を
今更に
問道をも
問課てふ
強ちに
打取りて
更になし
糺したき
止みてあらむ
ひそましむる
事ならむ
此の人と
のがれざれ。

アルピン黨の
事も思はで
はるゝ來り
君は返さむ
怨も深き
余が心根の
河邊の霜を
冬の夜寒を

その九

住む谷を
踏しかど
梓弓
術や知る
武士と
嬉しさは
ふみわけて
餘所にして

二度まで余は
又も返へして
矢を引きわけて
修羅の巷に
鎧をけづる
たどへむかたも
ゆかしき妹の
語る夕に

隱便かに
此郷に
射む時は
馳せ向ひ
其時鳥
なく千鳥
窓深く
勝るらむ。

「かく勇しき
かへす矢のみか
それ」

言の葉を
いたつきも
口笛を

聞く上からは
君が爲には
一聲高く

今此處に
はづすべし
吹きければ

はどりの山の
 鶴の鳴こど
 傳へゆくなり
 槍も兜も
 見上る山の
 満に満ちたり
 思す出る
 朝日に光る
 わはれ一聲
 早くも谷を
 天つ御空に
 皆諸共に
 見つゝ静に
 草叢に
 凄トく
 其合圖
 數知れず
 峯高く
 兵卒は
 槍ぶすま
 劍太刀
 口笛に
 かためしは
 軍をば
 言葉なく
 立ちたるは
 應どばかりに
 山より山を
 張りたる儘の
 立連ねたる
 見下す谷の
 あはや千引の
 嵐に靡く
 いと凄じく
 鎧かためし
 此處の山より
 捧ぐと見ゆる
 會長の眼遣ひ
 崩れかゝりし
 答へして
 飛び渡り
 たつか弓
 右左
 底深く
 岩影に
 旗トるし
 見えにけり
 五百人の
 湧き出でゝ
 其けしき
 如何にやと
 岩々々の

そよどばかりの
 碎けむとする
 勇める足を
 突も掛らむ
 道しるべせし
 をかしき方を
 汝は何と
 げに名にしおふ
 斯く云ふ余は
 その
 十
 響きに
 如くなり
 踏あらし
 けしきにて
 武士は
 うち眺め
 思ふらむ
 アルピンの
 ロテリック
 ヒツゼームス
 あらざれど
 忽ち逆に
 槍の穂先を
 すはとし云ハ
 山の此方に
 ほこりがほにも
 ヒツゼームスを
 こゝに集へる
 兵卒もぞ
 夢々驚く
 心の中心
 ひるまぬ色を
 落し來て
 並め連らね
 蕪地
 待ちかけぬ
 レシ山の
 見返りて
 者共は
 能く見よや
 事なかれ
 装ひて
 玄かすがに

「夢 驚きなき夢の
よし我黨の

備し 心を 今更
を 玉地し に

君見 余が云ふまで
迎も 程に

返す ありざれど
す

地より出し
兜の羽に
あはれ淋しき
唯徒らに
あかねさす日の
淋しき森の

兵卒も
さしもの
山影の
返すのみ
光りさへ
青葉をば

又もや地に
吹にし風も
荆棘蕨の
鎧に太刀に
またく隙に
空しく照す

人りにけむ
今ははや
袂をば
輝きま
水枝さす
ばかりなり。

その十一

此方もきつと
流石に彼も
岩を後の
「よれや諸人
余は動かじ
人の言葉に
彼方につとふ
余らが太刀に
歡ぶ心の
聽てロデリク
いばらの袂
張りたる弓も
静りかへる

ロ德里クを
武士の
楯に取
一寄に
一歩も
ロ德里クは
兵卒も
かくるとも
ほに出で
手を振れば
岩の袖
太刀槍も
山のうへ

にらみ返して
露もひるまぬ
しかど足をば
此岩裂けて
敵ながらも
うち驚きて
あはれめでたき
耻かしからぬ
言葉もわらず
兵士共は
立ちたる人は
皆諸共に
靡くは草の

劍太刀
其心
踏しめて
飛ぶまでは
ひるまざる
見る此方
武士や
敵なりと
立ちけるが
身をひそめ
見えすなり
消えうせて
袂のみ

思ふばかりの
斯く云ひ捨て
ヒツゼームスも
矢竹心の
先に立ちつゝ
越し方行方
人里遠き
さげしみやりし
忍び隠るゝ
心の中は
地に消えにし
あたり密に
劍隙なく

戯れぞ
また二人
劍太刀
一筋に
ロテリッ
見渡せど
山の
崖路をば
兵卒の
眺むれば
連らなりて

外によしある
いざとて道を
腰にさすがは
強くは云ひも
分けゆく後に
草より外に
今も今とて
合圖を待てる
辿りし時は
勇めど常に
影や見ゆるど
猶敷の影
余を窺ふ

業ならじ
進みたり
武士の
放ちしが
従ひて
影もなく
盗人ど
兵卒も
ひら肝の
似ざるらむ
忍び目に
岩の裾
気色見え

恐れ疑ふ
余が客人に
案内せむてふ
いかでかあたに
思へばにくき
國をば數多
起りし事にし
只一人なる
只一人をば
されば客人
今しも爲し
渡せる札を
思ひ込みたる

事なかれ
おはすなれ
言の葉は
破らむや
サクソンの
取られしも
あればとて
兵者を
討むとて
いざ共に
振舞は
持すども
山の井の

兎にも角にも
コイラントグの
君に慥かに
よしやゴールの
無理非道なる
彼ど我どの
怨みふかく
よしや手強き
黨の劍を
又うち連れて
此所の道をば
行くには難き
浅き心を

君こそは
皆ま
誓ひたり
われくが
人の手に
凌ぎより
あればとて
者逆も
借るべきや
進まなむ
ロテリッ
事なしと
こらさむと

いと凄じく
 ホハストルてふ
 影を浸して
 云はれし羅馬の
 砦の跡と
 見る影もなき
 苔の下なる
 瀧津早瀬の
 持てる楯をも
 ヒツゼームスに
 誓ひし言葉を
 人殺してふ
 誠なしてふ

岩をかみ
 大沼の
 ながるなり
 兵者が
 聞ゆれど
 岩垣を
 武士の
 音高し
 上着をも
 うち向ひ
 仇にせず
 武士が

野を貫きて
 堤にすがる
 昔世界の
 かつて旗をば
 今は大方
 唯徒らに
 骨を洗ひて
 足を扣えて
 草葉の上に
 「げに膽太き
 余も誠は
 道知らぬてふ
 黨の會長ある

末遠く
 青柳の
 大君と
 建てたりし
 崩れはて
 うち返して
 う流れ行く
 ロデリックは
 投げ捨て
 サクソンよ
 盡くしたり
 弓取りが
 ロデリックが

友呼ぶ鳥の
 聴かどばかり
 後になせし
 是よりたどり
 草より出で
 兵卒共を
 絶えてなければ

その 十二

鳴音にも
 思はれて
 時までは
 ゆく道は
 草に入る
 かくすべき
 ヒツゼームス

またや合圖の
 ありし山路を
 安き心地も
 廣き緑りの
 日影隈なく
 草のまげみも
 初めて心や

口笛を
 いと遠く
 なかりけり
 野邊にして
 照り渡り
 岩かげも
 晴るらむ

アルピンの會長
 たぎて流る
 彼處のカトリン
 流れく

ロデリックは
 早川の
 此所のアクレ
 行末は

言葉もなく
 岸の邊りに
 またベンナハの
 此處に來りて

先に立ち
 着にけり
 湖の水
 白波の

手に引連れし
打越えく
導き連れて
共に劍を
恨の刃
君と同じく
君も帯たり
君に勝したる
茲は兼ても
余も契りは
今は汝が
契りし時に

兵者の
道遠く
來りたり
打ち交し
受く可きぞ
余もまた
余もまた
鎧をも
契りたる
守りにき
劍もにて
成りにけり

かためくし
君を守りて
今は互に
此處に汝は
のうサソソ
助を頼む
腰に着けたる
身の護をも
コイラントグの
汝も守れよ
汝自ら

境をば
此所までも
打向ひ
ロデリックが
今人は唯
人あらず
劍太刀
持ぬなり
砦なり
其契り
守らむと

その十三

敵に戦を
否夫れのみか
斬らでや置む
世にも目出度き
ヒツゼームスが
惠の露も
なほ勝りたる
唐紅の
あらはす術は
いな外國の
余が云ふ事を

挑まれて
ロデリックよ
汝か首
武士の
昨日今日
いと滋し
むくいをば
血にあらで
あらざるか
武士よ
いでや聴け

後ろを見する
余が劍をは
さはさりながら
心の底の
君の情を
君と劍を
返さまほしき
二人が赤き
いでロデリック殿
いかでか外に
汝がおくれたる

余ならず
振りかざし
呉竹の
ゆかしさよ
うけたりし
合はすより
我心を
心にば
いかにぞや
すべあらむ
心をば

余勵^{われ}まして
汝^きが劍^{つるぎ}に
一人^{ひとり}なりとも
取りたる方^{かた}は
神^{かみ}の教^{をしへ}の
ヒツビームスは
玄^{くろ}のぎを茲^{こゝ}に
神^{かみ}の教^{をしへ}は
彼處^{かこ}の崖^{がけ}の
そこにムルドク
神^{かみ}の教^{をしへ}も
いでやロデリク
益^{やく}なき業^{わざ}の
えさせむず。
かゝるなり。
敵^{てき}方^{かた}の
此^{こゝ}度^{たび}の
ありしとぞ
かくとき、
削^{けつ}らむは
既^{すで}に早^{はや}
麓^{ふもと}なる
あへなくも
斯^かくあれば
千^ち早^{はや}振^ふる
思^{おも}ひ止^{とど}り
げにサクソンの
そを何故^{なにゆゑ}と
人^{ひと}の命^{いのち}を
戦^{いくさ}に必^{かなら}ず
山^{やま}の法師^{ほうし}は
「扱^{さて}は今^{いま}更^{さら}
最^も早^{はや}益^{やく}なき
余^わが勝^{かつ}事を
藪^{やぶ}の茂^しげみを
うち殺^{ころ}されて
よしや余^われに
神^{かみ}の教^{をしへ}に
スターの城^{しろ}に
運^{えん}命^{めい}も
云^いはむには
いち早^{はや}く
勝^かつべしと
告^つげにける。」
汝^きと余^われと
事^{こと}ならむ。
知^しらせたり。
探^{さぐ}り見^みよ
あるならむ。
降^{くだ}らぬとも
從^{したが}ひて
えろしめす

ゼームス王^{きみ}の
神^{かみ}の教^{をしへ}は
ゼームス王^{きみ}を
若^{もし}又^{また}君^{きみ}が
君^{きみ}を許^{ゆる}さぬ
汝^きを恙^{つが}なく
若^{もし}も汝^きが
今^{いま}ある如^{ごと}き
うけし惠^{めぐみ}に
その十四
處^{ところ}へど
ありながら
敵^{てき}として
行^ゆく逆^{さか}も
事^{こと}あらば
故^{ふる}郷^{きょう}の
歸^{かへ}り來^きて
有^{あり}様^{さま}に
酬^{むく}ひなむ。」
是^{これ}より二人^{ふたり}
汝^きは尙^{なほ}も
弓^{ゆみ}を引^{ひか}むと
天^{あま}皇^{みかど}の心^{こころ}
弓^{ゆみ}矢^や八^{はち}幡^{まん}
こゝの砦^{とりで}に
再^{また}び弓^{ゆみ}を
汝^きが備^{そなへ}を
急^{いそ}がなむ。
從^{したが}がはす
思^{おも}へるか。
解^とかずして
神^{かみ}かけて
送^{たく}るべし。
引^ひくならば
立^たてさせて
急^{いそ}がなむ。
從^{したが}がはす
思^{おも}へるか。
解^とかずして
神^{かみ}かけて
送^{たく}るべし。
引^ひくならば
立^たてさせて
數^{かず}ならぬ。
勝^かちたりと

「そは云^いわれなき
はした者をば
言^{こと}葉^はかな。
指^さし殺^{ころ}し
ムルドク如^{ごと}き
はやロデリクに
言^{こと}葉^はかな。
指^さし殺^{ころ}し

又または句はへる
 かつぐを武士ぶしの
 太刀たちは佩はども
 今いましも余われは
 其そのの言葉ことばに
 腰こしなる太刀たちも
 我わが身み代がりに
 この髻もじりを
 堅かたく誓ちかひし
 余われより望のぞむ
 思おもひし事ことも
 惜しみし事ことも
 武士ぶしの禮らいをは

姫ひめ皇子みこの
 上うへもなき
 武ぶ士しの
 悟さとりけれ
 今いまははや
 踊おどるなり
 立たちたりし
 ロ德里ロ德里ククの
 我われなれば
 處ところなり
 止やみにけり
 甲斐かひぞなき
 君きみひとり

緑みどりの髪かみの
 譽ほまれと思おもふ
 魂たましひもたぬ
 「こは有ありがたし
 わが此この心こころ
 昨日きのう山やまにて
 少女せうにょが臨終りんしゅうに
 血ちをもて染そむと
 汝きみと劔つるぎを
 事ことを静しづかに
 わたら武士ぶし
 さはざりながら
 盡つくしたりとな

組くみ紐ひもを
 類たぐひにや
 人ひととこそ
 ロ德里ロ德里クク殿どの
 もえ立ちて
 ゆくりなく
 残のこしたる
 其その折をりに
 交まじへむは
 計はからむと
 殺ころさむと
 ロ德里ロ德里クク殿どの
 思おもひれそ

思おもへる如ごとき
 臣たみの禮らいをば
 心こころの底そこも
 よしや御神みかみの
 従したがふべくも
 いかでか余われは
 恨うらみのほむら
 燃もゆる薪たきぎを
 わか家の子この
 かばかりいふも
 君きみを天晴あつぱれ
 我わが心こころある
 扱さそも汝いましひ

心こころ地ちして
 取とらさむと
 はかられて
 教をしへとて
 あらざるを
 従したがはむ
 消けしもせで
 添そへてけり
 恨うらみをも
 君きみひなほ
 武ぶ士しと
 あしらひを
 怯おそれたる

サクソンの王きみの
 余われを強しふるは
 いとあさましき
 余わが此この太刀たちに
 況ましてや人ひとの
 玄まかのみならず
 汝きみが仕業しわざは
 君きみが及およびに
 返かへさで餘所よそに
 覺悟かくご極きめずや
 思おもひし事ことの
 盡つくし、事ことも
 腰拔こしぬ武士ぶしの

御前みまへにて
 浅あさ川がはの
 事ことにこそ
 ためさでは
 言ことの葉はに
 我わが胸むねの
 なかくに
 仆たふれたる
 見みるべきや
 極きめざるや
 悔くしさを
 甲斐かひぞなき
 輩ともがらか

楯に馴れたる
身の災禍を
其堅かりし
威し、太刀を
彼の楯をば
其身を守る
楯てふものは
唯一振の
遣ひ馴れたる
防ぐと見せて
引けば防ぎつ

ロ德里ッは
招きたり。
かねの板
幾度か
捨てければ
よしもなし。
持たざれば
劔太刀
事なれば
うち込つ
護りつ

楯を捨たる
其強かりし
汝が空蟬の
支へし事の
強き力も
ヒッゼームス
楯なしとて
討つにも遣ひ
ひくと見せて
進めば斬りつ
秘術の限り

ばかりにて
牛の皮
命をば
ありけるに
今更に
兼てより
何かあらむ。
防ぐにも
かびきよせ
うち込つ
盡したる。

その十五

われ口笛を
出で来る味方の
吹きも鳴さむ
音だにあらば
さは云へだし
夢な恐れそ
決闘こそ
玉散る太刀を
流石に猛き
残り惜しげに
歸らぬ水の
聴て互に

吹く迎も
兵卒は
その時は
われもまた
力をば
疑ひそ。
なすべけれ。
抜き放ち
大丈夫も
おのもく
早瀬をば
進み寄り

草葉の露を
絶てなければ
よしや響は
汝を苦しむ
頼むべしやは
二人互に
すはといふより
鞘を傍へに
今を限りど
果てなき空を
暫時眺めて
合す霜鋒

踏分けて
此の笛を
低くとも
ものぞある。
余もまた。
差し向ひ
諸共
なげ捨て、
思ふらむ
うち見上げ
ありけるが
散る火花

わはれなる哉
太刀の術には
辛くも防ぎ
其度毎に
たぎて流るゝ
唐紅に
今を限り
降りまきりたる
此方は猶も
露も亂れぬ
刃を巧みに
刃を礎と
事の見事に

ロ德里ッは
劣りたり。
支ふのみ。
サクソンの
その血潮
染めなせば
思ひけむ
雨のごと
動きなき
太刀の筋
切り拂ひ
打ち落とし
仕たり。

力遙かに
鋭く敵の
三度手許に
劔に血をば
あはれロ德里ッの
流石に猛き
吹木枯に
頻に太刀を
千引の岩の
荒びく
隙を計りて
さしも誇れる

勝れども
討つ太刀を
切り込め
注ぎたり。
衣手を
あらくれ男
誘はれて
うち込ば
如くに
なだれうつ
ロ德里ッの
ゴールをば

その十六

「今しも汝は
わが刃をば
「汝が嚇すども
命惜しみて
汚き余に
網を破りて
猛けり狂へる
余が身の創を
めがけてむづと
汝が身體を
よしや三重あす

從ふや。
汝が胸の
惜しむども
むぎくど
あらぬなり。
出るごと
虎のごと
かへり見ず
組つきたり。
握みしは
鐵の

さもあらざれば
赤き血潮に
いかでか汝に
汝が言葉に
檻に取られし
或は我子を
深手浅手も
ヒツゼームスの
あな危きかち
少女の手にし
鎧に堅く

神かけて
染むべきぞ。
從はむ。
任すべき
狼の
取られじと
數知らぬ
咽喉もどを
ヒツゼームス
あらざれば
包むども

汝が身をば
互に組しき
力勝れし
喉頭むづと
亂れし髪を
手もてまばく
わはや裂むと
つく息さへも
眼も闇み
狙はそれて
草の根ざしを
弱りに弱る
危かりける

砕くらむ。
組まかれ
ロデリックは
ひつつかみ
掻き拂ひ
うち拭ひ
爲したるが
迫りゆき
見え分かす
徒らに
貫きぬ。
ロデリックの
鋒刃を

互に睨と
暫時揉みてぞ
ヒツゼームスを
膝もて胸を
血汐に霞む
懐劍
血汐いよく
はや魂も
流石に突は
胸にはあらぬ
組敷れたる
握し手をば
辛くも逃れて

引き寄て
ありけるが
組敷て
押へつゝ
眼をば
拔持て
湧出でゝ
定まらず
突きたれど
あだし野の
敵もいま
振はせき
立ち上り

吐く溜息も

かずかあり。

その十七

死をさはめたる
辛く命を
天に向ひて
いよく細る
方をば暫時
流るゝ血潮に
わはれいとほしき
思のまゝに
刃の露と
其かむばしき

敵の手を
拾ひしは
伏し拜み
玉の緒の
うちまもり
浸しつゝ
亡魂よ。
晴したり。
散りぬるも
身の譽れ

遁るゝよしも
神の助けと
枯野の草に
今や絶えなむ
ありし少女の
「わはれ果敢なき
汝が恨は
汝が敵なる
花は櫻木
千代に傳へて

なかりしに
ヒツゼームス
鳴虫の
ロデリックの
髻を
少女よ。
今茲に
ロデリックは
人の武士
残るらむ。」

「さばかり驚く
 共に駒を
 傷を懇に
 驛馬を雇ひ
 スターの城に
 清き衣を
 日もはや高く
 式に臨まむ
 余が乗る駒は
 またく隙に
 汝等二人は

その十八

事やある。
 下り立ちて
 いたはれや。
 うち乗せて
 疾く早く。
 求めむと
 昇るなり。
 備へをば
 勝れたる
 過ぎ行む。
 余が駒に

いでハーバート
 其處に仆れし
 多くの代を
 引き連れ來れ
 余は新たに
 汝に先立ち
 正午に行ふ
 はやも爲さむと
 ハーヤードなれば
 いでツーホックス
 續きて共に

ルーツスは
 武士のの
 取らせむに
 武士を
 駒を求め
 急がなむ。
 弓祭の
 思ふあり。
 此野邊も
 ハーリイよ
 來れよや。」

かく云ひ捨て、
 首の飾りを
 血にまみれたる
 いざや流れに
 折りしも遠き
 音の遙かに
 見れば狩衣
 此方を指して
 手綱片手に
 手綱ゆるめて
 引き連れてこそ
 君の邊りに
 血にまみれたる

ヒツセームス
 取り外し
 其の額
 清めむと
 彼方より
 聴ゆなり。
 纏ひたる
 來るなり。
 槍を取りに
 諸共
 來りたれ。
 乗り寄せて
 あたりをば

角取り出で、
 頭の頭巾も
 紅に染たる
 やをら渚に
 駒を頻りと
 響はいよく
 四人の家來
 中ある二人は
 残る二人は
 鞍を置きたる
 鞭を加へて
 手綱を駈と
 うち驚きて

吹き鳴らし
 抜き捨て、
 その諸手
 立ちよれば
 駆け立てる
 近づきて
 乗り連れて
 乗る駒の
 手許なる
 黒駒を
 轟し
 扣へしが
 眺めたり。

後あとに續つきし
 ダイダイスの川がはの
 さしさしもに早はやき
 トリトリイも過とぎて
 デデインインスス町まちを
 砦とりての上うへを
 見みえつ隠かくれつ
 蹄ひづめの火ひ花ばな
 掃はらふが如ごとき
 今いまは來きにけり
 波なみを破やぶりて
 右みぎにながめて
 櫓やぐらは雲くもに

供とも人ひとも
 岸きし邊べをば
 川がはの瀬せの
 今いまははや
 後あとにし
 うち越こえて
 行ゆく程ほどに
 散ちすなり
 はやさもて
 フフホホーースス川がは
 うち渡わたり
 行ゆくき行ゆくけば
 聳そびえ立たち

力ちからの限かぎり
 過とぎ行ゆく駒こまの
 水みづも耻はぢらふ
 レレドリドリツツククをも
 旗はたうち靡あびく
 茂しげれる森もりの
 ドドララモモンの野のに
 杉すぎの梢こぎえを
 ナナクトクトタイタイルルを
 濁にごりてゆるく
 シシライライススといふ
 北きたの方かたなる
 家いへ並なみ長ながく

飛とばしゆく
 いと早はやく
 斗たけりなり
 打う過とぎぬ
 ドドーーチチイイの
 木こ隠かくれに
 今いまはや
 木こ枯がらしの
 過とぎ行ゆくけば
 流ながれたる
 大おほ岩いはを
 かためとて
 續つきたる

「立たてや黒くろ駒こま
 目めを輝きらめかし
 馴おれにし人ひとの
 言こと葉はのまゝに
 手てもて鞍くらをば
 鬣たてがみ 輕かるく
 ひらりと駒こまに
 勇いさめる駒こまは
 騎のり手ては鞍くらに
 駒こまは一ひと聲こゑ
 忽たちまち原はらを
 はやも彼かた方たへ
 騎のり手ては猶なほも

いざや立たて
 平ひら首くびを
 聲こゑ音ねをば
 従したがひぬ
 取とりもせず
 押おすへつゝ
 うち乗のりて
 身みを起たし
 おちつきて
 嘶いき
 うち過とぎて
 渉わたりつゝ
 鞭むちをうち

駒こまは勇いさみて
 主あるじの方かたに
 聽きも分わかけたる
 鎧よろいに足あしを
 只ただ左ひだり手てもて
 いとも輕かるげに
 一ひと鞭むち強つよく
 一ひと飛たび高たかく
 又またもや當あつる
 弓ゆみを放はなれし
 渦うず巻まく川がはの
 カカルルホホンン山さんを
 駒こまを頻しきりに

耳みみを立たて
 振ふり向むけて
 けしきにて
 かけもせず
 黒くろ駒こまの
 飛とび上あり
 當あてければ
 踊をれども
 一ひと鞭むちに
 矢やの如ごとく
 早はや瀬せをば
 登のぼるなり
 早はやむれば
 飛とばしゆく

スターの城も

その十九

程近し。

敷石清き
何を心に
續きし供を
「如何にツーパー
よしある人の
岩根の道を
汝の目には
歩行はかたく
翁の影を
汝の知るや

路を今
思ひけむ
見返れば
汝は見ずや
果てなりと
辿りつゝ
見えざるや
運びつゝ
汝も見ざるや
ツーパーよ。」

ヒツゼームス
手綱をきつと
一人の早く
身を破衣に
見えぬる人が
町の方へと
なやむとすれど
其處の山邊を
彼を何處の
「否余が君よ

登りつゝ
引き締めて
馳せ寄りぬ
纏へども
彼所なる
行く影は
玄かすがに
たどり來る
誰なりと
彼の人を

何處の誰と
戦の庭に
駒の口をば
「否とよ汝は
恨を含むと
絶えて外には
此のスコットの
紛ふ方なき
國を逐れし
早や〜駒を
かゝるゆゑし
王も守りを
いで〜行けと

知らねども
山狩りに
取りたりし
過まてり
覺えたり
見ざりけり
森をしも
彼の人は
侯爵の
蹴り立て
余が敵の
固くして
云ひ捨て

思ふに彼は
邊りを去らず
者の果てにや
げに彼の者の
かゝる氣高き
斯く慥かなる
踏む人絶えて
ダグラス家の
伯父なる事は
はや急ぎ行け
茲に來つると
彼のダグラスに
右手の手綱を

さる大將に
従ひて
あるならむ。
眼ざし
その姿
歩もて
あらぬなり。
せームスぞ。
慥しかなり。
九の重に
告げよかし。
備ふべし。
引き締めて

うけてあへなく
 斯くは歎きを
 彼の人々の
 唯わが身のみ
 救はむとする
 心にかゝりし
 御寺に契り
 心に係る
 色も薫りも
 あらき嵐の
 げに惜しかれど
 思はゞ罪や
 捨つるぞ己が

作らむ
 かけし事
 まがつみを
 此の身のみ
 赤心は
 彼のエレ
 来にければ
 雲もなし
 美しくしき
 吹くまゝに
 必すや
 深からむ
 誠實なる

我が身の故に
 思へば此身
 拂はんものは
 されば此身を
 神や必す
 神の御弟子に
 今こそ登れ
 さはさりながら
 蓄の身をば
 散さむ事の
 神は守らせ
 今は我身を
 わはれ櫓よ

人にまで
 浅間しや
 わが命
 うち捨て
 守るらむ
 爲すよしを
 死出の路
 いどほしや
 むざぐど
 口惜しや
 玉はむに
 潔よ
 高樓よ

あはれなる哉
 余が亡き跡を
 思ひ定めて
 はや城近く
 心にかゝる
 思はず出だす
 心に掛りし
 彼のけなげなる
 わはれ勇める

ダグラスは
 細々ど
 九重の
 なる儘に
 うき雲の
 獨り言
 浮雲は
 マルコムは
 ロデリックも

カンバスケニスの
 頼みさこえて
 大内さして
 岩なす路を
 袖にも身にも
 「あはれ思へば
 涙の雨と
 罪なくて見る
 聴て帝の

古寺に
 只一人り
 来にけるが
 登るとて
 迷ひ来て
 昨日今日
 降り出む
 獄屋の月
 怒りをば

駒の頭を

向けなほし
馳せ往きぬ

城の擲手

志ざし

その二十

退手 擲手

その二十一

わけ放ち

堀のかけ橋

ゆらくと

強き手取は
花を散らして
常に好みて
いでや己れも
死出の思ひ出
よしやよりたる
思ひ廻せば
セームス王も
幼かりし
余をば見知り

敵を投げ
突きあはむ。
ましませば
諸共
最期の花
年波に
其の昔し
幾度か
御心に
たまふらむ。

槍に妙なる
かゝるをば
必ず彼處に
城の庭へど
老の力を
余が腕今は
花の盛りの
世にたぐるなき
譽めそやされし

公達
セームス王
ましまさむ。
うち連れて
試さなむ。
弱るども
年頃
手力
其の人と

汝が恐ろまき
帝の御手に
あなあさましき
人うつ斧の
幾度袖に
未だ名もあらぬ
まかはあれども
何に樂しく
げにも花やぎ
綾の旗々
をかしき舞の
弓の祭に
彼處にみゆき

中にこそ
あへなくも
いまはしき
其響き
かゝりけめ。
墳塋も
何事ぞ
うつならむ。
飾りたる
花車
手振り見ゆ。
あるならむ。
ましまさむ。

ダグラス家の
討れし事の
あはれ小山よ
消え行く人の
鐵の家
余身を待か
み寺の鐘の
人の波うつ
人の集り
笛に鼓に
思ひ合せば
セームス王も
勝ぐれし射手は

大丈夫が
ありてしか。
汝こそは
其の露の
首斬臺
余れ待つや。
樂しくも
廣小路
騒ぐかな。
うち連れ
町人の
必ずや
弓を引き

微笑れつゝ、
 武士數多
 皆嬉しげに
 心苦しき
 うまし人等は
 薄くありにし
 いやしき賤の
 心に歎く
 余が身をなして
 別れて來つる
 なつかりし
 思ひ出で、は
 猶夫れよりも

過ぎ玉ふ。
 うまし人
 續きたり。
 面しにて
 大君の
 身の影を
 よろこびを
 者あらむ。
 わきもせず
 會長どもは
 其森を
 なか／＼に
 なか／＼に

帝の駒の
 句ふ姫たち
 なめたる駒の
 騎りたる人も
 光りに連れて
 そゝろ恨みて
 あはれの者と
 黨れの爲めとて
 わかれもせざる
 住も馴れたる
 己が身の在りし
 面白からぬ
 卑きはての

後邊には
 姫ばら
 その中に
 あるならむ。
 自な
 心なき
 なか／＼に
 人質に
 故郷を
 其城を
 其きは
 花車
 ものとしも

うちゆらぎつゝ、
 うま人あまた
 駒の足搔に
 君萬代と
 帝の駒に
 錦の鞍に
 群れ居る少女を
 たわやめぢちは
 面を上げて
 町の男子に
 花の車に
 舞人どもに
 山も崩るゝ

鳴り響き
 引連れて
 地も動き
 祝ふ聲
 つゝきたり。
 身を屈め
 見玉へば
 は、笑みて
 見送りぬ。
 残りあ
 逢ふ毎に
 禮を返し
 計りなる

このスコットの
 静に城を
 道の人波
 君を巖と
 ゼームス王は
 玉の冠り
 身に餘りたる
 恥ぢて色添ふ
 またゼームスは
 會釋をなして
 歡ばしげに
 君萬代と
 わを人草を

大君は
 出で玉へば
 分けゆけば
 契るこゑ
 初めより
 御手に取り
 悦びに
 紅の
 やさしげに
 過ぎゆきつ
 見返りつ
 祝ふ聲
 見返りて

我身を思ひ 歎くらむ。 その二十二

色も千草の 御園生の衣
今しも城の をかしげに
舞人どもは 名も高き
的の邊りは 家の子ら
傍に並ぶ 戴の眉
法師頭巾を 月のの
年もいびよふ 女との
マリソンと呼ぶ 打並び
ムツチもシヨンも 射らずやと

身に纏ひたる 袂連ねて
舞ひすましたり 山曾長フー
護太刀を佩きたる 年波高き
花のかむばせ 弓に名を得し
我と思はむ 角ふき立て

人のむれ 一面に 諸共
坐をしめて 其タツク
美くしき スカセロク
射手あらば スカーレット
いとみたり

手並を見よと えも引かれざる 狙定めて 續けて二の矢
二つに成りて 國王の御手より 帝も同ト 嬉しき涙に 帝はさせる 唯輝きし

その二十三

すまう人

こもくまこを

踏み鳴らし

ダグラスは 梓放つ矢に 射放てば 飛び散りぬ 白金の 歡びに うるみたる けはひなく 鏑矢を

強き力に 望月のごと 的の只中 先に立ちたる 射たる褒美に 鏑矢受くる うちまもりて 眼を上げて さしもの射手も 賜ふのみにて

あらざれば ひきしぼり 射とめつゝ 一の矢は タグラスは 事なれば 給ふやと 見上ぐれど 譽めぬごと 見もやらず

三だん計り
 いにし昔しを
 昔の人は
 人の力は
 やむやと計り
 暫時は鳴りも
 譽むる氣色は
 言葉もなく
 卑しむがごと
 投げて捨たり
 不思議と計り
 その
 外の方に
 覺えたる
 かゝりけり
 劣れりど
 はやす聲
 止まざるに
 絶えてなく
 賜ひたり
 微笑みて
 その黄金が
 ながめしが
 石は鳴りつゝ
 霜なす髪の
 今日此頃は
 うち罵詈りて
 落ちにけり
 翁ととも
 スコットの
 はやしたり
 うつ響
 今もなほ
 袋をば
 ダグラスは
 人中へ
 初めより
 その心

力の限り
 中に勝れて
 いでや來りて
 ダグラス應と
 事の見事に
 天皇は黄金の
 眼は寒き
 唯冷かに
 思ひ出でしが
 日にやつれたる
 何れも力の
 静かにまたも
 空をめぐけて
 組あひて
 唯二人
 組すやと
 踊り出で
 投げ退けつ
 指輪をば
 冬の夜の
 光るのみ
 われどわが
 賤男が
 限りをば
 ダグラスは
 投げければ
 勝負も數多
 勝れるものは
 誇りにく
 ひしと計りに
 またも角力の
 手づから渡し
 こぼるゝ露の
 一言云はむと
 心をからく
 天にもものをば
 盡くして競ふ
 土にうもれし
 限りの線を
 果てにけり
 わらざるや
 ありけるを
 組合ひて
 褒美にと
 玉へども
 しづくごと
 ダグラスは
 おし静め
 なげむとて
 あとべより
 石を取り
 うち越えて

根なし世の人
 誇り顔なる
 あはれと一人
 目には映れど
 知らぬさまをば
 花やぎたりし
 邊りに駒を
 又ダグラスが
 こよあき榮と
 鎧の蔭に
 今は帝を
 清き心を

あさましや
 人々には
 一目だに
 心に
 よそふなり
 世の頃は
 並むるをば
 うたげする
 なし、人
 命をば
 憚りて
 汲む人も

帝のあたり
 昔は侶に
 見る人もなし
 風のまに
 わはれ汚き
 狩りの遊びに
 その身の譽と
 庭に招かれ
 又は軍に
 拾ひし人も
 霜にあやめる
 なき世の様ぞ

取り巻きて
 在りながら
 ダグラスを
 白浪の
 世の様や
 ダグラスの
 なし、人
 行く事を
 ダグラスの
 多かるに
 白菊の
 うたてなる。

さばかり強き
 家の血筋の
 何處ともあく
 霜どうつれる
 目には涙を
 昔政を
 思ひ出して
 彼のダグラスの
 嵐にうたれ
 譽もはやせば
 神かど計り
 さ、やく聲は
 さはいへはかなき

その力
 ものなりと
 きこえたり
 頭をば
 た、えつ、
 取りし時
 語るなり
 都出で、
 やつれても
 若ものは
 あやしみて
 いやまして
 浮草の

彼は必ず
 さ、やく聲は
 老いたる人は
 詠めて夫れど
 我子わが子に
 國に赤心
 又その中に
 さまよう野邊の
 ゆかりは残る
 世に勝れたる
 仰がぬものは
 果ては高くも
 岸を便りて

ダグラスの
 いつとなく
 ダグラスの
 悟りけむ
 ダグラスが
 盡し、を
 おうなども
 草をば
 姿をば
 力なかりけり
 なかりけり
 叫ぶなり
 た、よへる

心も空に
 唯何となく
 天皇はそれと
 逐ひ懸けさせて
 宴の肴に
 是れ彼れ二匹
 嚇せどすかせど
 此時までも
 ラフラとよべる
 並ぶものなき
 斯くど見るより
 狂ひたる
 鎮まりて
 見て取りて
 あはれその
 なさむとて
 えり出だし
 ダグラスの
 ダグラスの
 狩犬は
 逸物と
 堪へかねて
 祭りの庭の
 興も沈みて
 牡鹿を放ち
 牡鹿の肉を
 日頃めでつる
 牡鹿の跡を
 側を遂に
 袖に纏ひて
 あはれスコットの
 世に聞えたる
 颯風のごとく
 人々も
 行く程に
 狩犬に
 打屠り
 逐はしたり
 去りもせず
 去りもせず
 此處わたり
 そのラフラ
 駈け出で、

その二十五

路の半と
 逃ぐる牡鹿に
 牡鹿の首に
 興もあへなく
 怒りに堪へず
 かばかり勝れし
 あはれダグラス
 うまし人等の
 慈悲を汲める
 聴もかねては
 邊り放さず
 花の柱を
 見ゆる頃
 飛び掛り
 かみつぎぬ
 さめたるを
 踊り出で
 狩犬を
 此のあさげ
 嘲も
 言の葉も
 ありしかど
 あはれみし
 いどほしき
 頸の輪に
 天皇の犬を
 強き牙もて
 よまなきもの、
 見つ、天皇の
 ラフラを掛
 無惨の筈に
 天皇のつらき
 昔を知れる
 勇む心には
 朝な夕なの
 余が狩犬の
 最愛女エレンも
 飾り遣りたる
 後にして
 去た、かに
 さまたげに
 下部等は
 走り寄り
 打ちすゑぬ
 あしらひも
 人々の
 なかくに
 起き臥しに
 そのラフラ
 いつくしみて
 そのラフラ

あはれやラフラ
少女の顔の
あはれやラフラ
怨み計りは
群れ居る人を
唯一討の
天皇の下部は
よしや黒金の
ダグラスならで

そのラフラ
うつるまで
その犬の
えも堪へず
掻き分けて
拳より
一討に
てぬきをば
かゝる業

ラフラといへば
幼遊びの
やみく討れて
波路を渡る
犬の仇を
外にはものも
聲をもたてず
手に巻き持てる
誰かよくする

エレンてふ
友なりし
仆れたる
舟のごと
仆すには
いらぬなり
死してけり
人とても
ものあらむ

その二十六

斯くとも見るより
手にく劍

ゼームスの
抜きかざし

供人どもは
討ち掛らむと

さげびざま
する程に

言葉鏡く
汝が命も
いざや聴れよ
彼所に此所に
身をなげうちて
またいとほしき
余と命を
「こは推参なり
汝はかくして
汝が族の
朕がめしき
得もなさいりし
下部はしたに

ダグラスは
かくなさむ
武士よ
幾年月
戦ひを
友の爲め
捧げつゝ
ダグラスよ
報ゆるか
その中に
情ゆゑ
ものなるぞ
あればとて

「まされや者共
命惜くば
昔罪をば
零落たりし
鎮めまほしく
王が恵を
今こそ此所へ
朕が日頃の
道にはづれて
あはれダグラス
今日まで朕が
さは云へたとひ
朕が前をば

退けや
近寄るを
被りて
ダグラスが
思ひ立ち
仰がむと
來つるなれ
恵をば
膽太き
汝ばかりは
仇敵とは
數ならぬ
憚からず

駒を飛ばして
波の眞砂を
幼なき者や
大人も弱き
あれよくと
亂れくし
棒をまはしつ
無慘ある哉
すさまもあらず
清きあはれは
引かるゝ跡に
返せや人よ
心氣高き

駈るなり。
巻くがごと
老いたるは
者どもは
少女子は
その中に
矢を投げつ
ダグラスは
圍れ
なかくに
追ひ絶り
返へせやと
ダグラスは

嵐の枝を
人は亂れて
あへなく人に
只徒らに
彼方此方に
勇めるものは
とよめき立ちて
慈悲も知らぬ
静に道を
賤男や心に
百雷の
聲を亂して
國の掟も

拂ふごと
逃げまどひ
踏み敷かれ
逃げ迷ひ
泣きさけび
まかすがに
うちさやく。
武士に
打登る
汲むならむ。
落るごと
逐ひかけぬ。
願みす

無慘の拳に
如何で其まゝ、
この罪人を
かくと聴くより
そを鎮づめむと
斯くと見るより
余が先駈の
舞まふ袖も
樂しと見えし
只徒らに
近衛の武者は

その二十七

作しつゝ
うち捨てむ。
引立てゝ
人の群れ
舍人等は
ゼームスは
者共に
祭日
祭の
思ふまゝ

誇り顔なる
いでや近衛の
繫げ四屋に
とよめきわたり
弓取り上げて
「祭の庭も
路を掃へど
謠ふ聲音も
花に無慘の
氣色どこそは
群らかる人の

汝がさま
つかさども
此の者を」
さやぎたつ。
構へたり。
はや閉ぢよ。
傳へかし。」

面白く
山嵐し
成りにけれ。
その中へ

そを救はむと
あはれ悲しく
將なるシヨンを
汝を武士の
此のダグラスの
昔盡くし、
今道ならぬ
事や教へむ

その二十八

「おはれ優しき
かばかり惜しみ
さはさりながら

勇むなる
思ふらむ
顧り見て
一旗の
一にしも
道にしも
一を

友とちよ。
給ふなる
聴ねかし。

賤男が事をば
彼を引きゆく
「願ふはあはれ
長としなえて
汝も忘れは
心計りを
踏み入らむする
教へむ事を

ダグラス如き
志ざしこそ
此處に汝が

なか／＼に
兵卒の
ものふよ。
やりたるは
せざるらむ。
忘れずば
もの共に
許されよ。」

者をしも
嬉しけれ。
さる業を

よしやわが身の
うたてや汝等
臣たるもの、
我が道をしも
守らむと思ふ
道ならぬ道に
我はいかでか
よしやまさなき
國も家をも
敵に返さむと
さばかり強く
よしなき戦を
鮮血をそへぐ

爲めにしも
兼てより
道たゝじ。
ダグラスは
身にあらば
踏み入りて
歡ばむ。
苦みむ。
うち忘れ
思ふまで
募らんや。
引き起し
事さくも

爲さむするとも
天皇に盡す
我が命をも
國の掟の
汝が輩
我を助けむと
よしや故なき
此のダグラスは
只徒らに
わが私
勇む汝等が
同ト國なる
彼處の囹圄の

なか／＼に
赤心の
わが名をも
まに／＼に
今茲に
するどても
まが罪を
受るとも
恨みをば
怒りをば
槍先に
兄弟の
窓の中

言も心も
 荒び立ちたる
 里の時雨と
 天を仰ぎつ
 赤き心の
 同じ国土の
 げにけなげなる
 天を仰ぎつ
 老いたる人は
 國の内にし
 人の心を

潔き
 怒りだに
 降り變り
 地に伏しつ
 うら清く
 はらからの
 ダグラスを
 地に伏しつ
 いま茲に
 起らむと
 汲み取りて

人の諫めに
 尾上の嵐
 果ては涙に
 國を思へる
 わが命より
 命を惜しく
 神や守らせ
 願ふもあはれ
 己が命の
 思ひし戦を
 うれしと計り

諸人の
 玄かすがに
 沈むのみ
 武士が
 猶更なる
 思ひたる
 玉へどて
 人ひと心
 瀬戸近く
 止めたる
 歡こべは

その二十九

此のダグラスの
 成る事絶えて
 わだし戦を
 及の露と
 囚屋の夢の
 父に後れて
 四屋の窓に
 誠くに國を
 歎くにつれて
 我を一入
 かゝるよしなき
 正しき道に
 汝らが誠

朝夕に
 あらぬなり
 引き起し
 消えにしを
 安からむ
 歎かむを
 照る月も
 思ふなる
 玄かすがに
 責むらむ
 あだし道に
 依りてこそ
 あるべけれ

心を慰む
 我が身の爲に
 母なる人が
 歎くを聞かば
 浅茅が原に
 聞く事あらば
 いかで樂しき
 人は必ず
 かゝる亂れも
 あはれやしき
 踏みも迷はで
 なかく我を

よすがとは
 益もなき
 いとし子の
 いかでわか
 みなし子が
 ダグラスの
 影あらむ
 歎くらむ
 我故と
 友とちよ
 あらまほし
 いどほしむ

母と見えたる
我と命を
其身を助けむ
戦の庭の
命の親の
抱きし緑子
鬼を欺く
世にもいみづく
槍をば伏せつ
玄はれくつて
つらき勤を

その三十

人々々も
打ち捨てゝ
戦を
露としも
ダグラスを
さし上げて
兵卒も
惜しまれし
首さげつ
導きぬ
他に譲り

彼のダグラスの
怒を押へ
起さで止めし
消ゆべかりける
一目見せむと
見するもあはれ
さすがに
人の櫃を
小山に登る
城の木戸にし
太息をば

潔よく
恨みを呑み
慈悲ゆゑ
その父の
諸共に
緑子に
心動きけむ
送るごと
ダグラスを
なりぬれば
つきにけり

我が樂しみを
天皇は胸も
スターの街も
「あはれレンノック
をこの者をば
あはれレンノック
ダグラスの名を
同じ聲もて
今朝諸共に
此のゼームスが
同じ聲もて
若し行末に
同じ聲もて

破られて
ふたがりて
玄かすがに
浮雲の
我が民と
汝が土に
譽めそやし
かなト民
呼びしなり
政事
同じ人
ダグラスが
同じ民

面白からず
遠く放れて
又踏むまどと
かゝる心の
誰か治むる
住へる民が
たへし聲を
天皇ゼームス
彼のダグラスを
初めて取りし
祝ひし事も
位を奪ふ
又ダグラスを

思へばや
走せにけり
思ふらむ
定めなき
者あらむ
口々に
聞きつらむ
萬代と
退け
其時
ありしなり
事あらば
祝ふらむ

思ふに王に
いにし昔に
追はれたりける
軍にこそは
力を添へし
斯くと聴くより
今日の朝げに
我が大君も
玄かはあれども
掃ひ盡さむ
守りあらでは
主マールより

弓矢をば
此國の
ロ德里クが
集めたれ。
ものなりと
マール侯
軍ひき
戦ひの
マール侯
時までは
何處にも
をだまきの

引かむ心に
法に背きし
そが山國の
そはボスウエルの
人の話しに
いで一踏に
ドイチの城を
報知を聴て
ゆゝしき敵の
我天皇にも
駒をな出し
繰返したる

あるならむ
罪により
ものどもを
せームスも
傳ふなり。
散らさむと
たゝれたり。
得られなむ。
災禍を
かへすべ
玉ひそと
其の願ひ。

流に任す
誠少き
治めむと思ふ
「さはさりながら
此方へ来る
かすかに見ゆる
如何なる事や
「某こゝに
守りも堅く
事を主ある
駒を飛ばせて

浮草の
うそ鳥の
ものやある。」
その三十一
彼處より
武士は
馬トるし
いひ越せる。
参りしは
うしろ安き
マールより
参りたれ。

駒を頻りに
いかなる人に
マールの送る
疾くく告げよ
今より王の
所ばかりに
願ひ奉らむ
未だ定かに

浮雲の
民草を
はやめつゝ
あるならむ。
人ならむ。
何事ぞ。
すさびをは
限られむ
爲めにこそ
聴えねと

生虜となりて
我ど己れの
自ら此處に
必ず山の
よしや酋長なる
よしをば分ぬ
酋長の罪もて
朕は望ます
朕が詞を
駒を返して
力の限り
此の草野をば
さやをばづれて

來りたり
命をば
來りたり
黨どもは
ロ德里ッ
民草を
民草を
さる事は
告よかし
兵卒は
馳せ行かむ
越えぬ間も
あるならむ

そを助けしてふ
國の掟に
酋長失せたりと
馳て散りく
罪わればとて
乃の鏑と
酬ひの劔
いで汝が主に
鞭な馳めそ
「さらば是より
さはさりながら
はや太刀劍
氣遣しや」と

ダグラスは
任さむと
きくならば
散り行かむ
その爲めに
あさむ事
向けむこと
朕が心
急げ行け
わが駒の
わが駒の
彼處には
云ひ捨て

「朕はや昨日
汝がもたらし、
斯くすべしとは
今日の祭の
汝は是より
汝が駒をし
我がよき駒を
赤心厚き
構へて戦を
朕に弓矢を
一騎うちして

ゆくりなく
その諫
兼てより
賑ひに
小ゆるぎの
氣遣ひて
えりぬきて
汝が主に
扣へよと
引といふ
あへなくも

過ちたりし
身に浸みてこそ
朕も思ひて
思はず忘れて
急ぎ駒をば
鞭をゆるめる
汝が功をに
急き歸りて
朕がいひとつと
彼のロ德里ッは
ある武士に

事あれば
覺ゆなれ
ありしかど
ありしなり
引返へせ
事なせそ
報はんす
告げむには
いひ告げよ
このあさげ
掬められ

その三十二

あな危しと
西の方より
來れる者は
戦ありてふ
正午時より
日の暮るゝまで
騒ぎわひしが
静り果てゝ

語るあり。
あへぎく
誰れならむ。
報知をば
彼處には
續きしなと
玄かすがに
音もなく

日ははや既に
駒を飛ばして
そのカトリンの
持ちて來れる
烈しき戦
噂は町に
夜も漸く
晴れたる空に

暮れし頃
此の城に
湖ちかく
者ならむ。
はじまりて
みちくへ
更けゆけば
月白し。

花やぎたりし
無惨の嵐に
祭の歌も
歎きに暮れて
げに悲しげに
モレーイマール
今や戦ひ
またダグラスが
事をわはれど
口に指をば

けふの日の
散り果てぬ。
徒らに
音もなき
沈みたり。
ロデリックが
起らむと
無惨にも
かこちては
おし當てつ

祭の庭の
音も美しく
うたひはてずに
スターの町の
また其の町の
互に軍
うちひそめきて
囚屋の中に
俄に言葉を
劔の刃を

人の群れ
きこえたる
止にけり。
夕日かげ
人々かは
押し出して
語りあひ
繫がれし
うち消して
さし示し

駒を一鞭

その三十三

馳せされば

天皇も城に

入り玉ふ。

第六章

その一

スターの町の
 煙の中に
 此の世の祖の
 一夜樂しき
 今日も苦しむ
 更くるも知らず
 つらき鐘をや
 盗人ばらも
 隠家さして
 修羅の巻の

朝ぼらけ
 咽ふなり
 罪消えず
 夢破れ
 事ならむ
 うたげせし
 怨むらむ
 今のはや
 急ぐらむ
 夢覺めて

どよさか昇る
 天津國より
 憂事絶えぬ
 またも現の
 花に戯むれ
 世のうかれ男も
 闇を便りに
 影をひそめて
 城の中なる
 又取り上る

朝日子は
 やらはれし
 世の人の
 營みに
 月に酔ひ
 後朝の
 働きの
 奥山
 兵卒の
 槍先の

霜に夏なほ
 讀みあかしたる
 今は眠りに
 雲井のよその
 果報拙なき
 病の床に
 枯れど残る
 衣の色
 返しかねたる
 憂きに堪へざる
 人も絶えたる
 重き病に
 慰さむる母の

寒からむ
 文人も
 就くならむ
 天つ日の
 人々の
 ふし、ばの
 そ
 色に出で、
 金に故に
 そ
 戀人の心
 よわりゆく
 その音聲

學びの窓に
 書を傍へに
 げにさまぐの
 昇るにつれて
 悩める様ぞ
 とぼろ細くも
 うつろひ果てし
 涙に沈む
 今日は何に
 夢の中にも
 寝覺めに拂ふ
 愛兒の枕
 此處も彼處も

夜もすがら
 なげうちて
 世の姿
 見えそむる
 あはれなる
 つく息の
 花染の
 そ
 入らむかど
 宿を貸す
 その涙
 かい撫で、
 曉の

光りにも映る
うき世かな。

その二

夜もほのくも
高く聳ゆる
といろくも
木戸の守りに
夜や明けぬると
朝の光りの
たえく燃ゆる
黒石疊む
明けゆく影に
夜半の守りに

明けゆけば
兵卒の
うつつ鼓
よもすがら
勇むらむ
さし入りて
篝火の
宮の中
うつろひて
疲れつゝ

スターの城の
劔の響き
鼓の音をば
立ち勞れたる
狭き窓より
殿居の衛士の
煙も清く
消えく残る
もの凄じき
飲みたる酒に

櫓には
鞭の音は
うちきけば
兵卒も
矢ざまより
庭に入り
匂ふなり
燈火の
其ほかげ
亂れつゝ

その三

群れたる醜の
鎧の袖も
櫓の白木の
肴の骨は
空の杯
兵卒共が
面のあたり見る
かしの床に
残りし壺を
凍れる袖を
はだに腕をば

大丈夫は
うら凄く
卓には
山をなし
此處彼處
夜もすがら
心地する
此處の椅子に
尋ねつゝ
暖めむと
かざすなり

おぼろなす髪
世に云ふ鬼に
酒は流れて
飲み盡くしたる
散り亂れたる
なし、宴の
或はよわりて
或は今なほ
あるは終宵
燃え残りたる

太刀の癢
似たりけり
川をなし
酒の壺
有様に
その様を
うめくなり
探るなり
成番に
篝火の

茲に集へる
土地を借りたる
劍佩くに
此の兵卒の
君にも絶えて
兼て戦を
起臥せんと
さすらひ來にし
イタリア人に
スペイン人に
人は殊更
此國此城
人は此國の

兵卒は
酬とて
あらぬなり
父といひ
あらぬなり
よろこびて
思ひつゝ
者どもぞ
あるあらむ
あるならむ
此の國を
此處に寄り
土瘠せて

げに封建の
王の御爲めに
また其將と
親と云ひつゝ
茲に集る
修羅の巷に
遠き國より
沈み勝ちなる
黒き面を
山に馴れたる
其の身の榮と
土地豊なる
田作る者の

世の如く
弓を執り
きこゆるも
仕ふべき
兵卒は
常にかも
遙るは
面影は
もちたる
スウイツの
よろこびて
フランドの
袂にも

あまる實りの
佛蘭西獨逸
英吉利國の
そしられながら
遠き此土に
腕に覺えの
劍も楯も
城に在りては
今日のやうなる
心のまゝに

なき事を
兩國の
落人も
おのが身の
住むもあり
あるものぞ
いと軽く
いと軽く
祭に
遊ぶなり

心に嘲けり
人も袂を
いさぎよからぬ
命を繋ぐ
いづれも同ト
さしもに重き
遣ひ馴れたる
戦ふ時は
太刀も劍も

笑ひつゝ
連ねつゝ
落人ど
たつきとて
荒くれ男
鐵棒も
ものどもぞ
いと強く
うち捨てゝ

カトリン、アクレイ

その湖の

わはひの山に
 互に罵詈
 手をば劔に
 太刀にかゝりて
 手疵も深き
 更に心を
 頻りに神を
 更に必を
 遙るゝ來りて
 シヨンドよびあす
 敬ふ事も
 毛のあらものを
 危き事と
 戦へる
 語りつゝ
 かくるなり
 かねなくも
 友とちが
 留ぬなり
 呼び立て
 留ぬなり
 此黨れに
 荒れ男
 露知らず
 狩り暮し
 きく時は
 烈しき戦の
 心勇みて
 世にも鋭き
 手足を裂れ
 邊りに近く
 近く邊りに
 泣くね哀れに
 トレント川の
 同じく雇ひ
 恐るゝとを
 事なき時は
 戦となれば
 人に勝れて
 其さまを
 幾度か
 山人の
 身を突かれ
 うめくにも
 身をもがき
 聞ゆれど
 わたりより
 入れられし
 露知らず
 野に山に
 いと強く
 膽太く

げに荒びたる
 敵ロ德里は
 罪を名乗りて
 思ひし事の
 博奕のすさびに
 聲張り上げて
 かゝるすさびを
 その
 五兵士の歌
 荒くれ男
 捕へられ
 出でしかば
 泡と成り
 興じたる
 「我が友よ
 うち止めて
 己れ組むと
 又ダグラスは
 己が手柄に
 やる方もなき
 人の席を
 己れ歌をば
 いでや囃せよ
 思ひたる
 我どわが
 爲さむとし
 そ
 蹴り返し
 歌はむす
 我が歌を
 いたう嫌ひぬ
 種も包まれ
 七つの罪も
 世にぞ教ふる

古の
 酒を
 うま酒の
 れほかたに

聖人の
 聖の人は
 壺の中は
 かくれてありと

法の師は
 人の身の
 禍のの
 益を

さりながら
うたげして
敵をば
たわやめの
法の師は
振り向き
毒の矢を
さりながら
よりそひて
敵をば
法の師は
あかつきに
きのふの日

あが友とちよ。
うきをば拂へ。
汝もいやしみて
紅句ふ
いたう憎みぬ。
舌いだすめり。
はなち出すと
あが友とちよ。
あくまでも吸へ。
汝もいやしみて
かく敵ふれど
とりたる布施を
得たる酬を

むらぎもの
法の師を
守らざらむ。
くちぶるの
うつくしき
清らけき
今もなほ
いとほしき
法の師を
守らざらむ。
なと身には
夕に
けふは又

心のまゝに
汝も思ひそ。
露吸はむこと
妹が笑顔も
妹が眼ゆ
人にぞ告ぐる。
妹が頬をば
汝な思ひそ。
行ひ得ざるぞ。
杯にかへ
管にかふる。

罪人を
法の師も
さるからに
法の師の
その六

まことの道に
酒と色とは
あが友とちよ。
敵は汝も

かへすこそ
まかすがに
酒ものめ
守らざらむ。

身のつとめなれ。
はなれがたかり。
女子もめでよ。

折りしも木戸もる
皆諸共に
一人の武士は
「ゲントの街の
殊に嬉れしや
打連れ立ちて
太刀の疵跡

兵卒の
驚き
立ち出で
ヘルトラム
その人は
来りたり。」

呼ぶ聲高く
歌も俄に
行くま程なく
今しも茲に
少女一人と
いふま程なく
見ゆる老武者

きこゆれば
止みにけり。
立ちかへり
来りたり。
伶人と
髪白く
ヘルトラムは

左に伶人
衛士の陣にぞ
もの騒しき
おのゝき恐れて
いかなる嘶か
猪武者と
何れ勝つとも
詳しき事を
此處へは持らし
爲し、汝が
汝もさすがに
今しも汝は
猿をも共に

右に少女
來りたる。
兵卒の
見えにけり。
齋らせり。
戦ひて
負くるとも
聴かまほし。
來りしぞ。
手柄には
老たれば
伶人に
うち連れて

三人連れ立ち
まだ年若き
猿りがはしき
「げに珍らしき
正午時より
血潮は草に
未だ分すと
そも何處より
さる珍らしき
必ず
最早軍に
舞姫をさへ
浮世をまはる

諸共に
少女子は
有様に
ベルトラム
日暮まで
波うてど
知れるのみ。
その虜
生捕りを
あるならむ。
堪へざらむ。
連れたれば
猿まはし

猿を廻して

その七

諸共に

まはりて行けよ

國々を

「否々友よ
昨日戦の
このたわやめと
侯も親しく
此の二人をば
侯のマーの
げにもよしある
手をな出だしそ
待ち構へたる
「ついてもをかしや

さる事は
果てし時は
二人づれ
逢ひ玉ひ
大内へ
差圖故
人なれば
此の人の
荒武者の
汝が言葉葉

我が身の上
此の年老し
味方の陣へ
駒を整へ
送り届けよ
此處へ今こそ
汝らも必ず
事あれかしと
「ジョンはいか
人の住へる

あらぬあり。
伶人ど
尋ね来て
乗り連れて
疾くくと
來りたれ。
心し
常に
軒近
こらへ得む。
く

山の牝鹿を
肉をば其處の
よしやいかなる
或は汝が
わけまへ取らで
あはや寄らむと
年老いたれば
怒のはむら
エレンもおめず
取れば輝く
菖蒲ふきたる
晴れ渡りたる
清くも匂ふ

討ちながら
やせの人に
よしあるも
否むとて
置くべきか。
爲しけるを
俗人は
燃えたちて
進み出で
其の姿
賤が家の
曉の
ばかりなり。

心きたなくも
わたへぬといふ
よしやモーレイ
己れ必ず
かく云ひ捨て、
さへぎり止むる
かなはむすべも
懐
うち被りたる
降り頻りたる
軒の玉水
松の水枝に
流石に猛き

其の鹿の
事やある。
またマール
捕り者の
立ち上り
ベルトラム。
わらざれど
手に取れば
上衣をば
五月雨
たましく
朝日子の
兵卒も

あまつ國より
かくやと計り
狂へるジョンも
顔をわかめて
顔を見詰て

天降る
驚き
まかすがに
つくぐと
居たりけり。

天つ少女の
心も空に
魂消えて
拜むばかりに

有様も
見てあれば
言葉なく
少女子の

少女は騒ぐ
妾が父に
同じ陣屋に
同じ野邊にし
よしや此身は
ときめく人の

気色なく
あなる人も
床連らね
血潮をば
哀れなる
嘲を

「兵者共よ
もと武士の
同ト戦に
流し、事も
落人の子に
故なく受る

さゝねかし。
友にしして
駒を並め
ありしなり。
あればとて
事やある。」

善きも悪しきも
 「思ひ返へせば
 身を置く方も
 落人の子に
 おなじ流れの
 思ひ出づれば
 生存命へて
 さしもに猛き
 鎧の袖に
 「今はた思へば
 いで我が友よ
 歸り来るまで
 若しや少女の

事あれば
 今更に
 あらぬなり。
 おはするか。
 身にしあれば
 いどほしや
 あらむには
 武士も
 はらくと
 彼の身も
 きゝねかし。
 茲にかく
 身の上

人に怯れぬ
 我どわが身の
 おはれや少女
 斯く云ふ我も
 分けて汲むなり
 あはれロースよ
 存命居らば」と
 留め難ねたる
 落るもあはれ
 汝が齡ひに
 余の將をば
 余が此の斧を
 よしなき業を

彼のシヨンは
 恥かしく
 汝もまた
 落人の
 汝が心
 汝も今
 云ひかけて
 ひと
 一の
 その
 近からむ。
 呼びて來む。
 置くなれば
 爲さむとて

此の斧越ゆる
 猥りにものを
 汝等は我が
 今更多く
 其の將は
 花やか
 慎しめ
 なめげなり。
 眼も
 思ふらむ。
 志かすがに

その九

ものあらば
 いふ勿れ。
 心をば
 云ぬなり。」

我が矢に懸けて
 戯れ事は
 兼て知りたる

年猶若く
 氣もいと輕き
 なは言の葉は
 家柄高き
 いぶかしみつゝ
 此若武者の
 心優しき

暎まし
 者なれば
 過ぎ勝ちに
 たわやめ
 見る將の
 其名をば
 ものなりき。

休すべし。
 慎しめよ。
 者なれば

わはれエレンは
 姿の磨ける
 其面影は
 落人の子と
 よくこそ来つれ
 御法の庭の
 白き駒にし
 供に引き連れ
 汝は此處へは
 己れの如き
 少女の曇る
 暫時ながめて
 心にうさの
 山に似ての
 玉に似て
 誰かまた
 思ふべき
 此の城に
 つかひ姫
 うち乗りて
 大丈夫の
 来りしや
 若武者の
 眼もて
 つくど
 懸るらむ
 去づはた衣を
 花とも月も
 深山がくれに
 「わはれめでたき
 昔ありとし
 そのつかひ姫の
 霜あす髪の
 助けを得まく
 汝が願ふ
 刀に叶ふ
 將の方をば
 太き息をば
 「妾いかで
 纏へども
 譬へなむ
 世を詫びし
 たわやめよ
 聞えたる
 ありしごと
 俗人を
 思ひつゝ
 その助け
 事ありや
 ながめしが
 つきにけり
 君がいふ

さるべき姫に
 世の憂き淵を
 歎ききこえて
 思ひて此處に
 天皇の御前に
 いにし昔に
 必ず聴かむと
 授け玉ひし
 その十
 侍るべき
 凌ぎつゝ
 大君の
 来りたり
 此の身をば
 大君が
 のたまひて
 此の指輪
 思へばつらく
 父が命を
 露の恵を
 わはれ武士
 導き玉へ
 いかある願に
 ヒツゼームスと
 妾は持てり
 わぢきな
 兎に角に
 仰がむと
 願くは
 武士よ
 あればとて
 よふ人に
 其指輪
 レイスはいたく
 「此の指輪をば
 仕へまつらむ
 畏こみて
 齋らせり
 務あり
 手に取上げぬ
 人にしあれば
 かゝる畏こき
 その指輪
 われくは
 きはなりと

潔ぎよからぬ
 姫の心は
 イギリス人の
 黄金を我は
 空敷からの
 頭巾とも爲して
 黄金の兜を
 烈しき戦の
 頭の上
 嬉しと答ふ
 底の心は

その十一

氣色にて
 我もまた
 習ひとて
 受けねども
 その囊
 末長く
 戴ける
 其の中も
 戴き
 言の葉は
 深からむ

黄金を強て
 忝けなくは
 黄金を受る
 あはれ願くは
 我に得さして
 頭の上
 大丈夫迎も
 踏てを行む
 うへば
 はつかにいへど

押し返し
 思えども
 事はせじ
 姫御前よ
 玉ひなば
 戴き
 えも踏ぬ
 此の頭巾を
 其の心
 なかくに

汝を知らで
 兵者共の
 いかなる恵を
 聽て天皇に
 長くもあらず
 そこにおはさば
 來りて邊りに
 我れ導びきて
 立ちあがりつゝ
 家の流を
 些かなれども
 殿居の武士に
 禮を返して

ありしかば
 振舞を
 乞はむとて
 聽こえ上げむ
 玄ばしのま
 女の童
 かし仕む
 まゐらせむ
 玄かすがに
 くむ少女
 みづからか
 與ふれば
 受取りぬ

許し玉はれ
 日影も高く
 いかなる人の
 起き出玉はぬ
 彼處の部屋に
 汝が差圖に
 いざ姫君よ
 將の言葉に
 情に厚き
 黄金の袋
 心計りを
 いと嬉しげに
 夫れが中にも

數ならぬ
 成るあらば
 來つるやを
 時までは
 待ちてあれ
 從ひて
 從ひて
 その部屋へ
 從ひて
 ダグラスの
 紐解きて
 受けてよと
 數多度
 ショーン一人

レイスのあとに
 俗人アランは
 「あはれいとほしの
 あはれシヨン殿
 名残りは盡きぬ
 主が歎きを
 いにし昔しに
 初めて琴を
 今の我が代を
 ありし我が身の
 主なる家の
 幾世久しく
 我は心を

連れ立ちて
 彼のシヨンに
 姫御前よ
 願はくは
 我が主に
 よそにして
 我が祖が
 ひきてより
 數ふれば
 祖先は
 榮えをば
 仕へたり
 筑紫の

エレンは此處を
 わぶる心を
 恙もあらで
 君がなさけに
 目見えさせてよ
 いかで此の世に
 今の主なる
 代々俗人と
 十といふ世の
 皆その身をば
 嬉しと計り
 會長が産屋に
 會長が童と

去りしかば
 語るあり
 おはせかし
 目のあたり
 余が主に
 存命へむ
 其の祖に
 かしづきて
 未にこそ
 顧り見す
 よろこびて
 ある時も
 なりぬれば

寢覺めの伽に
 朝夕歌ふ
 初陣あれば
 興を添へむと
 音色静かに
 棺の前
 げに我主と
 邊りを去らぬ
 四屋の中に
 憂きをば共に
 我が會長居ます
 「南の國の
 君と云はれて

わらべ
 軍歌
 祝ひ
 あづま
 玉のを
 挽の歌
 この俗人
 君と臣
 ましますを
 分たなむ
 固圀へど
 己れらは
 ありしなと

會長が若くし
 會長が戦に
 會長の宴の
 會長の眠に
 會長の空しく
 音を調べつゝ
 柴の戸ばその
 其會長今は
 思へば我も
 あはれシヨン殿
 我を導びき
 幾代久しく
 さる事いかで

なりぬれば
 山狩に
 席に
 つく時は
 なる時は
 歌ひつゝ
 まばしたに
 捕はれて
 其窓に
 願はくは
 玉へかし
 臣といひ
 思ふべき

あるは會長てふ
 臣となすべき
 とまれかくまれ
 御心深く
 今はた思へば
 鹿逐ふ業を
 かゝるわたりに
 我が身の心の
 我に從ひ

その十二

鍵の数は多
 其の事は
 おはしたり
 おのれとて
 殊更
 落人
 あさましや
 行きねかし

あまたの人を
 我らは絶て
 げに故郷の
 神や守らむ
 田作る事に
 好める事の
 成らでもすみし
 いでやいみつき
 汝が主に

其會長の
 知らぬなり
 我が候は
 其の候を
 身を委だね
 なかりせば
 ものなるを
 俗人よ
 逢せなむ

小箱より
 取り出だし

燃ゆる松明
 巡りくつて
 此處に彼處に
 鎖りの音も
 幾穴倉を
 首うつ人の
 手足をうちも
 夫れを造りし
 ものと思へば
 名さへ告げざる
 こゝの害にも
 シモンは來りて
 傍へのアランに

手あどりて
 わたせの
 囚人の
 ものすぢし
 すぎ行けば
 太刀劍
 やぶるため
 工匠だに
 耻かし
 責道具
 夥たし
 立ち止り
 わたしつゝ

いざとアランを
 聞き路をば
 うめき悲しむ
 見るもいよだつ
 八つ裂車
 骨のつがひを
 造りし道具
 かばかりむごく
 罪深しとや
 其處の害にも
 入口低き
 手にせる松明
 とぼその鎖り

催かして
 すぎゆけば
 聲きこえ
 こゝかしこ
 または斧
 斷つ爲めに
 數知れず
 あさましき
 思ひけむ
 うづ高く
 害の門に
 暫時とて
 解きすて

かゝれる錠を
 歎きの雲は
 四方を固めし
 土の半には
 天つ光りの
 玄かもふるびし
 布きもつめたる
 荒き住居も
 似つかはしどや
 「いでや俗人
 汝が主と
 醫師は心を
 かくいひすて、

どりはづし
 立ち籠めて
 囚屋とは
 わらざらむ。
 かげこぼれ
 布をもて
 この罫罫
 なかくに
 思ひけむ
 汝は此處に
 語れかし。
 碎くどぞ
 その人は

入りてし見れば
 げにも厳しく
 見ゆるものから
 高き格子の
 見る影もなき
 淋しき壁に
 世の開けざる
 生擒れたる
 げにあさましの
 再び醫師の
 手創いみじう
 看護の人は
 再び錠を

窖の中
 いかめしく
 玄かすがに
 わはひより
 わらたへの
 板床に
 その時の
 會長共に
 この罫罫
 見ゆるまで
 重ければ
 語るなる。
 おろしつゝ、

彼方へ立ちさる
 よわりはてたる
 わづかに首を
 こはあさましの
 彼方の人を
 なづかしと計り
 會長ロデリックに
 來りたりしど
 思ひたがへる

その十三

もの音に
 囚人は
 もたげつゝ
 わが君と
 ながむれば
 慕ひたる
 あらむとは
 きくまゝに
 ものあらむ。

此方は驚き
 あやしき床の
 此方の人を
 うち驚きて
 思ひがけさや
 かなしき主に
 戦ありたる
 そがいふ主を

覺めにけむ
 袂より
 見つめたり。
 俗人は
 その人は
 あらずして
 所より
 ロデリックと

わはれなる哉
 臥したるさまは

ロデリックは
 わたづみの

よわりくゝて
 沖も凌ぎし

床の上へ
 大船が

さしも勝れし
まく大波に
高き艦も
凌ぐ時なく
さばかり猛き
痛む手傷に
床の邊りに
洲に乗り上げし
磯の細波
また起き難る
凌ぎし力
驅りし力
影をばそれと

乗り手にも
陸ちかく
玄かすがに
成りはて
大丈夫が
堪へかねて
投げつけて
大船が
うちさやぎ
如くなり
今何處
今何處
見止めけむ

今はあへなく
うちあげられて
沖のなごろを
空しく浮ぶに
唯床の上に
腕をしばく
苦しみがく
まなくひまなく
ゆらぐとすれど
あはれや其船
あはれや其人
此所に來りし
言葉せはしく

捨てられて
あはれく
今はいや
似たりけり
うち臥して
空にふり
そのさまは
うちよする
玄かすがに
わたづみを
野を山を
伶人の
ロデリックは

「汝が姫も
ダクラス殿も
事落ちもなく
係る姿に
共に果敢なく
さはさりながら
係る所に
汲みて知りたる
答もえせず
余に語れよ
誰のいさましく
はやく語れ
潔ぎよからぬ

わが母も
わが黨も
聴かまほし
なりたれば
散りたるか
伶人よ
來りしぞ
伶人は
見えしかば
伶人よ
かけむかひ
伶人の
もの共は

いかに成りゆき
如何になりけむ
己れあへなく
我が母我が黨
あち口惜しや
如何なる故に
問ふその人の
早やも涙に
唯何事も
なぞか恐るゝ
誰は汚く
會長なくなりし
心汚く

玉ひしぞ
其後には
生捕られ
汝が主も
無念やな
汝はそも
心根を
かきくれて
憚からず
事のわる
逃げたるぞ
事故に
落ち延びし

斯くどきくより
 眼は熱に
 面は青く
 「さて悲しや
 神の祭の
 糸の音色の
 聴たる事も
 その琴糸の
 影も止めず
 デルミド黨を
 汝がうたひし
 わがアルピンの
 鎬けづりし

ロ・デリックは
 燃え立ちて
 うつろひて
 俗人よ。
 ありし時
 身に浸みて
 ありしかど
 音も絶む。
 ありぬらむ。
 うち破り
 其の歌を
 武士と
 有様を

堪へかねけむ
 勇むとすれど
 また見る影も
 彼處の淋しき
 掻きかなでたる
 心も空と
 今より後は
 またきたりし
 思ひ出づれば
 歸りし時の
 我は忘るゝ
 彼のサッソンの
 汝が琴に

身を起し
 玄かすがに
 なかりけり。
 島蔭に
 汝が琴の
 なるまでに
 その島に
 大丈夫の
 大の昔
 歡びに
 隙もなし。
 兵卒と
 かきならし

者も必ず
 敵の真中に
 「静かにおはせ
 世に存命て
 ダグラス君の
 障りなくてぞ
 事とし云へば
 誠を盡くし
 斯るめでたき
 うたひし事は
 よき枝数多

その十四

多からむ。
 斬り入りて
 わか會長よ。
 居ますなり。
 うき淵も
 おはすなる。
 勇ましや。
 勇ましく
 戦をば
 あらざりき。
 討れしも

如何なる人か
 はれの討死を
 エレンの姫は
 神の恵みの
 頼む瀬ありと
 君が黨なる
 野邊に山邊に
 命をすて、
 我が琴糸の
 君のめでたき
 未だ仆れも

勇ましく
 遂げにけむ。
 恙なく
 有りがたさ。
 見ゆるなり。
 人々ひ
 馳せ向ひ
 戦ひき。
 音に合せ
 松の旗
 はてぬなり」。

我に聴かせよ
 太刀うつ響
 我は聴なむ
 そのあさましき
 兵卒どもの
 わが目前
 此のロデリックも
 消ゆるがごとく
 そをうち聴きて
 手馴れの琴を
 よべ連立ちし
 またベンベヌの
 心に思ひ

そのさまを
 槍の音を
 汝が琴を
 その床も
 うち亂れ
 見ゆるまで
 勇ましき
 今茲に
 俗人は
 取りあぐる
 ベルトラム
 尾上より
 起しつゝ

汝が歌をば
 此處にきくかど
 彼處のいぶせき
 影消えうせて
 亂れて戦ふ
 汝が琴糸を
 戦の野邊に
 散りて行かなむ
 應へはすれど
 手も力なげに
 語りたりける
 自ら見たる
 歌のしらべの

うちきゝて
 思ふまで
 かの壁も
 今此處に
 その野邊の
 引くならば
 白露と
 わが命
 玄かすがに
 見えにけり
 談をも
 ありさまも
 限りをば

玄らべわげつゝ
 掻き鳴らしゆく
 葦を分けゆく
 水泡逆まく
 いる矢ばかりに
 げに勇ましき

その十五 戦國歌

歌ひつゝ
 其の琴は
 其のひまは
 中つ瀬に
 下りゆく
 琴の音は

いや勇ましく
 渚に繫く
 いと静に
 ふるゝとすれば
 さまにも似たり

いや強く
 さゝ小舟
 見ゆれども
 たゝなめて
 琴の音は

「日頃馴れたる
 別れの袖を
 山の東の
 よそのわたりの
 かくも妙ある

アクレイの
 ふりはへて
 はさまをば
 何處にか
 浦わをば

湖に別れを
 いま一度と
 登りて見れば
 斯くも静げき
 餘所のわたりの

告ひとて
 ベンベヌの
 美しくや
 水うみ
 何處にか

未だ吹きあげず
げにはなやかに
鐵をよろひし
夕べの森の
槍長刀の
軽くよろひし

湖の邊りを
今や遅しと
待ちたる様も
詠めし時の
勝して嬉しく

その十六 戦闘歌の續き

備へた貝も
騎馬の武者
影のこど
隙もあき
弓の手は

うち巡ぐり
彼方にも
勇ましや
一刻は
思ふあり

未だ聴えず
遙後陣に
唯くるくど
中の備は
矢をを計る

頻りにやりて
はやる駒をば
斯くいさましき
長閑に暮す

太輝ひれ居たり
笛の音も
墨染の
こゝかしこ

寄するあり
扣へつゝ
有様を
十歳にも

見る事あらむ
波遙なり
鳴く山鳥も
鳴く鹿の音も
柔しく歌ふ
玉藻流るゝ
レシの遠山
天に轟く
森の繁みを
あるは劍の
それかあらぬか
マールの侯の
星をかざしゝ

この氣色
湖の上
面白く
わはれやな
音もわはれ
影清く
かすかなり
雷か
ゆく水に
霜銚の
ながむれば
軍ならむ
馬旗

風静かなり
彼方の峰に
其處の川邊に
森の茂みに
岩はしる水
夕立の雲
折りしも凄く
また兵卒の
寫れる影は
夕日にうつらふ
劍をゑがく
遙あなたに
モールの侯の

岸の葦
ほろくと
妻こひて
百鳥の
音たえて
響ひて
聴ゆるは
足音か
稲妻か
影なるか
旗じるし
白金の
軍ならむ

うつ小鼓の
 鎧の響
 嵐も今は
 甲冑の羽根も
 いとも静かに
 敵に逢ひたる
 槍を伏せつゝ
 唯山路に
 碎けぬ岩も
 敵の軍は
 トロザの谷の
 騎馬は綱をは
 暫時進みを

その音も
 太刀の音
 吹き止みて
 ひらめかず
 靡くのみ
 報知をば
 まつ敵も
 聞ゆるは
 なしといふ
 進むなり
 そのはしの
 扣へつゝ
 止むれば

軍を進む
 それならでまた
 旗も靡す
 道の邊りの
 先に駈けりし
 未だ知らせも
 未だ影だに
 妻呼びさやく
 沖のなごろの
 湖の邊りも
 狭き野にこそ
 又槍の手も
 先に立ちたる

彼方には
 音もなし
 兵卒の
 青柳の
 斥候ども
 もたらせず
 顯はさず
 鹿の聲
 寄するごと
 はや過ぎて
 着にけれ
 槍を立て
 弓の手は

谷ある敵を

探ぐらむと

草押し分けて

駈りゆく

その十七 戦闘歌の續き

折りしも聞き
 幽冥界の中に
 おめき叫ぶに
 亂れくゝて
 後につゝく
 鎧の影の
 輝やく影も
 潮の湧くに
 後に扣へし
 マールの侯は

谷がくれ
 ありといふ
 似たりけり
 弓の手は
 関の聲
 恐ろしく
 ものすごや
 似たりけり
 槍の手は
 斯くど見て

もの凄トき
 鬼ども數多
 木の葉の風に
 此方をさして
 山の兵卒
 振かざしたる
 逐ふも逃るも
 夕べの森の
 如何にかすらむ
 「いでやものども

もの、聲
 顯はれて
 散る如く
 逃げ歸る
 きならしの
 劍太刀
 わたづみの
 ひらくと
 この潮
 構へよや

振りかざしたる
うつる稲妻と
山なす波の
忽ち槍の
松の枝折る
忽ち聴ゆる
うつにも似たり
「いで〜進め
あはれ大丈夫
後陣の騎馬を
微塵になれど
駒を蹴り立て
乗りたる駒は

太刀影は
見ゆるあり
飛ぶがごと
砕くる音
木枯しの
太刀の音
太刀の音
わが旗よ
疾く崩せ
指招ぎ
かけさす
まつしぐら
逸物ぞ

げに白波の
あからし風
敵の備へ
響きわたりし
すさぶに似たり
百千の鍛工
斯くど見るより
敵の旗色
汝が槍先に
アルピン黨の
侯の一聲に
敵の中へと
持てる劍は

波の上
吹き荒れて
懸りたり
その音は
諸共
モ一レ
動くなり
突崩せ
横馬武者は
騎馬武者は
乗り込みぬ
秀れたる

味方も敵も
一聲烈しく
共にまきて
あしのむらだち
鎧の袖を
「命知らざる
押しも包みて
荒びく
心の儘に

その十八 戦闘歌の續き

諸共
呼はれば
構へしは
一なぎに
たてなめて
山人や
討ち取らむ
寄すれども
爲し呉れむ
汚なしと
アルピン黨

彼方へ逐ひも
立て連ねたる
一打寄する
仆れ伏したる
共にあげたる
獵夫が鹿を
あはれ山人
こがひの犬を
いでく來れと

掃へよと
大槍の
大波に
とどくなり
関の聲
狩る如く
猪のどと
逐ふどとく
待ちかけぬ
ふり立て、
立つと見ゆ

敵を破るに
張りし梓の
どよめき立ちて
何處に在るらむ
百千の太刀に
潮と寄せし
互に返へす
太刀の響は
ブラックリンの
消ゆるがごとく
うづまく波の
此處のぬば玉
吞れし計り

何かあらむ
手束弓
見えにけり
ロデリックは
優りしを
戦人
西にけり
絶えにけり
瀧壺に
或はまた
沈むごと
影闇さ
消え失せて

流石勇める
張もこらへず
あはれ會長なる
汝しが角の
何處に在るらむ
トロザの谷を
槍の光りは
逆巻く波も
轟きたぎつ
奥が知らぬ
潮とも見し
トロザの谷の
最早戦を

アルピン黨
引返し
ロデリックは
一は
ロデリックは
うち越えて
消えにけり
影闇さ
瀧壺の
岩むろに
兵卒も
懐す事も
爲す事も

なき骸ばかり

見ゆるなり。

その十九 戦闘歌の續き

進くりめぐりて
西の方へと
戦はなほも
トロザの谷の
カトリン湖に
最期の戦
ベンベヌ山を
真下に見ゆる
どよはた雲は
夕べの色

谷の道
うつり行く
梓の弓
もの凄さ
臨みたる
あるならむ
水鳥の
カトリン湖
立ち騒ぎ
いと深し

戦の響は
いでやあなたへ
引きも續きて
鳥の細路
浅茅が原の
いでや行かむと
また立ち越えて
日影は既に
青海原に
雲居る山の

彌増に
急そがなむ
進むなる
うち越えて
草原に
俗人は
行き行けば
入り果て
すみぞめの
谷間より

怪しき嵐
湖原遠く
彼の俗人は
唯トロザ一の
耳傾けて
地も動くかど
我身を放るゝ
削るもの音
天を駆りて
聲はいよゝく
一むら影の
寄すとすれど
山の彼方は

幾度か
吹きすぎて
ひく沙の
細路を
うち聞けば
響く音
よしもなき
聴ゆなり
呼ぶととき
近づきぬ
細路に
玄かすがに
アルピン黨

吹きも下して
又もや聞えず
沖の大波
見つめたりけり
きこゆる音は
玉の緒糸の
世に凄まじき
げにや數多の
聲ものすこく
むらく繁る
又も脹ぎる
彼方此方に
唯黒雲の

カトリンの
成りにけり
見も遣らず
其路を
何あらむ
絶えざれば
鎗をば
人魂の
きこゆなり
櫓の葉の
敵味方
うち別れ
懸るごと

湖のはたには
彼方は烈しき
互に討れ
かきたは睨む
互に備へを
あたりの海の
互に張りたる
あから島風
白帆の影に
裂けし鎧の
夕暮さまの

サクソン人
太刀風に
碎かれて
此方をば
向け合せ
あせざれば
梓弓
吹き破り
さも似たり
その袖に
大空に

げに白波の
此方は隙なき
弱りはてたる
此方は睨む
その岩根の
いかで退くべき
断々裂たる
千々に裂たる
折れたる太刀の
血潮は雨ど
通へる風も

寄するごと
槍先
兵卒は
彼方をば
動かざれば
事かはと
絹の旗
大舟の
其柄に
降り去さり
腥し

その二十戦闘歌の續き

憎き敵ぞと
守りくくりて
手にせる槍を
見よや彼處の
守る兵卒
袖をうち振り
叫ぶ聲のみ
道を知らざる
積みたる所に
矢をろはるけき
磯に繋げる
黄金の囊
其處に残りし

サツツン人
ありけるが
指し延し
小島をば
影もなく
うちあげて
音高し
この島の黨
あるならむ
かの島へ
小舟をば
取らせなむ
妻子をば

山なる方を
モールの侯は
いでやもの共
磯には波の
唯なよ竹の
頻りにさわぐ
彼處の島は
盗み來りし
いでやもの共
波路を別けて
引きて來らむ
彼處の島を
我が手の中に

睨みつめ
かへりみて
彼の島を
さやげども
なよくと
おうなばら
兼てより
寶をば
誰かある
うち渡り
ものなきか
攻め取りて
生擒らば

よしや太刀をも
猪武者に
侯の一聞
甲冑を
踊り込みたり
皆見詰めたり
波を分けゆく
彼方の島には
行方を惑ひ
妻子は如何に
猛り立ちたる
凄き友音を
成りまさりつゝ

矢先をも
あればとて
諸共に
投げ捨て
波の中
彼方をば
その友を
よるべなき
泣さけび
なるならむ
其叫び
添ゆるなり
久方のの

恐るゝ事なき
捕るには難き
踊り出でたる
岸の岩根を
あなやと計り
此方の磯は
勉まし叫ぶ
アルビン黨の
山の方には
無惨の敵の
ベンベヌ山の
聲は烈しく
天の川水

アルビンの
事あらト
武者一騎
蹴り立て
人々は
サツツン人
其叫び
女ばら
アルビン黨
振舞やど
山産も
成りまさり
漏るゝかど

疑ふばかり
カトリン湖の
いやますくくに
アルピン黨の
避くる便りを
繁く降り来る
彼奴憎しや
篠を亂だして
彼の武士は
わはや今はや
取り絶りたり
磯邊波間に
彼方の島の

夕立の
風はやみ
亂るれば
人々の
得たるらむ
そが中に
討ち取れど
射かくれど
恙なく
その人は
その人は
輝めきぬ
磯近く

折りしも凄く
山なす波は
分け行く人は
手馴れし弓の
篠を亂だせる
猶もの凄く
アルピン黨の
更らに甲斐とて
島に今こそ
いさゝ小舟の
折りしも稲妻
輝めく影に
柏の老木の

降り出で、
いや高く
なかくに
矢先をば
雨、霞
いやまげく
射る矢筋
なかりけり
着にけれ
舷べりに
一光り
見えたるは
根の影に

立ちたる老女の
妻なる人ど
小刀を
稲妻の影は
砕くる波の
二聲三聲
輝めく影に
いさゝ小舟の
あへなき殻ど
骸を踏まへて
血汐えたる

其の姿
知られけり
抜くさまの
消えうせて
音に交り
はた四聲
見渡せば
はた近く
成りはて、
立つ老女
さますごし。

今は世になき
何思ふらむ
見ゆる間なく
人は見えずに
誰うめくらむ
又も稲妻
こはそもあはれ
あはれやありし
水の中にぞ
袖に及に

ダンカンの
懐てまたの
聴てまたの
ありしかど
悲しげに
一光り
無惨やな
武士は
浮びたる
紅の

その二十一 戦闘歌の續き

いでやかへさむ
 仇を必ず
 言り狂るへば
 わな心地よや
 雨はいよく
 天地悲りて
 更に恐れぬ
 またも鎬を
 駒を鞭うち
 駒をひらりと
 打ち振りく
 戦解ねと
 兵擧げたる

はらかなら
 討ち取れど
 此方なる
 うれしやと
 降りまきり
 狂ふかど
 敵味方
 削づらむと
 驀下り立ちて
 振りかざす
 吹きあぐる
 ロデリックも

恨み返さむ
 サクソン人は
 アルビン黨の
 ぶつどはやして
 風はいやまし
 思ふ計りの
 互に備へを
 爲し、時しも
 わへぎく
 岩の上より
 聴て聴ゆる
 彼方のかたに
 助けしといふ

わが友の
 ひしめきて
 兵卒は
 うち笑ふ
 吹きすすび
 気色にも
 立て直し
 誰あらむ
 馳せ寄りぬ
 白旗を
 角の音は
 聲高く
 ダグラスも

共に固圀に
 天皇の勅りと
 歌も俄かに
 俄に聞えず
 その琴糸の
 如何に聴くらむ
 彼方の床を
 アランの糸の
 よわき節をば
 琴の音糸の
 あはれロデリック
 気色もどみに
 琴も聴へず

繫ぎたり。
 呼ばはりぬ。
 音たえて
 成りにけり。
 よりく
 ロデリックと
 見やりしが
 細き音に
 合すかど
 いと強く
 むら肝の
 變りはて
 なりにけむ。

今は軍を
 歌ひすまし、
 知らぶる琴の
 引き初めしより
 如何にロデリック
 忍びく
 初めの程は
 折り手
 見えしが應て
 えらべあげたる
 心も強く
 燃ゆるはむらに
 いやまし凄き

引よかし。
 伶人の
 糸の音も
 伶人が歌を
 わが歌を
 幾度か
 ロデリックも
 うちふりて
 止みにけり。
 その時は
 燃えにけむ
 今ははや
 其の面。

「あはれロデリック
民の力と
嵐を防ぐ
君を思へば
寝覺めを寒く
花と飛び散り
惜むに餘る
いでや歌はむ
君の心も
浅茅が原の
我がダグラスの
水音寒き
恵み玉ひし

いとほしや
仰かれつ
木かげとも
あまさがる
思ひたる
水と逝き
名残をば
汝が爲めに
なづかしや
露ばかり
落人
谷とて
心根も

國のかためと
げに山里の
思ひ頼みし
遠き外國
君の姿の
歸らぬさまの
誰か歌はぬ
我が琴糸を
國をやらはれ
あはれを懸くる
白雲かゝる
袖の時雨の
思へば嬉しき

頼まれつ
アルビン黨
君の蔭
その人も
今こゝに
いとほしや
ものあらむ
惜しみたる
身を逐はれ
ものもなき
峯とて
木蔭をば
人
心

堅く組たる
抑ゆるも哀れ
息も消えゆく
齒ざしる音の
死出の旅路の
悲しむ言葉は
此の世の名残り
花のあはれを
うつゝと計り
此所に歸らず
空しき骸に

その 二十二 挽歌

諸手もて
その胸を
断末間
きこゆるのみ
袂にも
絶えてなく
あへなくも
留めたり
ながめしが
成りし影
うち向ひ

胸のあたりを
亂るゝ心の
空をむなしく
あはれ勇める
惜しむ涙は
完爾笑ふ
散りて歸らぬ
せむすべしらに
はや玉の緒も
見るに歎きを
歌ふもあはれ

いと高く
苦しみに
睨みつめ
ロデリックは
絶えてなく
笑がほをば
武士の
俗人は
切れはて
堰きあへず
挽歌

其の人其かけ
よしや四屋の
げに名にしおふ
この一本の
用ふ歌の
汝を慕ひて
袂の露や
軒のうき雲
汝がはやりて
戦の終りを
朝日の影も
汝を悲しむ
怒りの涙は

今茲に
中どても
アルピンの
常盤松
なくてやは
昨日今日
滋げからむ
昨日今日
只一騎
見もやらず
待たずして
その時は
いかならむ

消えて歸らぬ
用ふ歌の
譽れも清き
こゝに枯れゆく
悲しむ人の
汝が郷なる
汝がなくなりし
道理知らず
敵と組みたる
あへなく仆れし
露と消えたる
汝が勇める
いかなる沙と

悲しさは
なくてやは
常盤松
其のかけを
あらずやは
民草の
山里の
迷ふらむ
事を思ひ
汝を思は
汝を思は
兵卒の
湧くならむ

如何なる潮と
汝がアルピンの
皆歡びて
汝が命に
其名も清き
枯れゆく風ぞ
汝が結びし
藪の小鳥に
思ひ煩らひ
尾上に住める
いかで懐へむ
あはれ勇める
この琴糸の

亂るらむ
兵卒は
捨つるらむ
代る身を
常盤松
うらめしき
玉の緒は
あるならば
まかすがに
荒鷲は
えもたへむ
亡魂よ
何時かまた

汝が命に
誰かは惜しむ
思へばあはれ
この一本の
この空蟬の
いと哀れの
果敢なき籠の
思ひ忍びて
あへなき檻の
狂ひく
余が琴糸を
再びひかれむ

替る身を
者あらむ
いとほしや
常盤松
世の中に
ものなりき
あけ暮れに
過るらむ
起臥を
死するなり
笑なせそ
その時は

朝あしたの飯いの
 遙はるかに勝まさりて
 朝あさ日ひのかけの
 白しろ波なみ高たかく
 夜よ半はんの嵐あらしの
 在ありし島しま根ねの
 珍めづらしと思おもふ
 よしや一度ひとたび
 わはれエレンの
 めでたき宴うたげの
 宴うたげの席むしろ
 エレンの爲ために

いそくと
 廣ひろげたり
 ここの席むしろ
 眼まなこに
 そなたをば
 心こころよ
 詫わび住すま居ゐる
 さえく
 打うち寄よせて
 嬉うれしさを
 ありしをば
 草くさむし
 とり設まひて

海うみな山やまなを
 まかはあれども
 輝かがやきわたる
 珍めづらしと見みる
 見みつむる事ことの
 見みるにはわらで
 鹿しかの皮かわをば
 淋さびしかれども
 朝あさ戸と出で清きよき
 玉たまの臺うたぎの
 思おもひいでつゝ
 エレン自みづから
 世よにも氣け高たかき

どりひろげ
 かゝる世よに
 この室むろも
 かげもなし
 あるならば
 なかくに
 衾ふとまちの
 まかすがに
 島しまかくれ
 此こ處ところよりも
 見みるならむ
 幾いく度たびか
 父ちちと共ともに

汝きみが空うつ蟬せみの
 遂つひに結むすばす
 共ともに悲かなしみ
 泣なきてともく
 汝きみが一本いっぴんの
 心こころは千ち筋ぢん
 朝あさ日ひの光ひかり
 獨ひとりつくく
 玉たま敷し軒のきに
 花はなどうつろひ
 花はなのとばりは

世よの中なかに
 成なりにたる
 歌うたはなむ
 歌うたはなむ
 常とこ盤ばん松まつ
 八や千ち筋ぢんに
 さし句こほふ
 ながめたり
 碎くだけては
 句こほふさま
 これならむ

よる方もなき
 そのいとほしき
 歌うたひて共ともに
 譽ほまれも清きよき
 枯かれにし色いろを
 思おもひ亂みだれて
 世よに美うらくしき
 朝あさ日ひのかけは
 錦にしき飾かざれる
 げにもめでたき
 宮みやに仕つかへる

片かた糸いとの
 其その人ひとも
 泣なくならむ
 常とこ盤ばん松まつ
 惜をしむらむ
 彼かの埃あしに
 室むろの中なか
 うらくと
 壁かべの上うへに
 玉たまの臺うたぎ
 たわやめは

袖を連ねし
 エレンの邊りに
 羨しげに
 野邊のすさびに
 邊りに座する
 聴くマルコムは
 心はよそに
 連ねし袖に
 布くも樂しき
 朝な夕な
 猶なかくに
 思ふ心の
 かばかり清き

その
 かしこまり
 ながめつゝ
 山狩に
 マルコムに
 何氣なく
 さまよふと
 こぼれたる
 人々ど
 軒のつま
 ふり出で
 今更に
 世の中の

馴れし狩犬
 エレンの樂しき
 浮世の事は
 心を寄せし
 狩の事をば
 答はすれど
 思ふけしきの
 斯る樂しき
 ありし昔の
 今日いま茲の
 嬉しきかげも
 忍びかねつゝ
 かゝる樂しみ

そのラフラ
 其際を
 思ひ捨て
 その父は
 うち語れば
 春鳥の
 幾度もか
 席をば
 島かくれ
 光りより
 ありけりと
 見るならむ
 知る人は

かゝる席に
 常に名残を
 何思ひけむ
 踏む足音も
 遠く聞ゆる
 沈み果てたる
 如何なる琴の
 こゝの玉しく
 櫓よりこそ

その
 別れなば
 惜しむらむ
 手弱女は
 慎しみて
 琴の音は
 手弱女の
 つまならむ
 窓近く
 きこゆなれ

折り節毎に
 思ひ沈みて
 垂れし首を
 窓の邊りに
 如何なる琴に
 心を引きし
 げにその琴の
 雲井に高く

思ひ出で
 ありけるが
 うちもたげ
 立ちよりぬ
 あるならむ
 琴の音は
 糸の音は
 聳えたる

その二十四 獄中獵夫の歌

「おはれやおはれ
 今は厭きたり

我が鷹は
 勞れたる

被ふれる頭巾に
 又わが愛づる

宿り木に
 狩犬も

繫がれてのみ
 手馴の駒も
 今は何のうく
 今は何のうく
 煩らはしくも
 手に取り持ちて
 緑の森の
 昔の時の
 昔にまたも
 我が心には
 壁に映れる
 天つたふ日の
 野邊の雲雀の
 あるからに
 徒らに
 見ゆるなり
 我もまた
 なりにけり
 送まじき
 小男鹿を
 懐かしや
 歸さまほし
 叶ひたれ
 あさましき
 暮れゆくを
 まひ昇り
 今は何ばみを
 廐の中に
 余が鷹我が犬
 囚屋の窓の
 張りたるまの
 狩人どもを
 終日狩りして
 今を昔に
 野邊に狩りして
 斯るもの憂き
 影をながめて
 知るてふ事は
 謠ふ聲をば
 嫌ふなり
 日數経て
 我が駒も
 起臥の
 梓弓
 引き連れて
 暮らしたる
 歸さまほし
 暮すこそ
 高殿の
 唯一人り
 好まトな
 打ちさへて

わけゆく天を
 歸る影をば
 斯るわたりに
 九重深き
 この玉敷の
 唯憂き雲の
 尾上の鹿を
 白露まげき
 門に嬉しき
 軒端の露も
 げにも嬉しき
 今は絶えけり
 思ひ知り
 ながめては
 あらまほし
 大内の
 この家も
 かゝるのみ
 狩り暮し
 夕まぐれ
 わきもこの
 いと清く
 そ
 余が身にも
 深山鳥の
 黄昏時を
 あまた聳ゆる
 宮にしあれど
 樂しき室は
 曉天近く
 衣の袖に
 家路を指して
 ふりはへて迎ふ
 夕べの色も
 げにや樂しき
 あらずなりけり
 うちむれて
 思ひ知る
 高樓は
 かのれには
 絶えてなし
 起出で
 散りかゝる
 歸り行けば
 袖のいろ
 深かり
 起臥は
 わきもこにも

その二十五

溢るゝ思ひの
 井堰の水の
 聴く手弱女は
 空と計りに
 如何なる風の
 近寄る人は
 来りし人は
 先に名乗りて
 そのヒツゼームス
 歌ふあらむに
 「あはれ嬉しや

やるせなく
 堰きかねて
 魂ひも
 ながめたる
 誘ふらむ
 誰ならむ
 スノードンの
 手弱女に
 其の人ぞ
 わびしやと
 わが君よ

歌も詞も
 そこに碎くる
 うたふ歌にや
 険にかゝる
 折りしも軽き
 見かへるエレンの
 はにふの城の
 指輪を贈り
 またも彼方に
 心急くまゝ
 この孤子の

なかくに
 音苦し
 入りにけむ
 一時雨
 靴音の
 はた近く
 君なりと
 歸りたる
 四人の
 手弱女は
 賤の女が

君に受けたる
 此の世の中に
 「あなざる事を
 恵を受けし
 指輪を遺し
 恵とこそは
 み命恙
 神の恵みの
 あはれ妙なる
 願の爲めに
 我が力にも
 あはれ天皇は
 大御心の

其の恵み
 今更に
 云ひなせそ
 事あらむ
 参りしも
 思はざれ
 なかれとて
 外ならず
 たわやめよ
 今こゝに
 叶ひたり
 怒りの雲
 掻き曇り

かへし奉らむ
 絶えて有りとは
 汝はいかで
 あはれ先つ日
 おのれが姫に
 汝が氣高き
 神の賜ひし
 さはさりながら
 汝が天皇に
 汝が案内と
 いでや天皇へ
 奢りの風に
 亂るゝ事の

すべとては
 おもほへず
 われ連れの
 岩の屋に
 爲したりし
 父上の
 ものならむ
 さりながら
 願ふべき
 なる事は
 なるべせむ
 あへなくも
 ありとても

政の庭の
静に首を
聴てエレンは
ヒツゼームスの
あやしき人の
たなびく雲の
山の端近く
眼も眩む
數も覺えず
玉に錦に
内は輝き

ありさまを
うち擡げ
柔しげに
袂も
見ゆるごと
雲の間
沈む日の
そのけしき
集まれば
身を飾り
輝き

恐れかしくみ
世に美しくしき
二足三足
我が身を支へて
エレンの目には
怪しき姫の
八汐色濃く
夏の夕べの
げにも玉敷く
花かどまがふ
光りならざる

見渡しぬ
大君の
進み出で
ありけるが
光りけり
見ゆるごと
照り渡り
黄昏に
宮の中
人々の
隈もなし

その二十六

玉なす扉
今は何處へ
錦を布きし
叶はでやはど
望みな捨そ
ヒツゼームスは
又もやえさる
いろねの袖に
エレンは今更
いでや急がむ
政の庭に
いでや行かなむ
道てふ事は

押し開き
來りけむ
わた殿を
柔しげに
手弱女よ
やさしげに
一時雨
絶るごと
胸踊り
たわやめよ
出で給ふ
たわやめよ
露ばかり

いざとばかりに
ヒツゼームスは
廻りく
慰めきこえ
汝が願ひは
拭ひて又も
はらく落る
彼方の腕に
心もそ
人の心の
時は空しく
王は必ず
知らぬ人には

導きたり
立ち寄りて
ゆき行けば
つれ立ちぬ
叶はなむ
やさしげに
涙をば
取りすがり
といろかれ
柔しさに
過にけり
玄のゝめに
在らぬなり

あはれ恐き
 其の大君は
 心一つの
 定るといふ
 見むと思ひて
 げに大君と
 數多輝き
 此方彼方と
 こはそも如何に
 花を着飾る
 冠を被ふる
 ヒツゼームスと
 被りものをば

天皇は
 何處ならむ
 よしあしに
 その大君
 手弱女は
 思はるゝ
 幾かりたる
 幾かへし
 こは如何に
 その人も
 人もなし
 名乗りたる
 着けてあり

此國をろし
 その大君の
 此の世の人の
 何處にましまし
 彼方此方と
 うまし人等は
 かどりの衣の
 幾衣手を
 玉なす姿の
 皆あらはなる
 かゝやく政の
 其人計り
 句ふ少女の

召し玉ふ
 むら肝の
 淵瀬さへ
 玉ふらむ
 詠むれば
 數知れず
 袂をば
 ながむれば
 その人も
 額の庭に
 此の庭に
 其の人の
 袖毎に

こぼるゝ笑みは
 百の司の
 ヒツゼームスに
 わはれ輝き
 ヒツゼームスは
 水際すゝしき
 こはそも如何に
 いひける人は
 天皇なりとは

皆共に
 人々
 集まりぬ
 花やぎし
 唯一一人
 姿に
 スノードンの
 かしこくも
 思ひきや
 その二十七

ヒツゼームスを
 ながむる眼は
 綾の袂や
 まどる真中に
 緑の狩衣
 あたりを見下し
 はにふの城の
 スコットの國を
 降り積りたる
 げにその落る

迎ふなり
 皆共に
 玉の袖
 唯一人
 飾りなき
 立ちてあり
 君としも
 しろしめす
 白雪が
 雪のどど

わはれ柔しき
あなかしこしと
伏し拜みけり
かくも願はむ
兼て思ひし
云はむとすれば
むせびかへりて
王に指輪を
思ひはげにや
心は深き
斯る悲しき
跪きたる
折りしも四方の

たわやめは
身をすべり
天皇をば
まかも告げむ
事ながら
今更ら
言の葉の
奉り
天の原
天の皇
袖の雨
エレンをば
人の群

身を支へたる
天皇の裾に
天皇にまみえむ
頼み聴えむ
岩下水の
胸にせかれて
只一言も
諸手を摺りて
果てなき色も
あはれ刈萱
よそに聴くべき
いとやさしげに
こぼす笑みをば

王の手ゆ
その時は
まかくと
なかくに
せきあへず
えも云はず
うち仰ぐ
籠るらむ
つかのまも
天あらむ
かいあげて
見かへりて

屹度一目に
緑の髪を
わななく思ひ
「あはれ手弱女
ヒツセームス
國に住へる
心に願ふ
我がまのあたり
聴くべき證に
いかでか仇に
汝がダグラスの
汝が父と
根ざしもあらぬ

押へつゝ
かい撫で
やみてよと
先つ日に
名乗りたる
人々の
ものにこそ
つげよかし
なさむとて
遺すべき
身の上は
わが
人の言の

エレンの額に
今は氣遣ふ
言葉やさしく
汝が島邊に
おのれは此處の
赤き心を
汝が悲しむ
汝が願ひを
預け置きたる
さはさりながら
また何事も
汝が父は
言の葉故に

散りかゝる
事なせそ
慰さめつ
さまよひて
スエットの
常にかも
汝が願ひ
何時何處
此の指輪
こやエレン
願ひなせそ
浮草の
果散もなき

さすらひ人ど
 汝が父の
 恨みてのみは
 互に語り
 また結びたる
 卑きものゝ
 かにかく聴くを
 心の誠まことに
 汝が父の
 ホスウエル城の
 わが大内の
 今云ふ言葉は
 ふりの袂たもとの

なりはて、
 族の中
 ありしかど
 語られつ
 友がきは
 罵しりて
 好まねば
 助けられ
 ふみし道
 ダグラスも
 礎いしぞへ
 はつかにも
 今更いまさらに

恨みてありしが
 真心まごころあらぬ
 よべその恨み
 隔へだての垣かきは
 昔むかしに變かはりは
 聴きこゆるごとき
 一人静ひとりしづかに
 國くにの掟おきてに
 正ただしとこそは
 今いまより後のちは
 あな如何いかなれば
 そでなき心こころは
 ふりわけかねし

余われはまた
 もの故ゆゑに
 その昔むかし
 あと絶たえて
 わらぬなり
 言ことの葉はは
 よしをき、
 頼たよりつゝ、
 思おもひたれ。
 我が友ともぞ。
 たわやめよ
 なきものを
 汝ちが姿すがた

いでくこゝに
 おのれか赤あかき
 誠まことどなさぬ
 偽いつはりりどては
 天皇みかどの言葉と
 蜉蝣かひらならで
 嬉うれしや父ちち上うへ
 縫ぬりて現うつに
 我が身みにひしど
 父ちちよ嬉うれしど
 千々ちぢぢに碎くだくる

その二十八

ダグラス殿
 心に
 たわやめに
 露つゆばかり
 諸もろ共ともに
 昨日きのう日ひけふ
 父ちち上うへと
 泣なきまどふ
 抱いだきしめ
 子こは云いへば
 父ちちの涙なみだ

汝われか助けを
 仇あだなる色いろは
 我が言ことの葉はの
 無なきてふ事ことを
 いらへて出いでし
 身みに立たち添そひし
 夢ゆめかど計はかり
 あこよくと
 からと計はかりに
 あこよ嬉うれしど
 こぼれて瀧たきつ

貸かせよかし。
 無なきものを
 葉は末すえにも
 知しらしてよ。
 父ちちのかけ。
 父ちちのかけ。
 取とり縫ぬり
 ダグラスも
 見みえにけり。
 父ちちは呼よび
 子この涙なみだ

つきせぬ底の
けふ計りこそ
嬉しきものと
父はわが女を
かのづからなる
世の浮草の
二人の袂に
朕が迎へし
おはれめで度
互に遇ふなる
いで聴ねかし
いばらが奥の
峯の小男鹿

雲をば
天地を
思ふらめ
女は父を
よろこびを
人づれに
立ち寄りて
天津姫
けふの折り
本末を
もとすゑを
谷がくれ
森の鳥

汲むなる雲の
まろしめすてふ
まかはあれども
嬉しと歡こぶ
菅の根ざしの
見する事をば
「おはれダグラス
餘處には夢な
嬉しきけふの
おのれ告むと
おはれ先つ日
怪しかれども
おはれは深き

上人も
力をば
せしむは
父と女が
久しくは
好まずや
願はくは
みちびきそ
此の折りに
おもふなり
たわやめよ
まかすがに
山の路

姿やつして
國王なりと云ふ
余はさゝやかなる
ヒツゼームスど
汝に告げけり
偽り言の
汝を偽りし
おはれ此の城
スノードンてふ
朕を呼びたる
名を包みたる
思ふ心は
破れる人を

唯一人り
我きはを
スノードンの
呼ぶ者と
去りながら
徒らに
ものならど
水垣の
名なりけり
ヒツゼームス
旅の袖
此の國に
正さむと

さまよひ行きし
人につまむ
はにふの城の
朕が名ならぬ
よしや誠を
ねもなき名をば
今はスターと
久しき時の
またノルマンの
其の名を名乗り
姿をやつす
國の掟を
或は故なき

其の時は
たよりにと
君にして
朕が名を
つゝむども
語らひて
うたはるゝ
昔に
人々が
行きしなり
草に枕
起臥に
あだ波に

うち寄せられて
ありとし聴かば
かく語りしが
つまどに通ふ
「あはれ柔しき
人の聞かなむ
あやしき島の
常に柔しき
獨り誇れる
靡くと計り
あたりは雲に
怪しき路を
思へば彼所の

うき淵に
救はむと
せームスは
遠山よ
少女よ
事をしも
磯近く
汝が袖を
心よ
思ひ入り
つゝまれて
顧みず
路の邊に

遣る瀬なき身を
思ひしなりける
何思ふらむ
松のあらしの
山の奥がの
我は悔しき
葎が軒の
わがうかれたる
我が行く袖に
獨り心を
越し方行く末
汝を尋ねて
世の語り草と

かこつ者
その旅寝
小夜更けて
音もひく
時鳥
事ながら
若柳
心よ
懸りし糸
引れゆき
わけかねし
ベンベヌ山
徒らに

成りもまづらむ
彼所の山の
成りも果てけむ
思へば心の
かく語りつゝ
軒端の松の
「我が赤心の
なほも放たず
父のみならで
如何なる事を

はせまで
山だちの
程まで
浅間しや
せームスは
音高く
證しなる
持つからは
汝はまた
願はむす

汝が天皇は
劍の錆と
深くも迷ひ
人の聴なむ
峯の嵐の
鳴るかどばかり
ヒツセームスの
あはれ少女よ
朕に願ひの
汝が願ひ

あやふくも
あへなくも
行きたりし
事ぞ苦しき
音まして
聲高く
指輪をば
こやエレン
在りど見ゆ
余は聴かむ

その二十九

かしこきエレンの
心には

天皇の言葉は

わくるらむ

張りたる弓の
花の心も
花はあはれぞ
嵐吹くなり
彼方は頼む
花は夕べも
げにもめで度
「いどもかしこき
彼のロ德里ク
「汝が願がひ
天つ神にも
返らぬ魂を
さいさりながら

袂に
句ふらむ
ロ德里クよ
花に今
空あらむ
知ぬなり
エレンさは
事ながら
上にこそ
やみなまし
あらざれば
どいむべき
その人の

散るを惜しめぬ
月はなづかし
雲かゝるなり
雲かゝるども
嵐すさぶど
エレンはかくど
げにも柔しき
願ふは大君
大御恵みを
よしや哀れど
水泡と共
術は朕とて
心の中は

武士の
マルコムよ
月に今
月なれば
きこえて
思ひけむ
エレンさは
此の上は
願ふなれ
思ふども
逝く人の
知らぬなり
朕知れり

堰の水の
思の底の
如何なるせをや
かしこきエレンの
悟ると共に
射る矢の如く
げにマルコム
あすの如何にや
曇る袖には
更らに思へは
彼を悲りて
國王に弓を
妾が父の

せきかねて
戀ふらむ
心には
其の人を
たわやめの
身の上
時雨らむ
なかくに
かのロ德里ク
おひすらむ
引きたるも
ゆるなれば

下に苦しき
いかなる世をや
天皇は覺り
早くも思ひ
思ふ心は
胸をのぶかに
浮雲かゝる
人故曇る
月の心の
限もあらず
思へばあはれ
國王の悲りに
引かば返らぬ

たわやめの
思ふらむ
玉ひしど
悟るらむ
梓弓
さしてけり
昨日けふ
其の人の
句ふなり
大君は
其の人の
ふれたるも
梓弓

其の人の手も
 朕は受けたり
 朕の試みぬ
 引かば留まる
 よきが中にも
 活さまほしく
 人の命を
 甲斐なきものに
 又願ふべき
 救はまほしき
 瀧つばかりの
 この夕波の
 國王に告てど

朕知れり。
 先つ日に。
 先つ日に。
 ものならば
 よき州の
 思ふなり。
 いかにせむ。
 あらずして
 事なきや。
 友なきや。
 思ひをば
 この年
 いひ顔に

彼れに厚き
 彼が勇める
 よしや絶えても
 彼のアルピンの
 侯どもなして
 朕も思ひは
 さりさりながら
 汝の外には
 四屋の窓の
 エレンは顔に
 なほうちつけに
 底の心を
 かなたの方を

もてなしを
 太刀術も
 玉の緒の
 その酋長を
 世の中に
 堪へざれど
 少女子よ
 此の朕に
 うきせより
 夕波の
 云ひもえず。
 汲みわけて
 顧りみて

父に指輪を
 今の失せたり
 道てふものい
 いでやマルコム
 それうちきいて
 うちもまはれて
 汝がうき床を
 絶えて此世に
 直なれとのみ
 他所にうち捨て
 年月清き
 植ゑてあはれど
 思へば恨みの

うち渡せば
 その力
 そむかれじ。
 此處へ來よ
 マルコムハ
 ひれふまぬ。
 清めてど
 あらぬなり。
 教へたる
 直ならぬ
 汝が宿に
 ながめたる
 なくてやは。

「わが質けたる
 さりさりながら
 道を踏まずで
 此方へこよ」と
 天皇の御坐の
 「いで遙くまじき
 露のあはれを
 余が起臥に
 やさしき庭の
 曲れる道に
 世に濁りたる
 汝が心の
 いで此ものを

この指輪
 天が下の
 なにかせむ。
 呼ひ玉ふ。
 下ちかく
 マルコムよ。
 乞ふ人も
 なよ竹の
 教へをば
 ふみ入りて
 人草を
 あはれやな。
 いましめよ。

かくのたまひて
親ら胸に
そをマルコム
の
エレンの袖に
このつま捨る
にしきの紐の
げに大君の

大君は
かけられ
肩にか
結びつけ
事なせそ
つまどつ
恵をば

何思ふらむ
黄金の紐を
紐の端をば
朕が與ふる
必ず捨てなと
ながめてよろこぶ
仰がぬ人は

うち笑ひ
ひきよきて
ひきよせて
此の紐の
のたまひて
大御心
なかりけり。

湖上の美人終

明治二十七年三月廿二日印刷
明治二十七年三月廿五日發行

正價金六十錢

譯述者

鹽井正男
東京市本郷區駒込東片町
百六十一番地



發行者

加藤鎮吉
東京市神田區表神保町二番地



發行所

開新堂書店
東京市神田區表神保町二番地



版權所有

印刷者

杉原辨次郎
東京市京橋區元數寄屋町
四丁目二番地杉原活版所

